388.1-Y53ウ
1200500741212
388.1
Y53
ウ
複写

始

トエ-IV-49
388.1
Y53

日本放送協會編
柳田國男監修

日本昔話名彙

日本放送出版協會刊

國立國書館
昭和23.5.18
購入

序

人は古來、物語を欲する。物語の生誕は、その人々の先天的な欲求に因由する。我國に古くから傳はつてきた昔話のたぐひも、その創造傳承の經過にはいろ〳〵の系列があるであらうが、所詮われわれの祖先が、日々の生活の中にこれを求めたためであつたと言つて間違ひはなからう。

われわれは、物心のついた幼い時分から、數多の昔話をきかされてきた。祖母や母の口から、また遠國の緣者から、學校の先生達から、さらにいくつかの書籍の中からもこれを貪り讀んできた。記憶を辿れば、全く降る星の如く、數限りもない物語りの群列であり、盡きるを知らぬ昔話の重疊である。われわれは、いつまでも、曉暗のやうな仄暗い活氣の中に、幼い心の跳躍をふり返るのである。

心のふるさとにも響ふべき〝昔話〟の思ひ出！　それは世のすべての人々の胸に必ず湧き出づる人生の命の泉である。

それに、われわれは、世界の一人であると共に、また祖國日本の民族の一人でもある。この國の歴史と、この國の地勢と、この國の民俗とが、どのやうな契機と角度とから、民族のための幾多の物語りを編み出したことか。これとそは幾世代かに跨つて、流るゝ水の如く變轉流替する民族の生態と、希望と、信仰と、そして進化する思想の姿とを

まざ〳〵と映し出す何よりも忠實な證憑である。たゞこれらの證憑は、大空にぶち撒かれた星座の如く、散漫な多彩であり、亂雜な多元である。これらの源を探り、その個々の特徴と指標を究め、類型と異質の本體を突きとめて、そこにさまざまの視角から、生々發展の體系をつくり、據りどころある分類の劃線を、未然の世代に向つて刻することは、民族の文化にとつて、甚だ大きな事業である。

民俗學の權威柳田國男氏は夙にこの偉業に着眼され、過去數十年に亘つて、これの資料の蒐集に留意されてゐたのであるが、「國民の文化のため」を大きな旗印とする當協會も亦早くからこの事業の完成を翼求するに切なるものがあつた。この兩者の一致した熱意が、遂に日本の傳説と昔話についての特別なる研究と記録の作成を、當協會から柳田氏に委囑するに至らしめたのである。昭和十五年（當時の當協會々長小森七郎）のことである。爾來柳田氏は傘下の同志十餘氏及び全國の同好多數の協力を得て、それこそ血みどろの努力によりて、この劃期的な大業を一應完成された。かくして出來上つた「昔話」と「傳説」の内、まづここには「昔話」をとりあげ、これを世に發表する次第である。この機會に一言しておきたいのは、このやうな事業は固より個人の能力だけで爲し遂げ得られるものではなく、二人と得難い柳田氏を中心に、選ばれた民俗研究の學徒の總動員によつてはじめて今日の成果を贏ち得たものであるといふ事實であり、その半面又當協會が、放送そのものと直接の關連を持たないに拘らず、邦家文化のための高い立場から、永年かなりの經費を負擔しつゞけたことをも附記しておきたい。

本書、その書形一見貧寒の觀はあるが、内容はまさに金玉、わが民族に贈る頗る尊い文獻であることを斷言し得られよう。ここに柳田氏とその協力者一同の勞に對し深甚の感謝をさゝげたいと思ふ。

尚「傳説」のほうは、改めて「日本傳説名彙」として引續き公刊の運びになつてゐる。併せて愛讀されんことを切望する。

昭和二十二年十二月

社團法人　日本放送協會

會長　高野岩三郎

昔話のこと

柳田國男

この書物を利用する人の爲に簡單に、昔話研究の意義と、併せて將來研究に志す者の注意しなければならないことを述べて見ましよう。

日本の昔話採集はまだ三十餘年の歴史しか持つて居りません。恰度グリム兄弟のそれよりも丸一世紀遲れて居ます。併しそれを必ずしも不幸なることゝ思はぬのは、第一日本といふ國がつい近頃まで斯ういふ古風なものを、ともかくも持ち傳へて居てくれたといふ嬉しさと、次にはこの最近の百年間の研究がみな、我々の新しく物を考へる役に立つといふこと、それでゐて世界の何處でもまだ心付かずに居たものを、これからでも我々の力で提供することが出來るからであります。

中世以來日本の昔話が、偶然に記錄に保存せられて居た例は幾つでもあります。第一に足利時代の半ばから傳はつ

て居る、お伽草子といふものゝ大部分が是であり、古く溯つては物語の親とまで言はれた竹取物語があります。この『竹取物語』は、當時傳承されて居た昔話の潤色であつたと、私などは思つて居ますが、それは偶然の書き留めであつて、是を考へて見ようとする人の覓錄では無かつたのであります。たしか明治四十三年に、私が『遠野物語』といふ書物を世に公けにした時に、その終りの所に遠野地方のムカシコが二つほど載りました。之はその著者が、偶然に子供の時の記憶を持つて居ただけであつて、それを筆記した私までが、まだ此時には「昔話とは何ぞや」といふ事を考へて見ようともしませんでした。所が、それから十數年の間にそちこちから非常に完全な形で、數多い昔話があらはれて來て、今では岩手縣は全國にも珍らしい昔話記錄の豐かな所となつて居ります。さうして是を最初に紹介した佐々木君がまづ洗禮を受けました。今日の昔話の研究者の隨一と言つていゝ關君などが、はじめは傳說に深い興味を持つて、それを公表するのに力を傾けて居たのでありますが、よく聽いてみると、この人のお母さんといふのが多くの昔話の傳承者であり、別にその村にはもう一人、お爺さんで型の變つた昔話を澤山記憶して居て、人に話したがつて居た人があつた、といふ事が判りましたが、關君は無意識の中にこの昔話の感化を受けて居たのであります。全體に傳說といふものと昔話とは、意義も違ひ方向も異るものでありますが、妙に一方の大切に保存されて居る所では、他の一方に對する關心も深かつたやうであります。この二つのものゝ關係は、あらためて一ぺん、よく考へて見なければならない問題だと私は思つて居ます。

そのうちに色々と珍らしい事實が發見せられましたが、すでに當時にも、並以上に昔話の好きな人がまれ〳〵に、地方に散在して居るといふことが判つて來ました。文字に書き留めて殘して置かうとはしないでも、さういふ人達の

長い一生の間には、お弟子とも謂ふべき人が二人か三人かは出來て、その流れは絶えずまた時々は大きく成長さへして居たのであります。愉快な一つの發見は、西國の壹岐島に吉野秀正といふ學者があつて、非常に綿密な島の地誌を著したので、私なども名を知つて居たのですが、この人の筆豆な書き留めの中に、驚くべく多量の昔話を集めたものがあつて、あの時代としては大きな一つの例外を示して居ります。是が機緣となつて、山口麻太郎などゝいふ人が昔話に心をひかれて、あの小さな島が西の方での昔話研究の一つの中心となつて居ります。さういふ實例はまだ他にも大分ありさうな豫感が、私たちにも抱かれました。たとへば、三河に旅した人が、偶然に古本屋から見つけて來た、小さな一冊の繪本と題する寫本は、十ばかりもの昔話を一言の註釋も附けず、繪に描いたものでありましたが、それを見てもあゝあの話と解つて、面白がる人が當時すでにあつたのですから、之も亦愉しい除外例でありました。それで私達はどうも自然の成行きに任せて置いてはならぬといふ氣が起つて、そろ〳〵全國的な採集を始めようとしたのであります。

その最初の仕事を援けたのは、『旅と傳說』といふ雜誌でありました。是は二回に亙つて昔話特輯號を出したのでありますが、これで始めて知つたことは、全國どの方向を向いても、何處かに小さな中心地があり、何處かに話に興味をもつて居る人があつて、しかもその記憶して居る昔話には、見損ふことの出來ない一致があるといふことでありました。昔話に四國の話とか、北陸の話とかいふ特徵は無いのであります。そこでこの二冊に集錄された昔話によつて、全國的蒐集の興味を抱かしめられ、更に昔話といふものは、型を標準として研究すべきものであるといふことが判つて來ました。もつともその暗示を與へられた書物は、外國のものにも少しづゝありました。アアルネ・トムプソ

ンの綿密な分類の出たのこそ後のことでありますが、例へば英國民俗學協會から出版したミス・バーンの書物の中には昔話の型がたしか七十二種類ありまして、その中には彼地では有名でも、日本ではさうでないものが若干はありましたが、大體は似て居て、日本と離れた地にも似よりの型を探せば拾へるといふことが判つて、我々の企てを激勵しました。今でも自分の推算は狂つては居ない樣ですが、極小さな笑話の類を除けば、英國より少しは多いが、日本の昔話の主な型はまづ百内外と謂ふことは、間違ひないと思ひます。それ以外のものは痕跡として殘つたものくらゐで、さう確かな事を請合ふわけには行かないのであります。

この意外なる現實に勵まされて、私は更に二つの計畫を立てました。その一つは昔話採集手帖の發行で、これは小さな割合に骨の折れた仕事でありました。百と限られた數の中で、著名な昔話を選び、その實例を一つづゝ擧げて名をつけました。そしてその一方の頁は白紙のまゝ殘して採集實例を記入する樣にしましたから、話の筋も詳しくあげると長くなつて邪魔になるので、要點を記錄するに止めました。是が今度の『日本昔話名彙』の基礎となつて居ります。そしてこの手帖のはじめには、少し大膽すぎたかも知れませんが、まだ昔話に興味の淺い人々に「昔話とは何ぞや」といふことゝ、蒐集の意義について說いてみました。此仕事は或團體の補助金で行ひましたので、手帖は殆と全部知人にわけてしまつて、現在では僅か二三冊殘つて居るばかりです。困つたことに標本として擧げた實例は、出來るだけ簡略に筋だけ書いたのですが、それでも讀物として面白いので、各自所藏してしまつて、新しく話の記入されたものが戻つて來るといふ、最初の計畫ははづれて、一冊も返つては來ませんでした。返しこそはしませんでしたが、この手帖を持つた人々が昔話を好むやうになつたことは爭へないでしよう。旅に出て極片田舍の農家などに泊つた夜、爐邊の平和な暖かな光の中で、この手帖を取出して讀んできかせたり、或は見せなどすると、その座の人々の中に一種の活氣が感じられて、顏を見合せて笑ひ、又知つて居る話を語り出す者さへ出來て、急に心持はほぐれ、和やかな空氣になつてゆく、斯んなことは民俗學徒のみが味はへる幸福ともいふべきもので、單に昔話に限らず、他の部門でも同じことが謂へるのですが、特に昔話採集の際に多いといふことは、私達から謂ふと同情せずには居られないのであります。といふのは、以前の農漁村の淋しい生活には、祭や節供の日を除いては昔話以外に平生の心を慰めるものが無かつたといふことが、間接に判るからであります。この研究によつて凡人大衆の生活の歷史があとづけられるといふ事を知り、更に自分等の樂しみ慰めと謂ふに止まらず、一國の事業とすることを考へて、『昔話研究』といふ雜誌を發刊することにしました。これは前からのかゝり合ひで、『旅と傳說』の萩原氏が一ケ年だけ出し、その後他の本屋で引受けて發行しましたが、その店の他の事業との混亂などの爲に、二年で後がつゞかず終つてしまひました。この雜誌などには讀者の側から、原稿を送つて來なければ載せないのですから、是が出てゐる間は蒐集の効は奏せられるわけですが、中にはウソ話やこしらへ話があつて、選擇には骨を折りました。ともかくも斯ういふものを續けてさへ居れば、國内に保存せられて居る昔話の一部分だけは集めることは出來たのですが、嚴密に謂へば雜誌といふものは、場所に依つて行く所と行かない所があり、また是を他の目的に使ふ人もあつて、系統立つた採集といふことは出來ません。若し事情さへ許せば、他の方法を採る事も考へたのですが、それがむづかしい事ばかりでした。といふのは昔話を知つて居る人は少ないので、熱心な傳承者にぶつゝかるのは、恰度盲探しの樣なまだるつこい仕事であります。例へば靜岡縣の師範學校で、『靜岡縣傳說昔話集』といふ書物を出して居ますが、注意深く見て行きま

すと同じ話でも人によつて語り方が違ふ中に、伊豆に姉妹二人と、遠州だつたかに一人印象の深いいき〳〵した報告を寄せて居る女生徒がありました。さういふ人の母なり祖母なりには、よい傳承者の在つた事は疑ひも無いのですが、その時直ちに出かけて採集をすればよいのですが、さうも行かない色々の事情にさまたげられて、時移り人は過ぎてしまひます。自分等の熱心は未だかのグリム兄弟に及ばなかつたとも謂へませう。しかしこの儘にして置けないといふ氣持は常に強くて、少しづゝ積極的な行動はして居ました。それと目ざした人に手紙を出したり、啓明會からの補助金に依つて少しづゝ採集に歩いたり致しました。この結果として數冊の昔話集が出ましたが、中でも佐渡と甑島とは、何の手がゝりも無い所に行つて、相應な成績を擧げ得た例であります。川越の昔話集は、土地に熱心な人が居て出來たものであります。此等を比較して見ますと同じ一つの話でも土地によつて變つて居ますし、その變り方も奇拔でありました。又二百里三百里と隔たつて、到底交通もあるまいと思はれる所に同じ話が在つたりして、研究の興味は深くなるばかりでありました。この昔話研究の興味をもう少し廣めようとしたのが、第四の『全國昔話記錄』發刊の事業であります。恰も戰時に當り讀物の乏しい、けはしかつた時代であつた爲に、豫想以上の賣れ行きを示して、戰爭の終りまでに十三冊が刊行され、まだ出せば出し得るものが、私の手許にも大分殘つて居ます。早く續けねばならないと思つて居ります。

この採集出版の事業の間、私が心づいて非常に氣丈夫に思つて居ることは、概して昔話は老人、殊に女の年寄が持つて居て、此人々を最後として傳承の鎖は斷たれてしまふものゝ樣に思つて居ましたが、人が昔話を喜ぶ心といふものは若い時に萠すのであつて、昔話に對する理解とか同情とかいふものを持つて居るのは、口にこそ出しませんが、年頃の人達にも生活にいそがしい主婦達にもあるといふことが經驗せられました。けれども今の社會にはもう一段と人の心を動かすものが、特に戰後に多くなつて來て、それが人々の注意力を集めるために、素質はよいものを持つて居ても、外部からの影響が大きいため記憶を粗末にし、いはゞおざらひが少なくなるので、大體の傾向としては滅びる方に傾いてゐるのは事實であつて、今日では絶滅の危險が無いとは申せません。又それと同時にこの現實のはげしい時代に、何處かに休息を求めようとする氣持もそちこちに有ると思はれますから、再建の一つのてだてとして、この書の世に出ることを我々が先づ歡迎する理由であります。

歷史の學問の一般的な傾向で、必ずしも昔話の研究に限つたことではありませんが、初めの頃には起原論に重きを置く傾きがありました。昔話はフィクションだけれども、最初から文藝として是を樂しんだのではあるまい、斯ういふものを創作する文化能力の無い、極めて開けない野蠻と謂はれる人々の間にも、形の似たものゝ有るといふ事實は人間の藝術心よりもつと古い、基礎になるものがある故で、神話がその種子では無いかといふ疑問が、期せずして國國の學者の間に起つたのであります。神話といふ言葉は哲學的神學的に使はれて居ますので、私等は努めて避けて使はぬ樣にしてゐますが、信仰が無ければとても信じられない話を、現實として信じて語り聽かうとするのが神話であつて、現在でも神話學などゝいふ人はその中に昔話の起原を見ようとして居ます。間違ひは無いかも知れませんが、直ちにさう謂ひ切ることは六つかしいと思ひます。是を證明するには信仰は既に變化して居るのだから無理な事でありましよう。昔話の中に我々祖先の古い信仰を見出さうとすることは愉しい事ではありますが、今日の如く證明が學問の基礎をなす時代には、これは甚だ危げでむしろ學問を道樂にし玩具にする惧れがあります。見過してはならない

問題ですが、これだけで昔話を研究しようとするのはやゝ頼りないことでもあり、又すゝめることも出來ません。ところが今日となると、まだそれ以外に幾つかの學問上の樂しみを拾ふことが出來ます。國際的に謂へば、表面上緣の無い民族の間に、爭へない一致を示して居るといふことが其一つ、グリム兄弟の採集した話の中に日本でそつくり同じ形を持つたもの、或は似よつたものがある。五十位有るといふ人もあります。この中若干のもの、例へば「豆と炭と藁しべ」「猫と鼠」「手無し娘」「鹽吹臼」などの話は、彼方から日本に輸入したといふ人も有りますが、それは南蠻貿易が始まつて後といふ事が明確に分るのならばともかく、それ以前から傳はつたものもあるでしようし、又新らしい交通の影響の到底及びさうも無い地方に有る話などは、輕々しく輸入だなどと謂ふことは出來ません。私達が「糠福米福」と呼んで居る繼子話などは、たしかに西洋交通の以前から有つたものであります。また證據も無いのに印度から支那を經て、渡來したものゝ樣にいふ印度起原說といふのもあります。想像說としては興味がありますが、確かにさうだと決めるには未だ距離があります。佛典のすみ〳〵までを讀破して居る樣な人が、農民漁夫の間に話の運搬をして居たとは考へられず、說敎の間に語り傳へたとても、その人々の必要とした話の數と謂ふものは限られて居ります。支那を中間として考へても、記錄の年代の前後ばかりで、前の方から後の方へ移入されたと見ることは無理でありましよう。同じ話が異つた民族の間に、偶然に何の關係も無く存在することは想像し難い所でありますが、何故に斯うなつたものでしようか。或は歷史に殘らぬ時代に於て、民族の末端どうしに交渉があつたのでは無いかとも考へられますが、言語の垣根の高さを思へばそれも亦無理の多い話であります。しかし昔話は比較すればする程、民族間の一致は著しく、やはりいつの時代かに、斯んな昔話の樣なものをさへ運ぶ親しい交通が、我々の氣付かぬ所に行はれて居たかも知れないといふことに歸着するのですが、もしさういふ事實が假に有つたとすれば、我々の世界文化觀は變らねばなりません。說話の運搬は我一國の中でさへも奇蹟で、東は奧州の果から南は沖繩の島に至るこの間を持ち運ぶことがすでに困難な事實であります。戰亂などの他に國內民衆の接觸が若し行はれて居たとしても、用さへすめば急いで歸つて來る程の交通に過ぎなかつたのですから、これだけ親しい昔話の流通があること、それ自身が珍らしい過去文化と謂はなければなりません。何事もまづ手近い所から考へて行かうとして居る我々は、この問題に對しても、どんな人々がどの樣な方法で運んだかといふことを研究をするのですが、座頭や巫女、旅藝人などが持ち歩いたのは疑ひの無い事實であります。昔話の傳承にも二通りありまして、一つは此等の旅して歩く人々が持ち傳へたものですが、この方には臭味ともいふべきものがあつてすぐ判ります。もう一つは家庭內での傳承で、祖父母から孫子に傳へられる話は長い間には家庭化してしまふでしようが、きめは細かくなつて、先のものと比較しますと恰も織物の機械織と手織との差の樣に、二つの間には大きなちがひが出來ました。即ち利用者の側からの選擇が働いて居るのであります。

この問題を考へる爲に、私は今一つ新しい目安を設けて居ります。即ち話手の敏感で聽手の要望に應へようとするので、昔話の聽手が子供の時には話はあどけなく、山の中舟の上などで男の大人ばかりを相手にするには、あくどく下品なものに墮して行く樣に、需要者側の希望が當然にあらはれて來るのであります。私は是を指して讀者の文藝能力といふ言葉を使つて居ますが、昔話の場合などは語りの一回々々に變へて行くことも出來るのでありました。この問題を考への中に容れずに、たゞ同じ國だから地續きだからと、大ざつぱなことは謂へないのであります。

是を要するに大は各國の間に、小は一國の中に分布する昔話が、聽手に依つて姿を變へて行くそのプロセスといふもの自身が、昔話の起原や傳播の問題とは離れて、重要な研究題目となるでしよう。今日の文學にしても、作家は勝手に筋を運んで居る樣に見えますが、その大きな潮流は、讀者大衆の喜びさうな所へと流れて行く樣なもので、昔話は不定の期間ではありますが、過去千年間の一つの目標として、話の內容の問題とは別に、大きな文化財として、殘されるべきものでなければなりません。今日私共の立場としては、せめて何年何月頃に、何處の地方で、幾歲位の人に依つて斯く語られて居たといふことだけは、正確に傳へる樣にしたいと思ひます。故に此の書物の中には、ちよつと人の目に付かない用意が加へられて居ります。例へば國外のものと似て居るといふ點にのみ心をつけるならば、「糠福米福」と呼ぶよりシンドレラと謂つた方が印象は深いのですが、誰かゞ何處かで記憶し使つてゐた名をつけて置いて、この話の行末がどうなるかを、見屆けようとして居るのであります。名付けるにしても、歐羅巴のル・モール・ルコンネツサン（死人感謝譚）或はシンギング・ベウン（歌ふ骸骨）などゝいふ話と似た日本のものには、歌はないものもありますが、假に「歌ひ骸骨」といふ名を選びました。「鼠經」といふ一群の話は日本の各地に有る面白い話ですが、「鼠經」といふ名を以て呼んでゐるのは九州の一部にしかありませんが、よい名なので採用して居ます。話の型は約百と申しましたが、まだこの他にも取殘されて居るものが多くありましよう。私共が一番興味を持つて期待してゐることは、何處かの隅で消えかゝつてゐる話を拾ひ出して、もう一度世の光にあてゝ見たいのであります。此書物を利用される人々は、まだこの中に出てゐない、題名も型も變つて居る話を見つけ出して、編輯者たちに少しでも鼻をあかせる樣な氣持になつて欲しい。私達の足はまだ國の隅々まで屆いては居りません。さうして此書の發刊の副產物として、例へばココウ次郎の樣な話が、もつと整つた美しい形で、何處かに殘つて居るといふことを期待したいのであります。傳へられた瓜子姫の物語の末が、いづれも陰慘で暗い中に、たつた一つ仙北の奧に錦長者の名を以て傳はつて居たのは、繪の樣なうるはしい結末をもつたものでありました。もしも此書が機緣となつて、さういふものが發見された場合には、說話研究の上の効績のみに止まらず、それに依つて日本の昔話は再び大切な國の紀念物となるでしよう。今の時代としてははかないさういふ希望を抱きながら、この書の世に出て行くのを見送つてゐるのであります。

（昭和二十二年十月）

目次

序
昔話のこと
完形昔話
誕生と奇瑞……一
桃太郎・力太郎・瓜子姫子・錦長者・竹の子童子・子育て幽靈・雁の捨子・一寸法師・申し子話
不思議な成長……三
蛇息子・田螺長者・蛙聟入・蛤蟆聟
幸福なる婚姻……一五
隣の寵太郎・牛の嫁入・山田白瀧・雛聟・天人女房・繪姿女房・鶴女房・鴨女房・山鳥女房・鳥女房・狐女房・蛤女房・魚女房・龍宮女房・蛇女房・蛙女房・蛇聟入・鬼聟入・河童聟入・猿聟入
まゝ子の話……四一
藏福米福・紅皿鉄皿・皿々山・蟋皮・火焚き娘・灰坊太郎・繭子の椎拾ひ・底無し袋・お月お星・日まさり川・繭子の井戸掘・千把寛・繭子花・繭母の化物・繭子と笛・父の土產・手無し娘
兄弟の優劣……五七
兄弟話・弟出世・姉と弟・三人兄弟
財寶發見……六一
五郎の鉄椀・寶物の力・八石山・取付く引付く・ウバリヨン・天福地福・蛇と金の玉・財寶發見・黃金の瓶・壺中の蛇・人が見たら蛙になれ・味噌買橘・夢見小僧・夢の蜂・藥しべ長者・蜂出世・蜻蛉長者・炭焼長者・芋掘長者・大歲の火・大歲の客・笠地蔵・弘法機・青手拭・若返り水・黃金の鉈・龍宮童子・黃金小犬・忽ち小僧・龍宮入り・打出小槌・喇吹臼
厄難克服……八七
鬼むかし・なら梨採り・さやずりふくべ・人影花・鬼の子小綱・美女奪還・鬼ケ島脱出・七ツの釜・千里の靴・水の神の文使ひ・臆神退治・旅人馬・鏡鏡城・三枚のお札・鬼の家の便所・鬼を一口・耳切團一・鬼とにらみくら・天道さん金の綱・牛方山姥・食はず女房・口無し女房・妹は鬼・千匹狼・猫と茶釜の蓋・猫山・猫岳猫島・寶化物・山梨の旌・人食ひ薗・山寺の旌・一ツ家の旌
動物の援助……一三二
聽耳・金の扇銀の扇・尻鳴箒・文鳥茶釜・狐遊女・動物報恩・犬と猫と指輪・舌切雀・腰折雀・コヂウ次郎・猫檀家・

猫寺・見るなの蓆敷・猿の一文銭・鼠の浄土・地蔵浄土・團子浄土・花咲爺・竹伐爺・鳥呑爺・猿地蔵・瘤取爺

言葉の力……一四一

化物問答・智問答・灰の發句・大工と鬼六・子守唄内通・ズイトン坊

智慧のはたらき……一四五

狐退治・叭狐・片目ちがひ・似せ本尊・敗北の承認・孝行阪・化けくらべ・八化け頭巾・實物交換・腰れ義笠・鳥園屏・何が一番怖い・田野久・賢こ淵・蛸の足の八本目・大木の秘密・さとりのわつば・姥棄山・灰縄千束・女房の智慧・盗人女房・盗賊の賭・智慧あり殿・俵藤師・錢逃れ馬・金の茄子・日輪の下し子・話千兩・二反の白・狸の巣・名裁判・赤米と子供・蹴ひ直し・座頭の頓智・判じもの・和尚と小僧

派生昔話

因縁話……一八五

歌ひ骸骨・運定め話・三井寺話

化物話……一九〇

ちい〳〵小袴・化物退治・餅と白石・婆の三つ抜・蜘蛛の糸・小間物やと狸・狐退治の失敗・法印と狐・狐狸の仇蕎し・二度の威嚇・上下二つの口・猫と南瓜・猫の秘密・猫母・獺師と犬・雲雀と借金・雲雀牛飼・水鷺鳥・柿十と十一・鳶不孝・雨蛙不孝・鳩不孝・水乞鳥・鳩と親子・鳥紺屋・行々子と草履・鶴鶴は鳥の王・鮎朔と蛇と眼交換・かせかけ鮎朔・蒙の恩・雁と鴨・雀酒屋・蜥蜴の尾・虱と蚤・蚤蚊の起り・煙草の起り・海月骨なし・土鼠と蟇・蛟と蕈しべと豆・大根と人参と牛蒡・古屋の淵り・動物の授助・動物と人・狼と爺・動物競爭・狐と獅子と虎・動物葛藤・猿と貝・狸の占ひ・拾ひ物分配・雲は三文鳩八文・蕗と大豆・猫と鼠・狐と魚狗・屁尾の釣・獺と猿・狼と蟹と柿・餅爭ひ・猿と蟹と餅・猿と蛙の寄合田・鼠と鵝の寄合田・猿蟹合戰（髮むかし）蟹の仇討・雀話（雀仇討）かちかち山・狼の論・兎の奸計

其他（昔話と傳説の中間をゆくもの）……二九五

百合若大臣・蜜女の禮物・長柄の人柱・阿曾沼の鶯・蛮神と馬・人魚の食ひそこね・石像の眼に血が流れる日・物言ふ魚・小蛇の成長する話・鱧の骸骨を蹴たら・鱧に影を呑まれる・長崎の魚石

昔話の魅力……三〇三

果てなし話・うそ昔・昔や剝けた・話の三番叟・婆むかし

昔話の名稱・發端・結語など……三〇六

むかし・とんとむかし・ざつと昔・さる昔・げたげたばなし・ものがたり・早物語・秀句咄・佛舞・夜話・年取り話・連歌咄・狂歌咄・いもじ咄・子守話・うそとき・をどけ話・の主人公・昔話の始の句・昔話の結句・そりばつかり・とつぴんぱらり・がつさとうさ・とん・こん限いのむかあし・昔こつぽり・もうすべつたり釜の蓋・語つても語らいでも候・それでちよつぴりきのこめし・續き候・しやみしやつきり・いちご榮えた・昔話の合槌の言葉

資料の解説

索引

目次中傍線あるものは百の主なる題を示し他は派生せるもの

の浮瑠璃・物食ふ魚

笑話……二〇〇

一 大話……二〇〇

天上胡瓜・豆子話・鼠經・へやの起り・誰なら屁・屁放り話・見透しの六平・高名の鼻利き・運の良い俄武士・雀とり話・まのよい獵師・源五郎の天昇り・海老と大鳥・力くらべ・騙しあひ・術くらべ・どうもかうも・テンポ競べ・大もの競べ・長命競べ・嘘話・無精くらべ・無言くらべ・長者の寶比べ・咨さ比べ・こんにやく問答・三尺草鞋・三人泣き・醫者猫・三人片輪・癖をやめる賭・長い名の子供・土鼠の聟取・嘉兵衛鍬・氣にかけ爺さん

二 眞似そこなひ……三三六

旅學問（朱椀朱折敷）・粗相惣兵衛・言ひそこなひ・酒かす食ひ・唄があまる・茶栗柿・節古金・ぐづの話

三 おろか村話……三三〇

段々の教訓・愚か聟・口傳聟・糸引き聟・團子聟・餅は化物・瓶と小石・結付け枕・三人聟・愚か嫁・嫁に行きたい話・愚か村話・風呂場の餅・長頭をまはせ・引張昇・鳳投團子・耳掛け素麺・振り米・正月知らず・雉子鴉・座頭の卵・かずの子・松山鏡

鳥獸草木譚……三四一

雀孝行・時鳥と兄弟・百舌と時鳥・時鳥沓縫・時鳥と鑓子・時鳥と小鍋・片足脚絆・ヨシトク・郭公と母子・郭公と鑓

完形昔話

裝幀　恩地孝四郎

誕生と奇瑞

桃太郎

父と母とが花見に行つて雑煮を食べようとやすんで居ると、母の腰の所へ桃の實が轉がつて來た。母は拾つてふところに入れ、家に歸り綿にくるんで寢床に入れて置くと、桃が割れて中から小児が生れた。桃から生れたから、桃の子太郎と名づけた。桃の子太郎は父母が島に出てゐる間家に留守して學問をして居た。すると背戸の柿の木で鴉が地獄から手紙をもつて來たと啼く。鬼からの手紙には日本一の黍團子を拵へて持つて來て呉れと書いてある。桃の子太郎は父母に團子を拵へて貰つて、持つて地獄に行く。地獄の門を叩くと鬼が出て來て「日本一の黍團子を一つ御尤も」と云つた。分けてやると鬼共はそれを食うて醉つて寢てしまふ。桃の子太郎は大急ぎで地獄のお姫樣を車にのせて曳き出した。鬼共は眼をさまして火車にのつて追かけたが、その時はもう海の中に居て火車ではかなはなかつた。

桃の子太郎はとう〳〵お姫樣を家につれて來た。その事がお上に聞えて大變なお金を貰ひ、桃の子太郎は長者になり家も榮えた。

—紫波郡昔話集—

青森縣　津輕口碑集　一二

桃が箱に入つて流れて來た以外は標準のまゝ。

〃　八戸　昔研　二ノ七八

童子の名は栗コタンポ。山で拾つた栗の實が七日目に赤坊となつてゐる。後半脱落。

岩手縣　〔例出〕　紫波郡昔話集　一三二

秋田縣　仙北郡　角館民俗資料　三九

この地方では「股内太郎」といふ。雉・猿・犬をつれて鬼が島へ攻入ること。

福島縣　磐城昔話集　一九九

東京都　北多摩郡　昔研　二ノ四八

結末は猿蟹合戰の如し。

石川縣　江沼郡昔話集　一〇五

桃太郎異話・雛鼎蟹話・力太郎話を付す。

福井縣　坂井郡　昔研　一ノ二九

桃を臼の上にのせて置くと中から聲がして割つて呉れといふ。

この話は破片か。

山梨縣　西八代郡　續甲斐昔話集　二二四・二三〇

二話あり。この地方は、桃が手箱の中に入つて流れて來る。前者

はなかに柿が入つて居てその種をまき、後者は猿蟹合戦の話につゞく。

長野縣　小縣郡民譚集　一四七
岐阜縣　吉城郡　昔研　二ノ四五七
島根縣　隠岐　昔研　一ノ三二六
「あねさんとあまんじやく」
流れて來るのは桃。後半は瓜子姫話となる。
瓜姫との中間を行くものにて珍重すべし。
廣島縣　安佐郡　安藝國昔話集　五六
變例なり。破片か。やゝ物草太郎に近し。
高知縣　旅傳　五ノ九五六
「桃栗小太郎」
愛媛縣　北宇和郡　昔研　二ノ一三一
鬼退治の家來は石臼・針・馬糞など。
福岡縣　金救郡　福岡縣昔話集　一五五
これは東京にて聞くものと同じ、本よりつくつたのだらう。
長崎縣　天草島民俗誌　八三
婆が川で拾ふのは美しいベンタ人形。戸棚へ入れて置くと夜泣くので抱いて寢るとそれは川童であつた。
同縣　五島民俗圖誌　二四六

「栗姫」
栗の中より生れた子で父が病で鷲の卵をほしがるので取りに行く。
話は大分こわれてゐる。
鹿兒島縣　譯擬郡　昔研　一ノ三六六
「蛇報恩」

力太郎

不精な爺と婆とが身體の垢で人形を拵へ、コンビ太郎と名づけて育てる。大食ひでずん〳〵大きくなり、百貫の金棒をつくつて貰つて力業の修業に出かけた。途中御堂を背負つた御堂ヨ背負ひ、石を碎いて居た石ヨ太郎と力競べをして二人を家來にする。さうして或城下町に行くと豐閑だといふのに皆戸をしめて人影もなく町一番の長者らしい館に美しい娘が一人で泣いて居る。わけを聞くと月の朔日には化物が出て來て娘を一人づつ取つて行くが、今度は自分の番だから泣いてゐるといふのである。それではそれを退治してやらうとコンビ太郎は娘を唐櫃に入れ、御堂ヨ背負ひ、石ヨ太郎と共に番をして居た。
夜になると化物が出て來て忽ちのうちに御堂ヨ背負ひも石ヨ太郎も呑まれてしまつた。コンビ太郎は百貫匁の鐵棒を持つてかゝつて行くと棒は眞中からねぢられてしまつたので、取組み合つて化物の急所をついた。すると左右の鼻から御堂ヨ背負ひと石ヨ太郎を吹き出して死んでしまつた。家の人達も大喜びで三人を娘達の聟とした。コンビ太郎も爺婆を引取つて安樂に暮した。

——岩手縣和賀郡——　昔研　二ノ七八

青森縣　八戸
桃太郎の項參照
岩手縣　稗貫郡　昔研　一ノ二一六
〃　和賀郡　〔例出〕　昔研　二ノ一三七
〃　江刺郡　聽耳草紙　八〇
「三人の大力男」
石川縣　江沼郡昔話集　一〇五
桃太郎の項參照
〔參考〕
朝鮮民譚集　二五八

瓜子姫子

爺と婆とがあつた。爺は山へ薪を伐りに、婆は川へ洗濯に行く、或日婆は川へ行くと川上から瓜が一つ流れて來た。拾つて來て爺と二人で割つて見ると中から小さい美しい女の子が生れた。瓜子姫と名づけて可愛がつて育てる。大きくなつて毎日々々機を織るやうになつた。今年の鎮守のお祭には瓜子をつれてお詣りに行かうと、爺と婆とはお駕籠を買ひに二人で町へ行く。その留守に瓜子姫が機を織つてゐるとあまのじやくが來て、びつたりしめてある戸を少し開けてくれといふ。うつかり細目にあけてやると、あまのじやくはそこから怖しい手を入れてガラリとあけて入つて來た。そして瓜子姫を裏へつれ出して裸にして柿の木へ縛りつけ、自分は瓜子姫の着物を着て知らぬ顏をして機を織つて居た。そこへ爺と婆が町から駕籠を買つて歸つて來て、瓜子姫をのせて鎮守樣へ詣らうとすると、裏の柿の木のかげから本當の瓜子姫が、「瓜子をのせないでよう〳〵あまのじやくばかり駕籠にのせてようよう」と大聲で泣いた。爺と婆とはびつくりして、あまのじやくの首を取り、黍の畑へ棄てゝしまつた。
黍の莖の赤いのはその爲である。

——出雲——

青森縣　津輕昔ヨ集　九九
岩手縣　九戸郡誌　四八二
「オリヒメ子」又は「ウリヒメコ」

發端無く機織りより始まる。親は母親、從つて赤頭巾と近し。

岩手縣　和賀郡　昔研　二ノ一三五

始めは型通り、池のほとりの柿の木に登つて柿を取らうと誘はれ、地に落ちて死ぬ。鳥の啼き方こゝのは異れり。

〃　聽耳草紙　三六八

同縣　紫波郡昔話集　一

「瓜子姫コ」

姫を殺して爺婆に食はせる點、カチ〳〵山におなじ。

岩手縣　岩手郡雫石　聽耳草紙　三七〇

二話あり。

〃　下閉伊郡岩泉　同書　三七六

〃　上閉伊郡　遠野物語　一〇二

「オリコヒメコとヤマハハ」

山形縣　北村山郡　昔研　二ノ二一六

「お姫ご」

瓜の中より出る條無く、野老掘りに行つた留守に天邪鬼が來て李取りに誘ひ、姫は木より落ちて死ぬ。鳥に教へらるゝ條あり。萱の根の赤いわけを以て終る。前半脱落か。

秋田縣　平鹿郡　昔研　二ノ四五三

「瓜姫子と天邪鬼」

川上より二つの箱が流れて來てその一つに瓜が入つて居て、その中より女の子が生れる。陸中のものと中國のものとの中間。

秋田縣　鹿角郡　第一昔話號　四三

誕生の記事を缺き、全體やゝ省略。

〃　仙北郡　角館民俗資料　八〇・一〇五

福島縣　桃生郡　鄉土の傳承　二ノ一二三

福島縣　石城郡　磐城昔話集　一七二

「あまのじやくと瓜子姫」

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　二〇二

「瓜姫」

石川縣　江沼郡昔話集　三一

三話あり。

「瓜姫小女郎」

山梨縣　西八代郡　續甲斐昔話集　二三一

「瓜姫」

機織り虫と機織り雀との援助によつて機を織つて家を援ける。末めでたしの形にて錦長者に近く、又鶴女房にも似てゐる。

長野縣　小縣郡民譚集　一五〇

〃　昔研　一ノ三四・三一八

〃　上伊那郡　伊那昔ばなし　一〇〇

天邪鬼は姫を食つて顏に血をつけて、それを洗ふと皮がはげる。復仇・復活のことたし。

岐阜縣　吉城郡　昔研　二ノ四五九

四話あれど完形のものたし。最後の一話は瓜太郎といふ男の子としてゐる。

兵庫縣　姫路　第二昔話號　五〇

岡山縣　御津郡　昔研　一ノ四一三

話は前半のみ。

廣島縣　豐田郡　安藝國昔話集　三八

柿の實より生れ、名は織姫。

加茂・高田・山縣の各郡及び廣島市のもの、併せて五話を載す。

山口縣　阿武郡　防長文化　一ノ二

川で拾つた瓜を二つに割ると片側より姫が、片方よりアマンジャクが生れる。

島根縣　邑智郡誌　八五〇

昔研　二ノ四一五

瓜の中より生れた姫は大きくなり鬼退治に行き、長者となつて歸ること、桃太郎の如し。

島根縣　隱岐昔話集　三〇

昔研　一ノ三六五

「あねさんとあまんじやく」

桃太郎の項參照

島根縣　松江市〔例出〕　高木敏雄氏傳說集　二六八

日本昔話集　上

德島縣　三好郡　昔研　二ノ四二二

「あまのじやく」

前段全く無し。

〃　昔研　二ノ四六九

「百合子姫」

山の百合根の中から出て來た女の子。敵はヒヒ猿。

〃　美馬郡　阿波祖谷山昔話集　七二

愛媛縣　北宇和郡　昔研　二ノ一三一

「瓜から生れたお姫樣」

瓜の中から出た娘が機を織るといふだけ。

姫の危難以外に別にかういふめでたき形もあつたか。

福岡縣　宗像郡　福岡縣昔話集　一九三話

「機織姫」

機の音を中心として發達した話。アマノジャクは無し。破片か。

大分縣　速見郡　昔研　一ノ三七〇

「瓜が流れて來た話」

發端瓜子姫とおなじ。但し中よりは白銀がいつぱい出る。隣の爺
婆のは中からワクドと（〻が出る。

大分縣　北海部郡　　昔研　一ノ一三六

「瓜姫」

ガマリジヤコにだまされるといふ。

長崎縣　壹岐　　方言　五ノ四

瓜の流れて來た話ありしといふ。

〃　對馬　　旅傳　一二ノ九ノ一三

瓜姫を高木にしばるのはヌシ。

鹿兒島縣　　甑島昔話集　九六

三話あり。

○參考

嬉遊笑覽　九　下ノ六八オ　是が最初の文獻か。

錦長者

秋田縣　仙北郡生保内　　昔研　二ノ五六

瓜子姫の末めでたしの形。誕生の段無く、機織りの所へ山姥が來る。結末錦の川に流れる美しさをいふ。

もとかういふめでたい形のありしこと判る。

竹の子童子

むかし三吉といふ桶屋の小僧が、竹を伐りに行くと竹の中から聲をかけて、出してくれと頼むものがある。伐つて出すと五寸位の人で、名は竹の子童子。歳は千二百三十四歳だといふ。お禮に七つだけ望みの事をしてやるといつて、三吉をお侍にして呉れた。

——熊本縣球磨郡——

熊本縣　球磨郡　〔例出〕　　昔研　一ノ三七三

鹿兒島縣　下甑島　　昔研　二ノ四一〇

甑島昔話集一〇一

「竹姫」

貧しい翁の伐つた竹より美しい女の子が出て來る。十才の時（婚姻には關係無く）天に上るとて赤いメシゲと杓子の寶物を置いて行く。

これと竹伐婆との關係、小鳥を中心として舌切雀も考へられる。

香川縣

貧しい老人が三本の筍を掘ると、筍は禮を云ひ、町へ案内する。姫の病氣に筍を求める殿樣。

これは童子で無く歌ひ骸骨に近し。

○參考

×竹取翁　臥雲日件錄二（文安四年二月八日）

歌を能くする座頭に歌人のよく云ふ富士の烟の語の由來を聞いた。その答へに、

昔天智帝の代、富士山下の市に常に來て竹を賣る老人あり、人怪しみその後をつけて行くと富士山中鷲村の翁であつた。その家には美しい女があつた。その女ははじめ鶴の巣の中の小さな卵が化して女の子となつたので、これを愛して養つてゐる。自分は竹を賣つて生計をたてゝ居るので、人々は自分のことを竹取翁といふ、と語つた。

遂約皇帝妃名曰加久耶姫……

然して天にのぼり、不死の藥をやいて……といふ以下竹取物語。

×鶯姫

末だ口頭に傳承せらるゝものを知らず。

鶯姫の名は實益俗說辨正　三ノ四〇に見ゆ。

かぐや姫を鶯姫といふことな顯照說なりと、師說自顯集（續群一七ノ一五四）に云へり。

×臥雲日件錄ノ一「鶯の卵の中より出でてその名はかぐや姫といふ」と。

×海道記　採竹翁慈姿姫　鶯の卵の形にかへるといひ、青竹の中より黄金出づといふ。

×日本風俗志卷中に引く國名風土記のこと。

×三國傳記　卷一二

×今昔物語　卷三一（下ノ六四一）

竹の中より黄金を見つける條あり、海道記とおなじ。

×詞林採葉抄　林篁作翁の歌と犬

×類聚名物考　卷一七

子育て幽靈

村の飴屋に夜更けた頃毎晩飴を買ひに來る女がある。戸の間から手を出していつも同じ錢で買うで行く。不思議に思つて後をつけると畑の所まで行つて後は火になつて墓場のあたりで消えた。幽靈にちがひ無いと思つて翌日その火の消えたあたりを調べると新墓に穴のあいたのがある。掘つて見ると中には女の屍があり、大きな男の子が眼をぱつちりと開いて坐つて居た。女が死んでから生れたので、母親は毎晩飴を買つて育てゝ居たのであつた。（この子は後にえらい坊さんになつたといふ）

——島原——

これも派生說話といひ得。地中誕生。

福島縣　伊達郡保原町　　信達民譚集　六一
柱田村東光寺の高地に葬られた女なりと。傳說の形になつてゐる。
福島縣　石城郡　　磐城昔話集　二・一〇〇
「幽靈の子育て」
兵庫縣　姬路　　國民童話　二四五
「眞光寺の飴」
兵庫縣　氷上郡　　旅傳　一〇ノ四ノ七〇
〃　城崎郡　　昔研　二ノ三六八
幽靈山逢源寺の話といふ。（兵庫縣民俗資料第一七輯參照）
長崎縣　　島原民話集　七六
〔例出〕
〃　　壹岐島昔話集　八九
鹿兒島縣　喜界島　　島　一ノ四六四
〃　　甑島昔話集　一〇九
○參考
×東洋口碑大全　六二九　引犬著聞集。
地中誕生の話は昔話の形のものは傳はらず、多く因幡話の形となれり。
×續南方隨筆　二九一　以下

鶯の捨兒

山の桑採りに行つて籠に入れて樹に下げて置いた赤兒を鶯にさらはれる。その兒が助かつて大きな寺の和尙になつて居たのに、老いた二親が永い流浪の後再會する。

——青森縣八戸——

青森縣　八戸市　　昔研　二ノ七九
「鶯にさらはれた子」　〔例出〕
もと語り物か。
岩手縣　上閉伊郡　　聽耳草紙　四二八
「長須田マンヨ」
これには前段あり。
新潟縣　南蒲原郡　　加無波良夜譚　一二六
良辨といふ。
長崎縣　　島原民話集　一六九・一七二
二話あり。一は混亂。一は再會談。
○參考
愛知縣　東春日井郡篠木村篠原　子取池傳說大草城主　西尾道水

一寸法師

昔子の無い夫婦が觀音樣に願がけすると、母親の親指が腫れて來て、中から豆粒ほどの子が生れた。豆助と名づけて大切に育てたが大きくならない。十七の年兩親に暇を貰ひ香煎を持つて家を出た。そして大きな酒屋の釜の火たきしよとして雇はれる。その家には三人の娘があつたが、豆助は一番美しい中の娘がほしくて或夜寢てゐる娘の口ばたに香煎をいつぱいぬりつけて、幾りは川へすてゝしまつた。翌朝香煎が無いと云つて泣いてきかない。家の者を調べた最後に中の娘の口のまはりに香煎がついてゐるのを見つけた。食べた覺えは無いと云つてわめき立てる娘を、豆助はとう〳〵貰ひうけて家につれ歸ることになつた。娘は腹が立つので途中で豆助を殺さうとするが果たさず、とうとう家に來てしまふ。親達は豆助が無事に、主人の娘を嫁に貰つて來たので大喜びで、まづ風呂をたてゝ豆助から入ることにした。豆助は嫁を呼んで體を洗つて貰はうとすると、嫁は今度こそ殺してやらうと風呂の中を竹籔でかきまはすと、パーンと大きな音がして豆助の體が裂けて中から立派な男が出て來た。親たちもびつくりしたが大喜びで、それから二人は親孝行をして安樂に暮した。

——佐渡昔話集——

青森縣　八戸　　昔研　二ノ七八
「あくと太郎」
母のあくとより生れた子。成長して母を食はれた山姥に復仇する。
もとの名はちひさこであつたらう。
青森縣　上北郡　　野邊地方言集
シネコタンポ
傳說的な怪物といへり。
岩手縣　稗貫郡　　昔研　二ノ二二一
「すねこたんぼこ」
〃　　紫波郡昔話集　七五
「すねこたんぼこ」
福島縣　會津　　方言第四卷・手帖　六
〃　石城郡　　磐城昔話集　四・五
「どんぐり太郎」「一寸法師」
新潟縣　佐渡　　昔研　二ノ二二九
「豆助の話」　〔例出〕　　佐渡昔話集　三八
これはやゝ形とゝのへり。
〃　　昔研　二ノ一七四

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　一八八
長野縣　北佐久郡　北佐久口碑傳說集
石川縣　江沼郡昔話集　一三八
「ちび太郎」
岐阜縣　吉城郡　昔研　二ノ四五八
「指太郎」
百姓夫婦の申し子。馬の耳に入つて馬を御し、牛小屋に搗込まれて牛に食はれ、牛の中から物を云つて氣味わるい牛とて殺されると、その腹の中に居て今度は山犬に食はれる。山犬を雞小屋につれて行き、腹が肥つた頃主人に殺させる。
これは外國の語り方ではないか、注意すべし。
廣島市　安藝國昔話集　九〇
「大豆と鬼」
大豆が遠征し、鬼と鬪ひ寶を得。隣の大工はまねそこなつて失敗する。
名を除く外は一寸法師のとほり。
廣島縣　佐伯郡六柿村　藝備「昔話の研究」
「豆一話」
〃　豐田郡　安藝國昔話集　八七
誕生に奇なし。求婚をわざと省くは桃太郎におなじ。

德島縣　阿波祖谷山昔話集　一四
福岡縣　鞍手郡　福岡縣昔話集　四一
破片。隣どうしの二軒家あり。性根わるき母に豆のやうな子供が出來、米を一俵買つて山の方へ行く。父母がついて行くと山中の池の中に下駄ばきで入り、俵にこしかけてやすむ。
廣島市の大豆と鬼の話に關係あるか。
佐賀縣　佐賀郡　昔研　二ノ三二四
「ちんこまんのこひよろ」
川上より流れて來た丸太から生れた男の子、「ちんこまんのこひよろ」と名づく。針と尺と茶碗をもつて鬼退治に行き、鬼をしばつて家の天井に吊つておくと寶物が落ちて來る。隣の爺のまねそこなひを伴ふ。
犬の子譚に鬼退治譚がはさまつた形。
長崎縣　北高來郡　昔研　二ノ四七九
方言誌　二二ノ五三
「豆太郎」
〃　島原民話集　一五二
一升德利ほどの男が長者の家に聟入りし、鬼が島を退治し打出の小槌を持つて歸り、美男となつて家を立て繁昌す。家をやく話、米倉の話を伴ふ。

長崎縣　壹岐島昔話集　一七九
「豆藏話」
鹿兒島縣　甑島昔話集　七〇
〃　喜界島　島　二ノ四六一
「一寸小太郎」
〃　沖永良部島　おきえらぶ昔話集　二三八
○參考
×昔研　二ノ一一七　岡見正雄氏　小島の草紙（お伽）解說「ひめゆり」といふ話の中。
×シャン・アト・ホーム　三
岩手縣の田螺の聟に似たる拇指太郎談あり。
×ヤーズレー　二一八
魚にのまれる話。
×ェェ　一四〇
×岡山縣史地理　今村氏

申し子話

子の無い夫婦が神のお告によつて手斧を枕に寢て生れた子供。片手は手斧であつた。それで他所の子にけがをさせるので山にすてた。以下忘失。

——鹿兒島縣喜界島——
鹿兒島縣　喜界島　島　一ノ四六四
「神樣の申し子」〔例出〕
鶴吉話（蛇息子の條參照）との關係。
○參考
俚謠集　五六三　阿波邦賀郡の長者踊の歌。

不思議な成長

蛇息子

子供の無い老夫婦、山から拾つて來た蛇に「しどこ」と名づけて大切に育てる。段々大きくなつて長さは一間、周りは太い竹の樣になつた。子供に害をされる事を怖れた村人達は、しどこを棄てるやうに夫婦に頼む。夫婦はしどこを呼んで譯をいひきかすと、しどこも血の涙を流して裏山に入つて行つた。爺さん婆さんがついて行くと、しどこは山奥の田の中の土をほりはじめた。不思議に思つて翌日見に行くと、そこには大きな池が出來、周りには春になると美しい花が咲いて村人が辨當をもつて見に行くやうな所となつた。

そのうち、この池に長者の娘が足をふみはづして落ち込んでしまつた。見物に來た村人達は大驚ぎしたが助ける事が出來ぬ。其處へひよつこりとしどこが出て來て、水中の娘をくわへて浮び上つたので村人達はびつくりした。娘はすぐ息をふきかへした。長者はお禮にしどこには寶物をやり、老夫婦は長者に引取られて養はれることになつた。しどこも喜んで何處へとも無く行つてしまつた。

——熊本縣鹿本郡——

岩手縣　柴波郡昔話集　一四二

「蛇の息子」畑もどりの笠の中に蛇。異常成長より長者の聟となる話。老爺と三人娘の問答あり。

福島縣　石城郡　磐城昔話集　三

老夫婦が柴刈りに行き拾つた卵より蛇が生れ、「春」と名づけて愛育する。村人に嫌はれ山に棄てられる。以下こわれてゐる。

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　一一三

龍吉のはなし、求婚なし。

靜岡縣　賀茂郡竹麻村　靜岡縣傳說昔話集　四三八

ある山麓の老女が拾つた卵から蛇。山に放すと人を害する。村人の山狩の時に、婆の前にて小蛇となり殺される。その死體は見る見る太きくなつて婆は褒美を貰ふ。

異常成長の變形か。

靜岡縣　田方郡中郷村　靜岡縣傳說昔話集　四三九

山口縣　周防大島　旅傳　六ノ一二四四

「いち」

明神樣の境内で拾つた卵から生れたのが、額に一の字あるいちといふ蛇。大きくなつて村人に嫌はれ山に棄てられる。殿樣の高札によりいちは化物退治に行くが、退治する化物も亦蛇なり。

双方共に棄れるは「十三峠」におなじ。

熊本縣　鹿本郡　昔研　二ノ二八〇

「しどこ」（例出）

長者の娘を助けるは聟入の名殘ならん。

鹿兒島縣　薩摩郡　昔研　一ノ五六五

蛇報恩譚。

〃　甑島　甑島昔話集　一五四

「スドー錢」

田螺長者

爺と婆が田の草採りに行つてゐると、馬をかけて息子にしてくれと云つたのは田螺であつた。次の日馬に鞍を置いて貰つて、馬を曳いて大きな家に行つて盧の木屁に上り、煮立ち湯を散らしたり、灰を散らしたりして困らせ遂々その家の娘を嫁に貰つて、馬にのせてもどつて來た。爺と婆とは大喜びだが娘は田螺が憎くてたまらない。田螺はそんなに憎かつたら石場（藥を打つ所）へ持つて行つてつぶせと云つたので、云はれた通りにすると、美しい男となつた。それで大變幸福に暮した。

——青森縣五戸町——

青森縣　三戸郡　五戸の昔話　第一七

（例出）

岩手縣　上閉伊郡　聽耳草紙　一一

〃　和賀郡更木村　動物文學　二〇ノ四〇

發端終結ともに「聽耳」に似たり。同じ話の二つの語り方といふべし。

秋田縣　平鹿郡　昔研　二ノ三六六

「螺と娘」

申し子の條無し。長者訪問に始まり、三番目の末娘をもらひ、自分は海中に入つて延命小槌を持つて來て娘に振らせよい男となる。

秋田縣　仙北郡　角館民俗資料　一三五

福島縣　桃生郡　郷土の傳承　二

新潟縣　北蒲原郡　昔研　一ノ一二六

「田螺娘」

筋は全く同じなれど女性の形として語られたもの。

〃　南蒲原郡　加無波良夜譚　一八八

廣島縣　高田郡　　藝備「昔話の研究」一
岡山縣　　岡山縣史地理　二ノ二
長崎縣　　島原民話集　一四三
「田螺の聟」
求婚方法東北に同じ。その間鬼島征伐を伴ひ針の力・笹の船・打出小槌で美男となる。村をやいて打出す話。となりの爺の米倉話を伴ふ。
長崎縣　北高來郡　　昔研　二ノ四七七
「田螺」
○參考
支那類話のこと。　　昔研　一ノ四〇四

蛙聟入

田螺聟入系。主人公が蛙なる外は田螺聟入におなじ。
大分縣　速見郡　　昔研　一ノ三六七
「蛙の嫁もらひ」
破片ならん。
長崎縣　　島原民話集　一四八
「蛙の聟」
鹿兒島縣　奄美大島　　旅傳　一ノ七ノ七三
「蛙の子」
鹿兒島縣　　甑島昔話集　七四
「蛙息子」

蛞蝓聟

鳥根縣　美濃郡西見村　　民族文化　二ノ七
老夫婦が可愛がつてゐる蛞蝓の子が米粒を貰つて長者の娘を嫁にして來る。この點田螺長者に似たり。
娘が針を一本くれる。鬼の相撲をひやかして鼻の中に入れられ針でついて打出小槌をとりあげ、それで娘に六尺男にして貰ひ家や倉も打出して幸福に暮す。

幸福なる婚姻

隣の寢太郎

甚四郎は燕ばかり燒いて食つてゐる獨り者、村の若者達の援助によつて、首尾よく朝日長者の娘を嫁に貰ふ。娘が行つて見ると小屋のやうな小さな家で米も無い。絹三反を持たせて町にやると、道でとられて二度まで空手で戻つて來た。三度目に漸く錢は取つて來たが、路で子供のいぢめて居たびつこ鬮を買取つた。するとそのびつこ鬮は川に入つて川童を捕へる。
川童は延命小槌と延命小袋を、甚四郎に呈上し命を助けてもらつた。甚四郎は袋なら燕を入れるに役立つとて、袋だけを持つて歸ると嫁は小槌を拾ひに來て先づ家を打出した。
甚四郎は米と倉とを出さうとして小盲を澤山出して失敗するが嫁が助けて漸く米と倉とを打出し、舅の長者を招くことにする。さうして饗應に使つた膳椀は皆川に流してしまつた。歸途のあかりにとて家をやいてしまふ。舅の長者が返禮をするとて皆聟のまねをしようとしたが、家を燒いた後、建てることが出來ずに居ると、甚四郎は小槌を振つて新しくたてゝやつた。

青森縣　八戸　　——青森縣八戸——
昔研　二ノ七九
四話あり。
一は「燕燒甚四郎」〔例出〕
三戸郡例出の「燕燒笹四郎」の一異傳と思はる。やゝ複雜して居るが完形に近いものと思はれ、炭燒長者との連絡もわかる。
二は「かばの長者」
カバといふ名の男、殿樣の二人の娘のうち妹を妻とする。空園畑の燕の根から錢金が出て忽ちに金持となる話。カバといふ名も燕に關係あるらしいが說明されてゐない。
三は「蛸屋久兵衞」
八戸長者山の由來として語られるものらし。蛸ばかり食つてゐた蛸屋久兵衞と呼ばれる男が廣い空寺を借受けて住むと、それが評判になつて望み通り、長者の娘が嫁に來る。化物が出るといふ寺の土藏にはいつぱい金が入つてゐて、自分もたちまち長者になる。
四は「いさばの蛸左衞門」
大阪のいさばや、蛸左衞門は江戸の大家の娘を妻にする。化物屋敷を貰つて住んだが、妻の才覺で化物は十二の土藏に埋められてゐる黃金なることを知り、掘出して長者となる。

青森縣　三戸郡是川村　旅傳　二ノ一〇ノ一七
「蕪嬢笹四郎」
岩手縣　上閉伊郡　聽耳草紙　一三一
「鳩提灯」
筋に省略あり。
岩手縣　江刺郡昔話　五〇
秋田縣　仙北郡　郷土の傳承　二ノ一三五
聟入話では無く、猫の繪を畫くくせのある男が古寺に泊つて猫をいくつもかき、怪鼠を退治してその寺の住持となる。
富山市　昔研　二ノ二六九
「なまくらあんさ」
栃木縣　芳賀郡　茂木昔話集　二二
「怠けもの」
一つの痕跡にすぎぬ。
山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　一八二
岐阜縣　吉城郡　ひだびと　四ノ四…(一)
五ノ三…(二)
五ノ六…(三)
宇治拾遺と似たり。
猫報恩と周防大島のものと似る。

禿頭の女。欺きて嫁入りし、庚申の夜の緣組故と屋根の上より云ふ。
兵庫縣　氷上郡　旅傳　一〇ノ四ノ七一
廣島縣　神石郡　藝備「昔話の研究」　三
「三年三月の寢太郎」
〃　比婆郡　同書
〃　高田郡　安藝國昔話集　五八
「寢太郎三助」
〃　昔研　一ノ二八六
鴻池話の二、夢の話となり笑話化してゐる。
山口縣　周防大島昔話集
禿げ嫁の話は宇治拾遺に近し。
愛媛縣　怒和島
蛸屋狩兵衛といふ貧乏漁師、伊勢參りの途に鴻池の娘にあひ、欺いて聟となる。
德島縣　三好郡　北斗　三一
〃　美馬郡　阿波祖谷山昔話集　一二八
長崎縣　島原民話集　一九三
「鳩の神樣」
この話は聟入でなく和尚小僧の話に轉用してゐる。ひば汁ばかり食はせる和尚を戒める話。
鹿兒島縣　喜界島　昔研　一ノ二六三
「三年寢太郎」
三話あり。その一は風呂焚三八と似たり。「七鍋の數」といふ名の男七鍋わかして初をとつておいて浴びると美男となり、長者の娘に盃をさし、その聟となる。
その二は、長者の庭はきになつた男、花を取りにやると不思議な花ばかり取つて來るので後をつけて行くと、高い木に登つて神樣と話をしてゐる。たゞ人ではないと思はれて長者の聟となる。
その三は、ゆり若と似てゐる。子の發見。

牛の嫁入

よき夫を持たうと願がけする娘を神託を以て欺き、その嫁入の途で殿樣に小牛ととりかへられる。青年が待つてゐると、駕籠から牛が出て座敷をあばれまはる。
——喜界島昔話集——
青森縣　八戸　昔研　二ノ八一
山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　五一
幸福なる婚姻
「暗がりから牛でござる」
後半は笑話化す。
鹿兒島縣　喜界島昔話集　五二
「嫁の籠籠に牛」（例出）
この一致の原因、知りがたし。おもしろい順序今はかくれて居るなるべし。
○參考
お伽のさゝやき竹との關係。昔研　一ノ三五二　岡見氏
雜談集　五ノ四オ　嘉永二年
「さゝやき竹」のもとかと思はるゝものあり。

山田白瀧

或金持に十二人の美しい娘があつた。その家の若い衆がその中の白瀧姫に心を寄せて、どうかして嫁にもらひたいと考へて居た。それが旦那樣に聞えて、或日その若い衆は呼ばれた。そして理に叶つた歌を詠んだら白瀧を嫁にやるといふ。若い衆は
ひでりをも山田の稻は枯れはてる、落してくりやれ白瀧の水
と詠んで首尾よく白瀧姫を妻にした。
——新潟縣南蒲原郡——

青森縣　八戸　　昔研　二ノ八一
三人の小僧の願ひごとの話となつて居る。
岩手縣　　紫波郡昔話集　五一
「播磨國絲長庄司」
〃　稗貫郡花卷　　第二昔話號　八〇
「出世聟」
酒屋稼ぎの若衆三人の話、娘と歌問答して遂に聟となる。話はやゝこわれて居る。本藏といふ通稱はもうこの邊では知られなかつたのであらう。
岩手縣　天澤村　　昔研　二ノ二二四
男の名はごもく。歌謠の影響あり。
〃　和賀郡　　昔研　二ノ二二三
「歌よみ聟」
娘の名はさくら、學問ある若者はごもく。三人の侯の願ひは無く、二人の歌問答で嫁入りする。
宮城縣　桃生郡　　鄉土の傳承　一
座頭の作爲、姫の歌に明らかなり。
新潟縣　佐渡　　昔研　二ノ三一八
炭屋五郎兵衞といふ炭燒、六部より教へて貰つて歌をよみ白龍といふ妃を貰ふ。その後炭燒長者の出世譚と結びつく。
新潟縣　南蒲原郡　　加無波良夜譚　一五二・一六〇
その一〔例出〕
その二は破片。
〃　　昔研　一ノ一二八
「猿次郎」
前段はまゝ子いぢめ、助けられて長者の麿はきとなりホドと改め歌をよみて聟となる。
これなどの調和は自然の變化にあらず。ゴゼの坊のかたりと云へり。
長野縣　下伊那郡　　昔ばなし　一一四
兵庫縣　加西郡下里村　　旅傳　三ノ七七四
「山田の源兵衞」
廣島縣　　藝備「昔話の研究」　一六三
德島縣　　阿波祖谷山昔話集　三一
「歌詠み聟」
熊本縣　玉名郡　　昔研　一ノ二二八
「咲花とゴモク」
普通は歌問答の形なれどこゝは連歌の形に語られてゐる。
長崎縣　　島原民話集　一八七以下
六話あり。

長崎縣　　壹岐島昔話集　六七
「歌問答で嫁を貰ふ話」
鹿兒島縣　　甑島昔話集　一〇二

難題聟

昔攝津の有馬溫泉で隣合せに泊り合せた長者の娘と、或若者とがいつとも無しに仲よくなつた。娘は家へ歸らねばならなくなつたが二人共名も住居も明かしてなかつたので、娘は「戀しくばたづね來て見よ十七の國腐らぬ橋の袂にて夏なく虫のぼたもち」といふ歌を若者に殘して故國へ歸つた。
若者はこの謎の歌を考へながら町を歩いてゐると、一人の挾箱に出會つたので歌の意味を尋ねると、「十七の國とは若い國のことで若狹のこと、腐らぬ橋は石橋、その橋の袂の蟬屋のお萩さん」といふ事だと敎へてくれた。すぐ尋ねて行つて見ると蟬屋は非常に大きな長者であつた。若い衆はそこの風呂焚に雇つて貰つたが、娘は他の男の所へ嫁入ることになつた。祝言の日若者は駕籠を・かつぐ事になつたが、途中ではからずも駕籠の中の娘と顏を見合はせた。花嫁はその場で急病となり、そのまゝ實家へ歸つて寢ついてしまふ。易者に見てもらつて、その言葉通りに家内中の男の手形を見せる事になつた時、若者は「戀しくば」の歌を書いてさし出したので、娘はそれを見て頭をあげてにつこりと笑つた。それでみんなに譯が判つて改めて若者と盛大な結婚の式をあげた。
——山梨縣——　　津輕昔コ集　四
青森縣
一把のわらを十二把にして蓑子となる話。
智巧談にうつり行くみち。
岩手縣　　紫波郡昔話集　三二ノ五一
その一は「打たん太鼓に鳴る太鼓」
その二は「播磨國絲長庄司」
〃　上閉伊郡　　老媼夜譚　一八五
「人食ひ花嫁」
岩手縣　稗貫郡矢澤村　　昔研　二ノ二二四
「ばつこ食ひ娘ヨ」
三人の若者の求婚、働きに甲乙無し。棺稱より餅で拵へた人形の赤兒を出して食ふ娘をみて怖れなかつた三人目の男が聟となる。
この話よくとゝのへり、或は古いまゝか。
岩手縣　膽澤郡水澤村　　聽耳草紙　六四
「蜂のお藏」
三人の娘の聟探しの高札、化物退治とわらしべ一本を千兩にする

事、唐竹林の竹かぞへ、及び三人娘の一人を蜂に教へらるゝこと。

秋田縣　仙北郡　聽耳草紙　六三

「蜂聟」　蜂の報恩譚。

山形縣　北村山郡　昔研　二ノ二八〇

三人の下男と長者の一人娘、俵の中をあてさせること、山の上よりドンコロをころがして受けとめさせること、兩方とも子守唄によつて教へらる。

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　四九・一八六・一六一

その一「一把の藁」その二「戀しくば」の歌、その三「姥捨山」と題せられ、婆が殿樣の難題を解いて息子の美しい嫁を護る話。

石川縣　江沼郡昔話集　一三七・一〇五・一〇〇・九二

四話あり。

その一「嫁とどうも」　その二「桃太郎異譚」

その二の話は珍らしい型、桃太郎に地頭殿から種々な難題をかけられる。打たぬ太鼓に鳴る太鼓・灰の草履・鬼の牙など。これで鬼ヶ島へ行く。

むしろ智巧譚なり。

その三「どうもとうも」

和尚小僧の話となつてゐる。

その四「八斗五升」

拙作なれどもとの趣向つたはる。子供に教へらるゝこと。

長野縣　小縣郡民譚集　一九三

三枚の護符とつながる。蜂の援助あり。

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　七八

「おひやらか吹いて顔かくし」

難題聟系統なれど派生の昔話。意地惡い婆樣と男の話。

山梨縣　續甲斐昔話集　一九八・三四二

その一「謎の歌」〔例出〕

その二「蜂太鼓」

和尚小僧ばなし。

神奈川縣　津久井郡　第一昔話號　四四

三話あり。初めの二は難題、三の「嫁さがし」は播磨絲長庄司型。

愛知縣　南設樂郡　第一昔話號　六二

播磨絲長型と戀しくばの歌と二つの型あり。

岐阜縣　吉城郡　ひだびと　五ノ六

同書　四ノ三ノ三八

旅傳　一〇ノ四ノ七二

兵庫縣　氷上郡

「江川孫左衛門」

山田白龍に似たり。三人下男の物望み。

島根縣　邑智郡　昔研　二ノ三八二

「難題聟」

文字の知識による新しい型。

岡山縣　矢掛　第二昔話號　八二

「九つ山の一つ山」

戀しくばの歌と座頭の解釋、風呂焚灰坊の話となり、聟えらみの例の形。

山口縣　周防大島　第二昔話號　八一

德島縣　阿波祖谷山昔話集　九二

戀しくばの歌だが灰坊太郎より出でしことわかる。

德島縣　三好郡　昔研　二ノ四七一

「龜と蜂の報恩譚」

動物報恩譚の複合型、主人公はゴクドウ者、龜と蜂の命を助け大家の奥方の難病の藥を龜の援けにて取り、女中の中より嫁えらみをする時、蜂に教へられしこと。後段に案外古い形あり。

大分縣　北海部郡　昔研　一ノ一八四

和尚小僧話への變化。

大分縣　速見郡　昔研　二ノ四四

「和尚と小僧」

前のものと同じく笑話化してゐる。

幸福なる婚姻

大分縣　速見郡　昔研　一ノ三七一

「殿樣の難題」

これは天人女房の後段と同じ、即ち破片かと思はる。

大分縣　杵築町　昔研　一ノ三六八

「蜂と猿と龜」

三動物の援助により長者の聟となる話。

熊本縣　天草　鄉土研究　五ノ二六二

三衙ほどの話をした者を聟にとるといふ。果なし話と緣あり。

長崎縣　壱岐島昔話集　九〇

「三つの難題」

母と子に殿樣の難題。

鹿兒島縣　甑島　昔研　二ノ四〇九

甑島昔話集　二六

名人を聟にするといふ高札。遂に農人を聟とするといふ話。この外甑島昔話集には、扇子繪の女を尋ねて行つて嫁にする話三話。播磨絲長型二話。難を助けた蚊・龜・猿の援助によつて長者になるもの一話あり。

鹿兒島縣　喜界島　島　二ノ四四七

「播磨絲長殿」

〃　第二昔話號　四六

「神樣の申し子」
主人公は申し子。妻寛めの旅にて乞食の話をきゝ、さまゞ〳〵な試みの後殿樣の聟となる。
鹿兒島縣　奄美大島　昔研　二ノ一六八

「鬼の姉」
蚊を助けたお禮に、倉の中の穀物の數を敎へられて聟となる。

○參考
×長谷寺靈驗記　下三〇
近江國農官源雅基國司の難題にあふこと。信州長谷寺にて相撲となつてゐる。傳承なるべし。
×今昔物語卷　三一
竹取翁に打たぬ太鼓に鳴る太鼓あり。
×朝鮮民譚集　二八
發端「人は恩知らず」と近し、助くるは蚊と蛾。

天人女房

昔炮烙賣りが七月六日の晝山中を歩いて居て美しい三人の娘の水浴を見、その中の衣裳を一組盜んだ。歸途其處を通ると一人の娘が泣いて居る。家につれて歸つて妻とし子供が產れた。子供の三つの年添乳してゐながら天井を見てゐると烏ずんだ紙包みを見つけた。中を見ると、なくした衣裳である。はじめて盜られた事を知り、早速それを着て、子供を脇にはさんで表から雲にのつて出ようとする所へ夫が歸つて來た。女は「私は天の七夕だ、戀しかつたら草履千足つくつてのぼつて來い」と云ひ置いて天に昇つてしまつた。夫はそれから一心に草履作りにかゝつたが、九百九十九足つくつた時待遠しくなつて表へ出ると雲が迎ひに來て居た。そして天がもう手にとゞく所まで來て居るのに、それから後はどうしても昇れない。妻は天の二階で機を織つて居たが、ふとその樣子を見つけてあはれに思ひ、二階から機をつきかへす棒をつき出して引きあげてやつた。親にひきあはせたが親はにくゝてたまらず、いろ〳〵面倒な仕事を言ひつけた。しかしその度に妻の智慧によつて上手にきりぬけて行く。天では瓜を食べることを禁ぜられてゐるのに、親からすゝめられてとう〳〵食べてしまつた。すると瓜から水が出て來て流されさうになる。妻が壁をかけて月に一度のつき合ひと云つたのを夫は耳が遠いので年に一度ときゝそこなつたまゝ流れて行つた。それで七夕さんは年に一度しか會はないのだといふ。

——香川縣三好郡志々島——
津輕昔コ集　九

青森縣　八戸　昔研　二ノ八二

「三國一の笛上手」
嫁はお月樣の娘。後半は冒險譚。
岩手縣　紫波郡昔話　一八六・一〇六

その一「天の御姫樣と若者」
その二「桃賣殿樣」
羽衣をかくすこと、繪姿女房話につゞく。
岩手縣　上閉伊郡　考奥夜譚　三二七

「笛吹藤平」
まんだらを織る女房・殿樣の難題は女繩千把・太鼓・天の雷神
〃　聽耳草紙　二九

「天人子」
やゝ傳說に近し、昔話を光明寺の緣起にとりしものならん。この話早池峯の山の社掌の家に傳はる。
秋田縣　平鹿郡　昔研　二ノ四五五

「兄のむかし」　天上胡瓜の笑話の一つ手前である。
鳥取縣　磐城昔話集　六・一〇二
新潟縣　南蒲原郡　昔研　二ノ三二

「笛吹男」
笛上手の男へ天上より嫁が來る。殿樣の難題・天上聟入・妻を取られて取戻す條など。
新潟縣　佐渡昔話集　五二・六五

その一は色々の粉飾・附合せに省略あり。この話の職業者の手にかゝりしことあらはなり。
その二は省略なれど天上聟入あり。引出物に金の卵を生む鷄。二十三夜待の神さんはアマヲトメなりと。
長野縣　小縣郡民譚集　二一〇

「どうもかうも」
長野縣　上伊那郡　小野村年中行事

「七夕の昔話」
羽衣型・瓜の禁と七夕の由來。
岐阜縣　吉城郡　ひだびと　五ノ二ノ二三

羽衣型。爺が羽衣を見せたので子供を抱いて天上へかへる。
愛知縣　寶飯郡　愛知縣傳說集　二二四
鳥取縣　東伯郡　因伯昔話

羽衣は盜まれたのでは無く、脫いだら天上の事を忘れてしまつて農夫の妻となる。後ふと羽衣をきると天上の記憶がよみがへり、夕顏の花と子供の助けによつて歸天す。
島根縣　邑智郡　民間傳承　二ノ一〇ノ七
廣島縣　双三郡　藝備「昔話の研究」

幸福なる婚姻

「喜の木」を登つて天へ行く。母の難題あり。　　藝備「昔話の研究」　五
廣島縣　比婆郡
松の木に登つて天へ・犬同行。前のと二話とも、瓜から天河が出たといふ七夕の由來。　　島原民話集　一二七
廣島縣　佐伯郡　　安藝國昔話集　五三
「金の擔桶」
鹿を助けてその援助による。
山口縣　周防大島
二話あり。その一は髮端狸を助ける話。天人が羽衣をみつけて天へ歸つた後、狸來り豌豆を一粒くれ、その莢が伸びて天までとゞくといふ、報恩譚を複合。その二は豆の種を天人が殘し置く。天上では蜂と狐と鳥の援助により女房を知る。　　喜界島昔話集　一八・二一・二四
鹿兒島縣
羽衣を盜み子供も出來てから取返される。あめ牛千匹埋めて南瓜の種をまき、それを傳つて天上に聲入。一四不足の揮話。雨をふらす手傳ひをして雲より落ち近江の鮒となる。
長崎縣　南高來郡
三話あり。三は牛飼が天降子の飛羽をかくして妻とす。幾年か後に天上へ親見參に行き瓜の切り方をまちがへる。天の川の由來。その二は兄の喚ぶ子守唄により羽の在處を知ること沖繩に近し。その一は形少し異り天降つた兄妹の話。　　甑島昔話集　一〇八
鹿兒島縣
後段のみ。
〃　奄美大島
幾田村山田の地・翁と黑犬・天女煙草を求むること。
○參考
山形縣　北村山郡西鄕村に天人女房の話存在すること。　　昔研　二ノ五ノ二三
沖繩の例　日本昔話集（下）一七〇
朝鮮民譚集　七四　雄鷄傳說。
お伽草紙　梵天國。
日本童話寶玉集　下ノ二一八

ヤーズレー　一七〇・一七二・一八〇

繪姿女房

昔ある所に少し愚かな權兵衞といふ百姓があつて、誰も嫁に來る人も無くほつたて小屋に住んで居た。ある夜きれいな姉樣が尋ねて來て嫁にしてくれといふので夫婦となる。翌日から百姓はあんまり嫁が美しいのでその方に氣をとられて野良仕事にも精が出なくなつた。そこで嫁は繪姿をかゝせて、畑に持つて行かせた。百姓はそれを木の枝にかけて仕事をしてゐたが、或日大風が吹いてその繪姿が天上に舞上り、殿樣のお庭に落ちた。殿樣はその繪を見て、どうしてもお嫁に欲しくなり、家來に云ひつけて探させると、權兵衞の妻であることが判つた。そして嫌がるのを無理やりに御殿へつれて行つてしまつた。別れる時女房は「年夜になつたら門松を賣りに來てくれ、きつと逢はれるやうにする」と約束してあつたので、年夜になるのを待ちかねて門松を持つてお城の前に行き大聲で門松やア門松やアと云つた。すると今まで一度も笑つた事の無い女房がにこにこと笑つたので、殿樣は大喜びで門松やを呼込み、終ひには御自分が門松やの着物を着て眞似をして見せた。女房はうれしさうに、にこ〳〵するので殿樣は一層うれしくて、とう〳〵門の外まで出て呼んで歩いた。その間に女房は門の戸を閉めてしまつたので殿樣はとう〳〵入れなくなり、權兵衞は女房と共に幸に暮した。

——新潟縣中蒲原郡五泉村——　　聽耳草紙　二〇

岩手縣　上閉伊郡遠野
「無淩笹四郎」
新潟縣　中蒲原郡
「例出」　　昔研　二ノ九五
〃　南蒲原郡　　加無波良譯　五
「正夢」
初夢が合つて公方樣になつた話なるも妻をとりかへす點はおなじ。
山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　二八
「難題話」
廣島縣　高田郡　　安藝國昔話集　一一二・一一七
〃　山縣郡　　同書　一一九
この三話、難題聲よりの變化か。
廣島縣　　藝備「昔話の研究」一一〇
長崎縣　　昔研　一ノ五〇二
　　島原民話集　一二二
發端龍宮女房とあること東北に同じ。殿樣の難題。

鹿兒島縣　奄美大島　　昔研　二ノ一四二
ボックリの話となつてゐる。異鄕より來し女房の繪姿の風にとぶこと。殿の難題・相撲の賭と二人の老人・神の片手など信州長谷寺と至つて近し。
○參考
國外の例につきては、昔研　二ノ六　淺田勇氏
但しいづれも繪姿の風にとばさるゝ條無し。

鶴女房

昔正直な男が山へ草刈りに行つて、一羽の鶴が矢を負うて居るのを助けた。その年の秋頃見知らぬ女が來て泊めて呉れといふ。男は氣の毒に思つて泊めてやり、遂に夫婦となつた。そのうちにお正月になつたが、貧乏で年取りの用意も出來ないので、嫁は一生懸命機織りをして、その布を王樣の所へもつて行つて買つて貰ふやうにといふ。持つて行くと澤山の金を呉れてもう一反織つて來いと云はれた。家に歸つて妻に話をすると、もう一反織れるかどうか分らないが、とにかく織つてみませう。その代り織り上げるまで決して來ない樣にと云つて部屋に入つた。男は不思議に思つてそつとのぞいてみると、全身ほとんど裸の鶴が、僅かに殘つた羽を一本づつ食ひぬいて機を織つて居た。見て呉れるなとあれほど云つたのに、なぜ見たか、見られてはもうこゝに居ることが出來ない。私はいつかあなたに助けられた鶴です。御恩返しの爲に來たのですがもう居ることが出來ないと云つて、裸のまゝどこかへとんで行つてしまつた。この織物は「しよくこうのにしき」といふ。

――長野縣北安曇郡――　昔研　二ノ八三、

青森縣　八戸
「こうまん島」
鴻池の先祖といふ。機織りと見るなの座敷。
同縣　五戸の昔話
鶴の羽衣以下三話。播磨絲長型・殿樣難題との複合など。
岩手縣　上閉伊郡　老媼夜譚　二八八
「鶴の巢女房」
福島縣　信夫郡　信達民譚集　一一九
庭塚村鶴沼の傳說としてあり。
〃　石城郡　磐城昔話集　一〇・一〇四
新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　一八一
〃　佐渡　第二昔話號　五三
佐渡昔話集　六七・一七一

報恩譚無く、獵をやめる約束。
長野縣　北安曇郡鄕土誌稿　一一ノ一五五
「鶴の報恩」〔例出〕　小縣郡民譚集　二六四
長野縣
二話あり。一は鼠が身の毛をぬいてといふ。
〃　南安曇郡　高木敏雄氏傳說集　一五三
小鳥を助けた老夫婦の家に娘となつて來る。
〃　上伊那郡　昔ばなし　一二五
女房は雉。山鳥女房との融和。
石川縣　能美郡誌　一一四九
山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　七
「助けた鶴」
廣島縣　藝備「昔話の研究」　一二
岡山縣　御津郡　昔研　一ノ三二一
「鶴の恩返し」
助けられて老夫婦の子となる。見るなの戒なし。播磨の皿池に尋ねて行くこと。
鳥取縣　岩美郡　昔研　二ノ七六
單なる報恩譚なれど叙法最も精細。女房でなく娘。
德島縣　阿波祖谷山昔話集　五三
幸福なる婚姻
香川縣　高松　第二昔話號　五四
「尙庵さんと鶴」
助命報恩譚。三年間恩人の墓の邊りをとび歩き、恩人が蘇つた時には鶴は裸となつて死んでゐた。
福岡縣　企救郡　福岡縣昔話集一五一
〃　鞍手郡　同書　七四
長崎縣　壹岐島昔話集　一六四
「鶴の話」
鶴淨土ともいふべき單なる報恩譚。今昔の龍宮入と近し。
鹿兒島縣　甑島昔話集　六三
○參考
米府古志類纂　六〇
米澤東寺町鶴市山（後に新福山）珍藏寺の傳說。

鳴女房

福井縣　阪井郡　昔研　一ノ三一
主人公は屑買ひの善右衞門、鴻池の由來話。助けた鶴が女房となつて來る話。機織りと見るなの戒あり。枡の中に尾を入れて去る謎等。

山鳥女房

長野縣　南安曇郡誌　九二八
矢村の矢助といふ男、極月二十八日穂高の暮市に行く路で、わなに罹れる山鳥を救ふ。懐中の五百文をわなに結びつける。後段は或は語りものか。

石川縣　能美郡誌　一一五〇
西庄村尾小屋　中山仁太郎二代目の傳說、美女來り泊り、佛崎まで送つて行くと白雉となりとび去る。白山權現の化身なりしといふ。禮に笄と櫛とを殘し、今なほ笄あり。この家今に至るまで雉を食はず。

鳥女房

秋田縣　仙北郡　角館民俗資料　四四
鶴の語り方全く鶴と同じ。貧しい男の助けた鶴が來て機を織り子を生む。この後播磨絲長庄司型。

福島縣　磐城昔話集　一一
「こふのとりの恩返し」

櫪島縣　阿波祖谷山昔話集　二四
播磨絲長あり。

狐女房

昔ある男、妻が病氣で親元に歸り困つて居る。ある日川へ魚釣りに行つて居ると、白狐が流れて來たので助けて家へつれて歸る。狐は恩返しをすると云つて何れかへ去つた。或時女が來て女中に使つてくれといふので、置いてやると、そのうち子供が生れた。或時子供が、母が尻尾で庭を掃いてゐると父に教へた。父には判らないが天井へ上つてみると尾があるので驚いて妻を追出さうとする。そこへ病氣で居た妻が歸つて來る。狐の女は「戀しくばたづね來てみよ和泉なる信太の森の恨みくづの葉」とかき置いて山に歸つて行つた。

——大阪府泉南郡——
青森縣　八戸　昔研　二ノ八四
男の名、アビノヤスナ、兒はアビノセメトノ。所はシロダの森、語りものゝ名殘なること明らかなり。

〃　上北郡傳說集　六三
狐にいたづらして田植の忙しい日に馬をかくさるゝこと。

福島縣　石城郡　磐城昔話集　七・一〇三

石川縣　鹿島郡誌　九七八

栃木縣　芳賀郡　茂木昔話集　三五
寢跡のみにて昔話のもとの形なし。

長野縣　北安曇郡口碑傳說集　二ノ六二

〃　南安曇郡誌　九三七
重柳村の例。田植を助けに來て子に添乳し、夫に尻尾を見あらはされる。

愛知縣　寶飯郡　愛知縣傳說集　二六三

兵庫縣　傳說叢書
飾磨の狐話。信太森に近し。

○參考
×本朝俗諺誌　この狐の子、物草太郎といふ。信太宮の話。
×鄙の一曲　志太の鍋子の話。
×續飛鳥川（新燕一ノ一八）に狐の面をかぶり田作の祝ひ歌を唄ふとあり。
×騎註密勘　三輪の神女、人の妻となること。
×道聽途說　第三編　三七
×百家琦行談　常陸國栗山覺左衞門。　利根川圖誌にもあり。
×遠山著聞集後編
×日本靈異記　三野國狐直の先祖
　幸福なる婚姻
×信濃奇談（動物妖怪譯　三一二）海西漫錄にも見ゆ。
×行脚隨筆　中卷　四八

蛤女房

昔ある獨り者の男の所へどこからか美しい嫁が來た。嫁が來てからは、それまで格別美味くもなかつた味噌汁が大變うまくなる。男は不思議に思つて、いつものやうに仕事に行くふりをしてこつそり裏に隱れて見て居た。すると嫁は摺鉢を出し、味噌をすり終へると、いきなり鉢に股がつてきたないことをした。男はそれを見て大に怒り、すぐ嫁を追出した。嫁はあやまつたけれども許してくれないので、大きな蛤になつてもくり〳〵と這つて出て行つた。味噌汁には貝の汁を入れたからうまかつたのである。

——長野縣上伊那郡——
長野縣　上伊那郡　民俗學　一ノ二七六
〔例出〕
長崎縣　島原民話集　一三〇

○參考
お伽草紙　蛤の草子
日本童話寶玉集　二〇六　はまぐり姫。

魚女房

蛤女房が魚の形となつてゐるもの。

岩手縣　岩手郡　聽耳草紙　三六一
「魚の女房」
秋田縣　仙北郡　昔研　一ノ二七九
「ふなの恩返し」
「鯉女」
山形縣　東田川郡　昔研　二ノ九三
「鮭女房」
福島縣　磐城郡昔話集　一二
「人魚の恩返し」
新潟縣　南魚沼郡　昔研　一ノ三一二
「鯉の恩返し」
鯉報恩と殿の難題。
〃　長岡　民俗學　二ノ四五五
富山縣　國民童話　一八八
牛が首の祭の相撲の由來譚。
石川縣　江沼郡昔話集　一二一
「娘と川鱧」
岐阜縣　飛騨　民俗學　二ノ四ノ九三四
チンマが池の傳說となつてゐる。
鹿兒島縣　甑島昔話集　六八
○參考
朝鮮　朝鮮民譚集　二三五
「放鯉得龍女」
最も浦島に近し。寶の箱を開くと薄い烟が出るといふ。
朝鮮民譚集　一二二
「鯉と貧しい男」

龍宮女房

七人の家族に死別れた母と末の男の子があつた。子供は花賣りをしたが少しも賣れないので、ある日の歸途龍宮の神にあげると云つて海に投込んでしまふ。すると龜が出て來て、お禮に龍宮へ案内しようと云ひ、欲しいものをと聞かれたら、女の子を欲しいと云へと敎へられた。

三日と思つたのが人界の三年で、その歸る日神樣は嫁として女の子を與れた。歸つて見ると母親は飢えて死んで居たが、嫁が生

鞭でなでたら生返つた。嫁は打出小槌を持つて居て、家をつくり米や倉を出して、見る〳〵うちに金持となつた。

殿樣がその美しい嫁の話をきいて、米千石を上納するか、妻を差出すか、といふこと。嫁に話すと米を海の中より取寄せて無事上納した。次は千尋の繩の難題、これも亦海中より持つて來た。次には正月元日に六百九十九人の家來をつれて、妻を見に行くから泡盛酒を七十七壺支度せよ、といふこと。妻は用意して大取持をした。殿樣は何か藝をせよとて荒いと（イトは作業歌）を出して見ろといふ。嫁は小さな箱から何百人といふ同じ恰好の人を出して面白く藝をさせた。細いとを出せといふ命令、危いからと云つてもきかないので、別の小函をあけると中から鉢卷をして刀をもつた何百人といふ人間が出て、殿樣より家來までみんな斬殺してしまつた。

——鹿兒島縣喜界島——
九戸郡誌　四七四
岩手縣　旅傳　二ノ七
新潟縣
阪井氏と雨生池の龍女の傳說。
岐阜縣　飛騨　飛騨風物記　八七
「嫁が淵の話」
日本傳說集にも見ゆ。
幸福なる婚姻
島根縣　邑智郡　昔研　二ノ四一七
「芋掘長者」
簡略型。龍女山中の笹屋の嫁に來て機を織る話。
長崎縣　島原民譚集　一二一
繪巻女房前段。
鹿兒島縣　喜界島　昔研　一ノ二三二
「龍神と花賣」〔例出〕
〃　第一昔話號　二三
「龍神の女」
〃　甑島昔話集　六一
○參考
所謂鬱玉姫說話。八幡愚童訓の類にも明示せらる。

蛇女房

（蛇とはいへど大方水の靈にて、即ち大蛇より龍女といふに近し。）

妻を喪つて悲しんでゐる男の所へ、何處からか美しい女が來て夫婦となり、やがて子供が出來た。お產になると、妻は決して內を覗いてくれるなと云つて產室に入つた。夫は心配で

たまらないのでそつと覗いてみると、中では恐ろしい大蛇が赤子を膝中にしてとぐろを卷いてゐた。男はあまりの事に驚いたが、ひそかに引返して默つてゐた。七日經つと女はきれいな男の子を抱いて出て來て、さめざめと泣いた後、正體を見られた上はもうここには居られないと云つて、子供を置き泣く時にはこれを嘗めさせて下さいと左の眼の玉をくりぬいておいて行つた。

子供はその玉を嘗めて育つたが、日數が經つて眼玉はだん〳〵小さくなり、遂に無くなつてしまつた。父親は子供を負うて山奥の沼へ尋ねて行つた。すると大蛇が出て來て更に右の眼玉をくりぬいて渡し、沼のほとりに鐘をつるして、明け六つ暮れ六つを知らせてくれと頼んで、沼の中にかくれてしまつた。其後父親は沼の側の寺に鐘を納めて時刻を撞いて貰つた。

子供は大きくなつて生ひ立ちを知り、沼に母を迎へに行くと今度は盲の人間の姿で出て來た。おぶつてつれ歸り孝行をした。

——岩手縣江刺郡——　五戸の昔話

青森縣
「蛇の眼の玉」　外一話。　聽耳草紙　一八二
岩手縣　江刺郡
「母の眼の玉」（例出）　昔研　一ノ四五五
〃　磐宴郡
「蛇のヨケラ玉」、蛇報恩譚・犬猫鼠の話となる。　昔研　一ノ一二二
秋田縣　鹿角郡
「子供育て」
蛇女房の破片か。　郷土の傳承　一七三
福島縣　名取郡
〃　磐城昔話集　八・一〇三
新潟縣　佐渡　昔研　二ノ二七九
「蛇妻」
これは蛇聟入とよく似たるものあり。鷲の卵の挿話など、親子愛情譚とは別なり。　昔研　一ノ三四七
福井縣　三方郡
「盲の水の神」
木挽が美しい湖の魚にみいられて湖に入つてしまふ。妻子に眼の玉を殘す。
女房にはあらず、父方の話としたり。　江沼郡昔話集　五一・六四
石川縣
「蛙のお禮」「助け婆」の二話。　小縣郡民譚集　二〇〇
長野縣
破片なり。

岐阜縣　飛騨　ひだびと　五ノ二ノ三四
一は三井寺の鐘の由來。一は島原のものに近し。
座頭の將來せるものか。
〃　ひだびと　四ノ一〇
丹生川の昔話。ロなし女房の如く、眼の玉をなめさせる事無し。
靜岡縣　濱名郡　靜岡縣傳說昔話集　四三二
袴の由來を云ふ話、報恩譚は無し。なめのこしの部分に袴をはかせるといふ。
遠江　巖水寺　高木敏雄氏傳說集　一六五
寺の緣起か。田村將軍の故事。
滋賀縣　同書　一六九
「三井寺の鐘」
これは昔話。或はかりものか。
京都府　南桑田郡　昔研　二ノ四三〇
破片なり。
和歌山縣　東牟婁郡　昔研　一ノ四二九
「盲の水の神」
乳房の代りを三度まで、始め二度は眼玉、三度目のは臍。
廣島縣　御調郡　藝備「昔話の研究」　一七
幸福なる婚姻
發端無く產屋覗きの條より。
廣島縣　高田郡　安藝國昔話集　三五
德島縣　阿波祖谷山昔話集　六〇
前段蕨を川に投げる龍宮女房型で注目すべき結合。目玉をなめて成長した子、五才の時京の三閑堂の本尊となる。
福岡縣　企救郡　福岡縣昔話集
「蛇の母」
型通りなれど、最初の玉が片眼なることを云はず。
長崎縣　島原民話集　一三一以下四話
その一「盲の水の神」　雲仙噴火の原因を說明する話。
その二　蛇報恩譚。婚姻のこと無し。
その三　海蛇を助けたお禮。
その四　傳說の形となつてゐる。
長崎縣　同書　三四
「蛇嫁入」　絲と針の挿話あり。
鹿兒島縣　喜界島昔話集　二九

蛙女房

主人公はうそくや、雨ふりの夜泊めて異れと云つて來た女を

女房にする。幾日經つても飯を食はぬ。ある日親の百ヶ日だといふのでろうそくを持たせて歸し、あとをつけて行くと池の中へ入つて行つた。そのあと、澤山の蛙の鳴聲がするので、女房は蛙であつたことに氣がつき、池に石を投げ込んで歸つた。

夕方女房は歸つて來て、法事の最中に大地震が起り、死人やけが人が出來た事を語つた。男がよく見ると妻は蛙であつた。

——山形縣東田川郡——　昔研　二ノ八四

青森縣　八戸
蛙が亡くなつた妻に化けて來て、度々神樣を見に行く話。破片なり。

山形縣　東田川郡　昔研　二ノ三一七

〔例出〕
喰はず女房の話の間に挿まつてゐる。

福島縣　石城郡　磐城昔話集　一三
新潟縣　佐渡　昔研　二ノ五一一
蛙女房の如し。池に石を投入れられて跛となつた蛙の母親が子を殘して去る。眼玉の悲劇を伴へり。

德島縣　阿波祖谷山昔話集　二八
「河鹿の嫁」

蛇聟入

蛙が蛇に呑まれようとして居るのを、或百姓が助けようと思つて、蛇に娘をやるからと約束をして歸つた。父親の心配してゐるのを見て三人の娘は氣をもむが、上の二人は蛇の嫁になる事を承知しない。末娘が目に涙をためて、嫁く事を承知し、瓢簞を千と針千本を欲しいといふので、百姓は町に行つて調へてやつた。

晩になると蛇は立派な侍となつて、澤山の家來をつれて娘を貰ひにやつて來た。娘はつれられて、野山を越えて山奥へ入つて行くと、千匹の蛇の仲間がうよ〳〵として、娘を呑まうとして待つてゐる。娘は、呑まれる前に一つだけ頼み事があるとて、千の瓢簞を池に沈ませ、千本の針を浮ばせてくれと云ふと、千匹の蛇は池の中にとび込んでやつて見るが、へと〳〵に疲れてしまつた。そのすきに娘はそこを逃げ出して歸つたが、途がわからなくなつて、或一軒の家でお婆さんが絲をつむいで居る所へ行つて泊めて貰つた。お婆さんは喜んで娘をとめてやり、御馳走をこしらへてもてなした。恰度殿樣が嫁探しのふれを出してゐる時であつたので、婆さんは娘をつれて町のお城に行くと、澤山の娘達が集つてゐたが、その中から選ばれて殿樣のお嫁になる事になり、國の親達もよびよせて一生安樂に暮した。あの親切なお婆さんは百姓の助けた蛙であつた。

——栃木縣芳賀郡——　旅傳　九ノ二

青森縣　下北郡
「メドチの盃」の傳說。

同縣　津輕昔ヨ集　五七
〃　五戸の昔話　一五・一八
岩手縣　上閉伊郡　遠野物語　一三六
〃　聽耳草紙　一七七・一七九
〃　同書　一六八
「蛇の嫁子」

〃　老媼夜譚　二〇・三八
蛙を助けて蛇聟入。鴻の卵をとつて來てくれと、蛙が婆に化けて來ていふ。

〃　下閉伊郡岩泉　聽耳草紙　一七五
〃　紫波郡昔話集　八三
「娘さ通うた蛇」

〃　西磐井郡　旅傳　一二ノ一一
秋田縣　仙北郡角館　聽耳草紙　一七三
「蛇嫁」

幸福なる婚姻

宮城縣　仙臺　郷土研究　一ノ八ノ四四
〃　名取郡　郷土の傳承
福島縣　磐城昔話集　一五・一・五
新潟縣　南魚沼郡　昔研　一ノ四六九
「蛙の恩返し」

〃　南蒲原郡　加無波良夜譚　二一〇
「香の木の卵」

〃　佐渡　第二昔話號　四八
「蛙のだんぶくろ」

福井縣　阪井郡　昔研　一ノ三一
石川縣　鳳至郡誌　九二五
長野縣　小縣郡民譚集　一六六
〃　北安曇郡　小谷口碑集　一四五
〃　北佐久郡　昔研　一ノ三六三
「長者の娘と池の主」

〃　上伊那郡　第一昔話號　五四
〃　昔ばなし　七・一三六
栃木縣　芳賀郡　第二昔話號　一七
「瓢簞千と針千本の話」〔例出〕

〃　茂木昔話集　三一・六三

二話あり。その一は蛇皮は無く、嫁選びもなし。
その二は蟹報恩。
山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　一〇三・一〇七
その一「蛇男」
その二「蛇聟」
〃　續甲斐昔話集　九二・九五・九六
三話あり。
岐阜縣　吉城郡　飛騨の傳說と民謠　一一六
〃　ひだびと　五ノ二ノ三七
二話あり。
靜岡縣　志太郡燒津　靜岡縣傳說昔話集　四二九
〃　田方郡　同書　四二一
昔研　一ノ五四七
〃　庵原郡南河內　靜岡縣傳說昔話集　四二四
〃　周智郡　同書　四三一
〃　賀茂郡　同書　四一九以下
三話あり。
濱松市　同書　四三三
兵庫縣　氷上郡　旅傳　一〇ノ五ノ四〇
蛇の嫁が卵をとりに行くこと。この例伊豆にもあり。
兵庫縣　城崎郡三樹村　昔研　二ノ八ノ三三
和歌山縣　伊都郡　口承文學　一〇ノ一九
岡山縣　御津郡　昔研　一ノ三二三
「蛙の頭巾娘」
廣島縣　山縣郡　安藝國昔話集　二九・二七
島根縣　隱岐　隱岐昔話集　二七
〃　鄉土文化　一ノ一七
これは傳說となつてゐる。
山口縣　周防大島　周防大島昔話集　一九五
〃　口承文學　一一ノ一九
豐後　民俗學　五ノ一〇ノ八六
朝日長者の物語。
大分縣　北海部郡　昔研　一ノ一八一
「がつかい長者」
長崎縣　島原　旅傳　二ノ一一ノ二五
〃　同書　三ノ五
〃　島原民話集　三六
「蛇嫁入」
古い形とも思はれず。蛇皮話につゞき、大蛇傳說。
〃　同書　二九・三〇
「蛇婿入」二話。一は蛙報恩、二は蟹報恩。
長崎縣　島原民話集　三一
「蛇と鷲」
山伏の忠告あり。
〃　壹岐島昔話集　一五・一六
孕環のもとの形。
鹿兒島縣　甑島昔話集　七五
「立聞型」及び「灰娘型」
鹿兒島縣　喜界島昔話集　二五・二七
〃　沖永良部島　昔研　二ノ三一四
身代り花嫁の話がついてゐる。
承知しなかつた二人の姉が羨んだ、または損をしたといふ形は他の地方にもあり。
沖繩　山原の土俗　一四九
傳說に近し。
〃　南島說話　七
「あかまたの聟」
○參考
×朝鮮民譚集　四〇　大蛇退治。
娘を助けたのは且て助けられた蟾。聟入の話は無し。
幸福なる婚姻
×お伽草紙　天稚彦物語　日本童話集　五八五
×寶玉集　下ノ二五四
×石城郡好間村小館　蛇がん淵の由來。
傳說と昔話との堺に立つもの。

鬼聟入

青森縣　八戸　昔研　二ノ一二一
「芥子の種」
聟入するのは鬼。但しこの話は三つの話が一つになつて居る。
一は鬼と田の水の約束をなし、八人姉妹の末娘が嫁くこと。
二は芥子の種をもつて行き、花が咲いたら踏るといふこと。
三は追つて來る鬼に娘が踊つて見せると鬼は水を飲んで死ぬこと。卽ち鬼の子小綱の末段と同じもの。

河童聟入

猿聟入・蛇聟入系の昔話。主人公が河童となつてゐるもの。
岩手縣　岩手郡雫石　聽耳草紙　三五七
「鰻男」

沼の古鰻が娘に通うた話。

岩手縣　騰澤郡　黄金の馬　一三一

長崎縣　島原民話集　四一

「蠶簞と河童」

長崎縣　壹岐　旅傳　九ノ四ノ一七三

河童と田の水の約束をして。

猿聟入

昔百姓の爺があつた。或年日照りで干上つてしまつたので、爺は困つて田の水さへかけてくれる人があつたら、三人の娘の一人を呉れると獨り言を言つて居ると、藪から猿が出て來て、山奥へ行きどん〳〵田へ水をかけてよこした。爺は約束したもの丶心配で仕方がないので、夕飯も食べないで寢てしまつた。一番上の娘が御飯をすゝめに來たので、その話をすると怒つて逃げてしまつた。次の娘も怒つたが、末の娘に聞くと、私が嫁に行くから早く起きて御飯をおあがりなさいといふ。爺は喜んで起きて御飯を食べた。次の日になると猿は赤い袖無しを着て娘を貰ひに來た。そしてつれ立つて山奥の家に行き、仲よく暮して居た。次の年の春午蒭葉餅を持つて爺の家に來ることになつた。餅をお重に詰めようとすると重臭い、鍋に入れると鍋臭いとて、遂に臼のまゝ背負つて行く事にした。途中の川の側に櫻の花がきれいに咲いて居るので取つて土產にしようとて、臼を下さうとすると餅が土臭くなるといふ。遂に背負うたまゝで梢へ梢へと登つて行つたので、枝が折れて川の中へ倒さまに落ちて流れて行つた。そして

猿澤に流るゝ命惜しくなしあとで御姫はお泣きやるらん

と詠んだ。

娘はとつとと家に歸つて行くと、爺は喜んで泣いた。姉達二人は親不孝の罰が當つて鼠になつた。

——山形縣最上郡餌窪川村——

津輕昔ヨ集　二八

津輕昔噺

青森縣

〃　八戸市外　昔研　二ノ一八八

〃　昔研　一ノ三〇九

田の水掛け・粟の草取り・大風呂敷と藤の花の三話あり。

岩手縣　上閉伊郡遠野　聽耳草紙　二四六

「猿の聟」

〃　同書　四七二

「坊樓と摺臼」

淨瑠璃を朝まで語り明したら娘をオカタにやると云はれた坊樓、首尾よく貰つたがだまされて川に流れて死ぬ。辭世歌を伴ふ。この話眞澄紀行にもあり。猿聟入も或は却つてこの方より影響あるか。

岩手縣　紫波郡昔話集　一一一

「猿の嫁子」

〃　騰澤郡　黄金の馬　一二七

秋田縣　角館　聽耳草紙　二五四

〃　平鹿郡淺舞町　昔研　二ノ二一八

「一粒・千粒」

山形縣　最上郡　昔研　二ノ一八四

〔例出〕

〃　北村山郡西郷村　同書　二ノ二一五

「水引きの話」

宮城縣　桃生郡　郷土の傳承　二ノ一一九

福島縣　磐城昔話集　一五・一〇五

新潟縣　白根町　國民童話　一九二

〃　佐渡　昔研　一ノ一八五

新潟縣　南蒲原郡　越後三條南郷談　一一五

「爺と猿」

〃　加無波良夜譚　一五

幸福なる婚姻

新潟縣　南蒲原郡　昔研　一ノ二一三

〃　中魚沼郡　第一昔話號　四八

〃　北蒲原郡　高志路　六〇

この話臼挽歌になつてゐる。昔話の歌になる例「莊内俚謠集」にも二三見ゆ。

石川縣　江沼郡昔話集　一

「三人姉妹」サルサワの話。

〃　同書　一二四

「澁紙に包まれた娘」

火焚き婆譚の前段、猿とも蛇とも云はず。

長野縣　小縣郡民譚集　一七二

〃　北安曇郡南小谷　北安曇郡郷土誌稿　二ノ一六一

〃　上伊那郡　昔ばなし　三九・七七

「娘と猿」

笑話化してゐる。

〃　下水内郡　下水内郡誌　一九八

栃木縣　芳賀郡　第二昔話號　一六

〃　茂木昔話集　三〇

岐阜縣　吉城郡　ひだびと　三ノ六ノ二八

同書　五ノ二ノ三六

完形載せず、存在を知るのみ。

靜岡縣　賀茂郡	靜岡縣傳說昔話集　四三四	岡山縣　邑久郡
滋賀縣　高島郡	昔研　一ノ四七九	山口縣
兵庫縣　神崎郡	第一昔話號　一ノ六七	德島縣　三好郡
〃　城崎郡	昔研　二ノ三六八	同縣
〃　氷上郡	旅傳　一〇ノ六	傳說なり。
大阪府　葛畑	口承文學　一〇ノ二九	香川縣　高松
和歌山縣　伊都郡	同書　九ノ一五	〃　志々島
これは破片。		「猪の聟入り」
備中某地	民族　一ノ一一六二	福岡縣　築上郡
廣島縣　山縣郡	安藝國昔話集　一九・二五	熊本縣　阿蘇郡
その一は猿聟話。その二は鹿聟話。		〃
〃　高田郡	同書　二〇	二話あり。その一は午蒡掘り、その二は田の水入。
〃　安佐郡	同書　二二	〃
〃　佐伯郡	藝備「昔話の研究」一九以下	阿蘇郡各村の例をあぐ。
カチ〳〵山と發端同じ。		〃　天草郡
〃　比婆郡		長崎縣　北高來郡
聟は猪。カチ〳〵山の狸のやうにして燒殺す。		鹿兒島縣
廣島縣　世羅郡		〃
猪聟。水をのんでよい男になる。		〃
		田に水を入れてくれた田螺が後に立派な男になる。後者は普通の

猿聟入。

○參考

×日本童話集　四七四

蕪袋の乙女　お伽草子からか。

×支那にも猿聟入あること。民俗學　五ノ一一ノ二五

×日本童話寶玉集　下ノ四九三

まゝ子話

糠福米福（粟福米福）

昔ある所に姉妹あり。姉を米囊といひ繼娘、妹を粟囊といひ本子であつた。母親は姉娘を憎んでいつもいぢめて居た。

ある日村の娘等と栗拾ひに行く時、姉には底の腐つた古叺を持たせ、妹には新しいコダヌを持たせてやつた。夕方になつても米囊の袋はいつぱいにならないので、他の人達は皆歸つてしまつて姉娘だけ殘された。お腹がすいたので谷に下りて水を飲んでゐると、もとの母親が白い小鳥になつてとんで來て、事のあつた時には着よとて小袖と、それに葵の笛と新しいコダヌとを與れた。娘はそれに栗の實をいつぱいにして家に歸つた。

祭の日が來ると、母は妹によい着物を着せ、姉には麻絲を三結び續んだら來てもいゝと云つて、祭見に出かけた。姉は友人の援けを得て仕事を終へ、小鳥に貰つた小袖を着て笛を吹きながらお宮に行つた。お宮では母と妹とが人形舞を見てゐた。姉はまんじうの皮や、竹の皮を妹に投げつけると頻に當り、妹はそれで姉に氣付いたが、母親は姉には用事を澤山云ひつけて來てあるからと姉の來てゐる事を本當にしなかつた。

姉は先に歸つて大急ぎで着物を換へて待つてゐると、母と妹が歸つて來た。翌日隣村の人が姉を嫁にほしいと云つて來ると、母は妹の方をやり度いといふ。そこで姉妹二人はお化粧のしくらべをしたがやはり姉の方が美しいので姉が貰はれて行つた。妹は自分も早く姉の樣な立派な駕籠に乘つて嫁入りし度いといふので、母が支度をして荷車に妹をのせて、嫁は要らぬかと呼んで歩くうちに、車からころげ落ちて妹は田に落ちて田螺となり、母は喪に落ちて寡婦になつてしまつたといふことである。

——青森縣津輕七ッ石——

青森縣　〔例出〕	津輕昔ヨ集　七二	
	津輕口碑集　二二・二三	
	日本昔話集　一二二	
〃　八戸	昔研　二ノ一八八	

四話あり。
岩手縣　九戸郡誌　四九二
岩手縣　和賀郡　昔研　一ノ一七七
糠袋・朱皿・椎拾ひ・見えずのかいどり・雀の枝折り・田螺となる結尾。
〃　紫波郡昔話集　二三
「糠ん福に米ん福」
〃　紫波郡昔話　一四〇
「糠袋朱皿」
岩手縣　膽澤郡　黄金の馬　四六
〃　稗貫郡　昔研　一ノ二七三
「糠袋紅皿」
〃　上閉伊郡　遠野物語　一〇三
〃　岩手郡　第一昔話號　三三
「米ぶく粟ぶく」
秋田縣　鹿角　同書　四一
「米ぶき粟ぶき」
福島縣　双葉郡　昔研　二ノ一八二
「糠袋紅皿」
〃　磐城昔話集　二七・一一八
新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　六六・一四四
二話あり。
一四四のものなど兄弟話と續かず、堺目は明らかなり。
長野縣　下水内郡誌　一九六
〃　南安曇郡　第一昔話號　五三
「糠と米」
山梨縣　西八代郡　續甲斐昔話集　一五〇
「雪嬢鶏嬢」
上總　民俗學　四ノ三
「クシメトクメ」
茨城縣　遠敷郡　口承文學　八ノ八
靜岡縣　小笠郡　靜岡縣傳說昔話集　四〇六
三話あり。
靜岡縣　庵原郡　同書　三九八
滋賀縣　高島郡　昔研　一ノ四七九
「まゝ子とほん子の話」二話あり。
奈良縣　添上郡　大和の傳說　二九八
「ウツボグサの花」・
花の形狀の由來に附さる。
兵庫縣　美方郡　昔研　二ノ三二六

「櫛子の粟拾ひ」
鳥取縣　八頭郡　昔研　一ノ四六七
岡山縣　岡山縣文化資料　二ノ二
山口縣　周防大島昔話集
長崎縣　北高來郡　昔研　二ノ四七四
「ヲウフとハゲセン」
〃　壹岐島　第一昔話號　八二
「千代ごこ」
鹿兒島　昔研　一ノ二六九
○參考
×ユエ　一四一
×朝鮮の例　日本昔話集　下ノ六二
「バツヂとコンダチ」
鳥の援助あり。
×旅傳　四ノ六ノ八　フロイド分析論。

紅皿缺皿

米福糠福系統の昔話。その項參照。
岩手縣　稗貫郡　昔研　一ノ二七三

姉妹の名は糠袋・紅皿となる。
東京都　北多摩郡　昔研　二ノ四七
靜岡縣　濱松市　靜岡縣傳說昔話集　四一一・四〇四
〃　小笠郡　同書
和歌山縣　有田郡童話集
○參考
×朝鮮　日本昔話集　下ノ六〇
×南方隨筆　六八　八〇以下
×西陽雜俎續集
×日本童話集　一三七　鉢かつぎ。
×ヤーズレー　二一三　マガラシイ民譚。

皿々山

昔二人の姉妹があつて姉は先妻の子である。父の留守中に二人は水汲にやられた。妹はいゝ杓子ですぐ汲めたが、姉のはこわれてゐたので仲々汲めなかつた。そこへ殿樣の行列が通りかゝつたが、殿樣は姉娘が氣に入りお城へ連れて行かうとする。姉は母にきいて下さいといふので家來が母の所へ行くと、母親は妹娘の方が可愛いのでどうでも妹を差上げたいと言ふ。家來は歸つて殿樣

にその事を申上げると、それでは二人の娘の智慧比べをしようといふ事になつた。さうして繼母にお盆と皿と鹽と松を用意させ、盆の上に皿を置きその上に鹽、その上に松をおいて、これで歌を詠んで見よ、上手な方をお城につれて行くと云はれた。妹娘は

盆の上に皿ある、皿の上に鹽ある、鹽の上に松ある

と云つた。姉娘はしばらく考へてゐたが

盆さらやさらちゆう山に雪ふりてそれを根として
そだつ松かな

と詠んだので、姉娘の方をお駕籠にのせてお城につれて歸つた。繼母は怒つて、妹を臼の下にしてころ〳〵ころがして歩いたので、眼がとび出して田螺になつてしまつた。

――長野縣北佐久郡――

青森縣	津輕昔噺集	
〃	津輕昔ヨ集	一〇五
長野縣	小縣郡民譚集	二二七
〃　北佐久郡	昔研	一ノ五六二
「娘と田螺」（例出）		
新潟縣　南蒲原郡	同書	一ノ二六・七五
〃　佐渡	第一昔話號	五一
	佐渡島昔話集	一四・一五

その二（十五頁）の話はやゝ趣向あり。娘の名もおひらにおつぼ、この結構は素人にあらず。

岐阜縣　吉城郡	ひだびと	五ノ五
兵庫縣　美方郡	昔研	二ノ三二五
「繼子の話」		
德島縣	阿波祖谷山昔話集	四
福岡縣　遠賀郡	福岡縣昔話集	二二
大分縣　杵築町	昔研	一ノ五六七
熊本縣　阿蘇郡	〃	一ノ二七一
〃　玉名郡	〃	一ノ二二四
〃　飽託郡	〃	二ノ二六二
長崎縣	壹岐島昔話集	一一三
	第一昔話號	八四
鹿兒島縣	甑島昔話集	九一
○參考		
日本童話集	一五九	
皿々山各地の歌異同	昔研	一ノ二ノ一七

姥皮

ある金持の嫁が一人の娘を殘して死んだ。後に娶つた妻には澤山の子供が出來たが、繼母は先妻の子を憎んで乳母に言ひつけてどこかへやつてしまふことにした。乳母は娘に「ばゝつ皮」といふものを與れて、危いことに出會つた時はこれを被れ、と敎へてくれた。娘はそれを被つて年寄りの姿となつて家を出て、彼方此方歩いてゐるうちに、ある町の旦那の家の水仕女に雇はれる事になつた。娘はいつもばゞつ皮を被つて居たが、風呂に這入る時はぬいで居た。或時、その脫いだ所を若旦那が見つけて、その爲とうとう病氣になつてしまふ。旦那は心配して占ひ師に占はせるとうちの中に氣に入つた者があるからそれと添はせたらすぐ癒るといふ。そこで家中の女一人々々に藥をすゝめさせるが、若旦那は氣に入らぬ。最後に水仕婆さんの番になつた。婆さんは自分などが行つてどうしようかと云つて行かうとしなかつたが、すゝめられて若旦那の部屋に行くと、すぐ見破られてしまつた。ばゞつ皮か脫ぐと美しい娘になつたので、嫁になつて幸福に暮した。

――新潟縣南蒲原郡――　昔研　二ノ三ノ二四

青森縣　八戸	聽耳草紙	
岩手縣　上閉伊郡		
「蛇の嫁子」		
同縣	紫波郡昔話集	六〇
蛇聟入につゞく。		
秋田縣　仙北郡	角館民俗資料	二〇九
痕跡のみ。		
福島縣	磐城昔話集	二〇・二一一
新潟縣　南蒲原郡	加無波良夜譚	一一七
「ばゞつ皮」（例出）		
〃	同書	一七八
「蓑の皮」この話蛇聟入につゞく。		
〃	佐渡昔話集	二二〇
	第二昔話號	四八
「蛙のだんぶくろ」		
石川縣	江沼郡昔話集	三
「三人姉妹」と題される。猿聟入の話のつゞきとして存す。		
長野縣	小縣郡民譚集	一七〇
「ウバガラ」		
甲斐	國民童話	六六
〃　西八代郡	續甲斐昔話集	二〇四

蛇の所へ嫁に行きがけにガールメン（蛙面）をもらふ。

静岡縣　庵原郡　　静岡縣傳說昔話集　四二二

蛇に呑まれた蛙の恩返し。婆に化けて來て、一本の汚い手拭をくれる。

岡山縣　　御津郡昔話集　八七

「蛙の頭巾娘」

大分縣　北海部郡　　昔研　一ノ一八一

「がつかい長者」

豐後　　民俗學　五ノ一〇ノ八八

こゝは猫の皮。

鹿兒島縣　喜界島　　昔研　一ノ二六四

狐皮とて一種のかくれみのを狐が與れる話あり。

○參考

×童話寶玉集　下ノ一八八

×ヤーズレー　一〇一

×佳氣春天　三二五

×姶良地方の研究　二ノ三五二

上井村諏訪神社緣起

火焚き娘

毬皮系統のもの。

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚　一五二

「鬼娘」

石川縣　　江沼郡昔話集　一二四

「澁紙に包まれた娘」

狼聟入につゞく。

濱松市　　靜岡縣傳說昔話集　四一五

オトミは繼娘、オイチ・オサンは本子の三人の娘あり。オトミは廣い田を耕し、疲れて亡母を憶ふと母に似た觀音樣が現はれ、松の根を掘つて見よといふ。掘ると御馳走が出たので食べる。本子二人は居眠してゐるが、オイチは一ツ目だから見えないが、オサンは三ツ目で一目をあけてそれを見てゐて繼母に云ひつける。怒つて鍬でオトミを打つと柄が二つに折れた。神のお告でこれを裏の畑に埋めると、金の木が生え、噂をきいてオトミを殿樣が嫁にもらひに來る。

よほど變つた形、或は古い型か。

「花若ばなし」　　老媼夜譚　二二五

岩手縣　上閉伊郡

「笛吹き勘之丞」

結構は恐らく語り物と思はれる。

同縣　　聽耳草紙　一六四

「扇の歌」

〃　　榮波郡昔話集　六〇

「毬皮」

これは女の形。毬皮參照

新潟縣　南蒲原郡　　昔研　一ノ一二八

「狼次郎」

新潟縣　　佐渡昔話集　五六

「播磨絲長」

この話には大分加工がある。卽ち座頭の作なることを知る。

石川縣　　江沼郡昔話集　三九

「笛吹きハイボ」

發端やゝ奇異なり。

長野縣　上伊那郡　　昔ばなし　一四九

岡山市外今村　　第二昔話號　八二

御津郡昔話集　六八

灰坊太郎

火焚き娘の男型。其項參照

昔ある武家の風呂焚きに三八といふ男が居た。三八は侍であつたが、事情があつて風呂焚きとなつたのである。

或日家族がみんなお能を見に出て行き、夕方歸る頃までに風呂を沸かして置けと命ぜられた。その後三八は風呂を沸かして自分が這入り、立派な侍の仕度をしてお能の席に行つた。そして飛入りとして一さし舞はせてもらつた。その能は特にすぐれてゐたので主人はじめ皆感心しないものは無かつた。三八は一足先に家に歸り、もとの風呂焚きの姿をしてゐると皆が歸つて來た。そしてお能の話をして、飛入りの侍の能が立派であつたと賞めるのであつた。その翌日からこの家の娘が病氣になり御飯も食べない。醫者にかゝつても病は分らず、易者に見せると、家の誰かゞ御飯を持つて行けば食べるし、その人が看病すれば癒ると云ふ。家中の者が順々にすゝめ、最後に風呂焚三八が持つて行くと、娘は意外にも御飯を食べ、三八が看病して次第に快くなつた。

——長崎縣壹岐島——

岩手縣　　江刺郡昔話　六四

「九ッ山一ッ山」難題聟の條參照

廣島縣　比婆郡　　藝備「昔話の研究」三四

主人公が權助といふ名になり、話が大分違つてゐる。

鳥取縣　三好郡　　昔研　二ノ五二七

福岡縣　京都郡　　福岡縣昔話集　一八

繼子たる主人公の男女不明なれど女らしい。

長崎縣　　島原民話集　三九・七九

同縣　　壹岐島昔話集　一九

「風呂焚三八」（例出）

鹿兒島縣　　喜界島昔話集　四五・四七・四八

前二つは「灰坊太郎」殘る一つは「難題聟」

〃　沖永良部島　　おきえらぶ昔話集　六

「猫の面（つら）」

同書　一三二「灰坊」二三〇「鬼の姉」參照

○參考

×東風眞聞　六七

×大分縣北海部郡の「がつかい長者」「蛇聟入」「蛙皮の項參照のこと。

×竹芝長者の火焚屋の衞士。

×高木敏雄氏傳說集　一八九　「兵坊太郎」は猿神退治の犬の名で、信洲上伊那赤穗村光前寺、義犬塚の由來の話なり。

繼子の椎拾ひ

繼母が繼子には底の破れたびくを、本子には丈夫なびくを持たせて栗拾ひにやる。本子は一ぱいになつて歸るが、繼子のはいつまでも一杯にならない。日が暮れて泣いて居ると向ふに火が見える。行つて見ると一軒家に婆樣が糸をひいて居た。其處は鬼の棲家だといふが泊めて貰ふ事にした。婆樣は、鬼に食はれるからと隱れ簑笠を與へて庭の隅に隱した。鬼が歸つて來て人臭い〳〵といふが見つからない。婆樣は鬼を癒せてその間に娘を逃がした。娘は隱れ簑、隱れ笠を持つて居たため、殿樣に褒められ、褒美を貰つた。

——長野縣上伊那郡——

秋田縣　仙北郡　　昔研　一ノ五〇七

福島縣　　磐城昔話集　二一・一一一

福井縣　坂井郡　　昔研　一ノ二九

「繼子話」と題し六話を載す。

長野縣　上伊那郡　　民俗學　一ノ四

〃　　昔ばなし　五一

〔例出〕長者の嫁の條無し。

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　一四

「栗ぶき米ぶき」の話の後につゞく。

岐阜縣　吉城郡　　ひだびと　五ノ五

「三枚のお札」

二つの話の結合なれば不注意によるものかと思はれる。

〃　郡上郡　　昔研　二ノ二六五

「繼子の栗拾ひ」

靜岡縣　賀茂郡　　靜岡縣傳說昔話集　三九二・三九四

三九二のものは地藏淨土。

甲斐のものと似てゐる。

〃　阿倍郡長田村　　靜岡縣傳說昔集　四〇〇

底無し俵を持つた姉の後より妹が栗を拾ふところまで。

〃　周智郡城西村　　同書　四〇九

ヨウセンの辯當と梨の辯當。

大阪府　中河內郡　　昔研　一ノ四七九

「まゝ子とほん子の話」二話あり。

和歌山縣　田邊　　鄉土研究　三ノ三

（南方氏文中）

〃　有田郡　　紀伊有田郡童話集

和歌山縣　伊都郡　　昔研　一ノ五四九

兵庫縣　美方郡　　口承文學　一〇ノ二一

椎拾ひに行つた姉妹。日が暮れて姉は地藏の所へ泊り、豆を貰つて歸る。妹は眞似そこなひ、鬼に食はれる。

前段に妹の親切幽かに見えて結末が無い。

廣島市　　安藝國昔話集　四九

「お鶴とお龜」

德島縣　名西郡　　昔研　一ノ一三一・一三二

二話あり。

「椎拾ひ」

幾分童話化してゐるが、もとはこんな單型があつたのかもしれない。

「鬼」

牛方山姥に似てゐる。

〃　美馬郡　　阿波祖谷山昔話集　一一六・一三一

福岡縣　糸島郡　　福岡縣昔話集　二五

地藏淨土の話になつて行く途。この方が前か。

大分縣　北海部郡　　昔研　一ノ一七九

〃　速見郡　　昔研　一ノ五七一

熊本縣　玉名郡　　昔研　一ノ二二五
「底無し袋」
長崎縣　神崎郡　　旅と郷土　一號
佐賀縣　佐賀郡　　昔研　二ノ三二二
「ほげ袋」
爺と婆との雜拾ひの話。
この話はもと猿地藏の如く、笑ひ笑はぬ心がけの差に力を入れたか、或は又繼子の點を忘れたか。
同縣　　壹岐島昔話集　六一
鹿兒島縣　喜界島　　昔研　一ノ二三一
「神樣と掘飯」
これは薪拾ひ。姉は山へ薪拾ひに行き鬼の寶を得、妹は眞似て失敗する話。
○參考
靜岡縣傳說昔話集　三九九　「目籠で水汲む話」あり。灰娘の一挿話ともなり、又繼子の笛の話にも入る。二つの話の系統察せられる。

底無し袋

まゝ子の雜拾ひ系統。その項參照
佐賀縣　佐賀郡　　昔研　二ノ三二二
「ほげ袋」
熊本縣　玉名郡　　昔研　一ノ二二五
鹿兒島　　昔研　一ノ二六九
「まゝ子いぢめ」その二
○參考
昔話研究　一ノ四四四　解說あり。

お月お星（お銀小銀ともいふ）

この名あるは朝鮮のやうに天に昇つた話があつたからか、或は「天道さん金の網」の昇天と因みあることを示すものかも知れぬ。
妹が姉をかばふ點に於て、糠雨話と區別すべきである。又立派な語り物となつてゐる點に於ても。
昔ある親方衆におりんこ、こりんこ、といふ二人の娘があり、おりんこは先妻の子であつた。父親が或時上方參りに行く事になり出かけた留守に、繼母はおりんこが憎くてならず、大きな箱をこしらへておりんこを入れて林の中に生埋めにしてもらふことにした。妹はこれをきいてこつそり箱の底に穴をあけて貰ひ、姉には芥子の種をもたせてやつた。
姉は箱の中から芥子種を少しづゝこぼし乍ら林に運ばれて行つて埋められた。やがて芥子の芽が出て花が咲くと、妹はそれをたどつて林の中に來て姉を呼び、來かゝつた爺さんと共に姉をほり出して二人は爺さんの家に厄介になつてゐた。
やがて父親が歸つて、二人の居ないのを悲しみ、遂に盲目になつて順禮の姿で歌をうたひ乍ら娘等を搜しに出かけた。
或村に來てはからずも姉妹にめぐり會ひ、おりんこはなつかしさのあまり大聲で父を呼ぶとその拍子に眼があいた。それから三人で家に戻つて目出度く暮した。
——秋田縣平鹿郡——
　　昔研　二ノ一九〇
青森縣　八戸市
「かり子と瓜子」
同縣　　津輕昔ッ集　五〇・四七
〃　　津輕口碑集　一七
岩手縣　盛岡　　周桑郡鄕土會報　一ノ三
「茶筌子・茶碗子」
岩手縣　和賀郡　　昔研　一ノ一二〇
「鉦叩き鳥」
〃　　稗貫郡　　昔研　一ノ一七四
「お月・お星」
〃　　昔研　一ノ三八〇
〃　　口承文學　一〇ノ一二
〃　上閉伊郡　　聽耳草紙　三九五
〃　岩手郡水澤町　　同書　四〇〇
〃　上閉伊郡　　老媼夜譚　一三九
「葦子・蛍子」
〃　　同書　一四九
茶わん子といふ繼子。妹は無し、たゞ竈の下を焚き、籠で水汲みをする。姥樣が來て敎へてくれる點、灰娘と近きのみ。
岩手縣　　榮波郡昔話　一五〇・二〇一
「お月・お星」一五〇
「憐れな姉妹」二〇一
〃　　榮波郡昔話集　六八
「お吉・お玉」
同縣　　贈澤郡昔話集

秋田縣　鹿角郡　黄金の馬　一三四
「あらんこ・こらんこ」　昔研　一ノ九二
〃　平鹿郡　昔研　二ノ三六六
おりんこ・こりんこ（例出）
宮城縣　志田郡　昔研　一ノ五四九
〃　桃生郡　郷土の傳承　二
福島縣　磐城昔話集　二三・二六・一一三
新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　七九・一九一
「お杉・お玉」二話とも同名。
後の話は糠福話に近い。二話の關係がわかる。
同書　一八三
「おつる・こつる」
福井縣　遠敷郡　口承文學　八ノ八
越前　國民童話　一七四
石川縣　江沼郡昔話集　二九
「おりん・こりん」
長野縣　下水内郡誌　一九七
傳奇型に改作。妹の智慧で兄を救ふ。
〃　小縣郡民譚集　二四七
兄と妹との例、木につるされた兄が犬梯子で助けられる話。
山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　五九・二一四
「福原長者」五九
語りもの臭を帶びてゐる。
「繼子の釜ゆで」二一四
靜岡縣　阿倍郡　靜岡縣傳說昔話集　三九七・四〇〇・四〇二
岐阜縣　吉城郡　ひだびと　五ノ八
二話あり、ともに簡略。山に捨てらるゝ條のみ。
廣島縣　比婆郡　藝備「昔話の研究」三一
娘の名はお銀だが筋は手無娘。
〃　高田郡　安藝國昔話集　四七
「お鶴じ・お虎じ」
廣島市　同書　四七
「お鶴とお龜」
福岡縣　鞍手郡　福岡縣昔話集　五四
姉の名は春、妹は秋。

日まさり川

繼子いぢめの昔話。糠福米福・お月お星などゝ同系。その項參照のこと
繼子いぢめにもこんな名があつたか。
長野縣　小縣郡民譚集　二二五
繼娘の姉が日まさり川に捨てられると、妹が毎日食事を運びつゝどこまで水がついて來たかを聞く。遂に姉は溺れて死ぬ。
○參考
ブルガリヤ古譚にも「水はどこまで」あり。

繼子の井戸掘り

繼子話の一。
鹿兒島縣　喜界島　島　一ノ四六七
「横穴」
井戸に入れられた繼子が、下から上げる畚の土に、近所の爺から教へられた通り金を一つづゝのせて上げ、そのひまに横穴を掘つて逃げる話。
千把萱（東奥異聞　一四五）

繼子花

まゝ子話

奈良縣　大和の傳說　二九八
長崎縣　壹岐島昔話集　九九
うつぼぐさに因む傳說。

繼母の化物

お月お星の話の世間話化したもの。
靜岡縣　周智郡　靜岡縣傳說昔話集　四〇八
學校で居睡りばかりしてゐる子の原因をしらべると、繼母が化物に假裝していぢめてゐたといふ話。

繼子と笛

母の亡いお園の所へつれ子をした繼母が來た。父が京に上つた留守に、釜に笊で水を汲ませ、釜の下を焚かせてお湯がわくと、一本の丸太棒を釜の上に渡して、父に逢ひたかつたらこの棒の上を渡れと云ふ。お園が丸太の中程まで渡つた時に、丸太を搖り動かして沸き立つ湯の中に落してしまつた。父が歸つて娘の行方を尋ねても母は知らぬと云つてゐる。庭へ出ると一羽の鶯が娘を堀めた所からとび出して「笊で千回水を汲み、あげくのはてに湯で

煮られ、こんな姿になりました」と鳴く。母は驚いて箒で追出したが鶯は相變らず鳴く、庭からお園の白骨が出たので、母親は役所につき出された。

――福島縣石城郡――

青森縣　津輕昔ヨ集　一九・一六・二二・四八
〃　津輕口碑集　一九

昔ヨ集四八の「ソドメと燈石」は、お銀小銀との中間の話として珍重すべきものである。山に捨てられた繼娘を妹が助け、鬼婆の宿にたどりつくと笊で水を汲めといふ。鳥の啼聲に敎へられて汲む。鬼婆は二人を煮殺さうとして却つて自分が死ぬ。そこへ父母が尋ねて來る。

混亂がある樣に思はれるが、その後段は繼母話以前のものであらう。

青森縣　八戸市　昔研　二ノ一九〇
「繼子と鳥」
岩手縣　稗貫郡　口承文學　一〇ノ一二
秋田縣　平鹿郡　昔研　二ノ三六六
〃　昔研　二ノ四五四
「三人娘」
福島縣　石城郡　旅傳　九ノ五ノ七五
「鶯になつたお園」（例出）
福島縣　磐城昔話集　二五・一一六
新潟縣　北魚沼郡　五倍子雜筆　三ノ九八
實話として語られてゐる。
長野縣　下水内郡誌　一九六
灰娘話と近し。
〃　小縣郡民譚集　二二四
破片。
〃　上伊那郡　昔ばなし　六五・一二一
山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　六三
「三本の笛」
繼子三人を殺す話。三本の竹が生じ、切りて笛とする。歌ひ骸骨に近い。
〃　織甲斐昔話集　一四七
「繼娘」
山へ捨てられた娘が雀に手紙をことづけて叔父に助けられる。これによつてお銀小銀と灰娘との連絡がわかる。
栃木縣　芳賀郡　第二昔話號　五一
「菊人形の話」箱に入れられて捨てられた娘の手紙を鳩がとり持つて父に知らせる話。

これなど日本特產かと思ふ。繼子を釜に入れる話にも、死して竹の笛となるものと、鶯の聲に鳴くものとあり。

栃木縣　芳賀郡　茂木昔話集　四〇
「不思議な尺八」
岐阜縣　うつしばな　七〇
殺した子等を埋めた所から竹が生え、歸つた父が切らうとしたらピーホロ〜と鳴く聲がする。
靜岡縣　靜岡縣傳說昔話集　三九五・三九九　四〇三・四〇七
廣島縣　安佐郡　安藝國昔話集　五一
「繼子いぢめ」
德島縣　阿波祖谷山昔話集　五五
香川縣高松市　第二昔話號　五二
「竹笛」
福島縣　浮羽郡　福島縣傳說昔話集　二〇・二一
〃　糸島郡　同書　二三
大分縣　豐前民話集
熊本縣　天草郡　昔研　一ノ五二三・五五〇
鄕土研究　五ノ三ノ一七五
長崎縣　北高來郡　昔研　二ノ四七二
「京上り」
父さん戀しやチンチロリンと笛が鳴る。これなど明らかにこの文句に力を入れた話し方。
鹿兒島縣　昔研　一ノ六ノ二九
〃　喜界島昔話集　五九
「七羽の白鳥」
之はあやしきまでに外國式の話し方。
灰娘話系の一部分の變遷。
竹は鳥よりも後世のものか。
笛の代りに鳥の聲を說くものは難福譯の影響か、又なぜに二本の箸を渡して渡れといふは鬼婆話からか。
○參考
ヤーズレ！　四七・四八
グリムの繼子話

父の土產

繼子話系統。繼子殺しの話の中に、土產のことを說くのは新しい改作か。

栃木縣　芳賀郡　茂木昔話集　四一

母の難題を隣の親切な小母さんの手傳ひで解くが、これが子供の命を救ひ得ぬことになつてゐるのは、古い分子である證據。但しこの話鳥とも笛ともなし。

手無し娘

昔お春といふ娘があつて、繼母はその子が憎くて憎くてたまらず、何とかしてやらうといろ〳〵考へた末、父親に「賢いお春こと」緒に居られないから暇をください」と云つた。父親は繼母を信じてゐたので、お春を殺してしまはうと、祭見に行くと云つてつれ出し、山の奥へ連れて行つて兩腕を斬つて、痛い〳〵と泣く娘を殘して山を下りてしまつた。お春は木の實や草の實を食べて生きてゐたが、或日立派な和子樣に見つけられ、わけを問はれるまゝに話すと、和子樣は可哀さうに思つてお春を馬にのせて館に歸つた。和子樣の母親もよく世話をして娘の樣に可愛がつてゐた。そのうち和子樣のお嫁になつて、やがて身重となつた頃、和子樣は江戸に上ることになつた。その留守に玉のやうな男の子が生れた。それを江戸に知らせようと飛脚を發てたが、その飛脚が途中で或家に寄つて水を呑んだがそれがお春の生れた家であつた。繼母は飛脚に用向きを聞き、お春の事を知つて急に飛脚をもてなして醉ひつぶし、狀差しの文をとりかへて「鬼とも蛇とも譯のわからぬ子が生れた」と書いて入れて置いた。江戸の和子樣は「鬼でも蛇でも自分の歸るまで大切に育てゝ置け」と返事をかいたが、飛脚は歸り途に再びお春の家に立寄り、繼母に「子供共に追出せ」といふ手紙と換へられた。母親は手紙を見て驚きお春には知らせぬ樣にして、和子樣の江戸から歸るのを待つたが、いつになつても歸つて來ない。そこでお春に泣き〳〵手紙の事を語ると、お春も仕方なく子供を背負はせてもらつて家を出た。あてどもなく歩いて行く中にのどがかわいたので、流れの水を呑まうとすると背中の子供がづる〳〵とぬけて來た。驚いて無い手で押へようとしたら不思議なことに手が生えた。一方和子樣は江戸から戻つて見るとお春も子供も居ない。譯をたゞすと飛脚が怪しいといふことになり、調べてみると手紙をすりかへられたことが判つたので母親は和子樣にすゝめてすぐ探しに出した。流れのそばのお社まで來ると女乞食が居てお春に似てゐる。聲をかけて見るとやはりお春で手を授かつた次第を語り、大よろこびで家に歸つた。繼母と父親とはお春をいぢめた罰で地頭さまに斬り殺された。

――岩手縣稗貫郡――

青森縣　八戸　昔研　二ノ一九〇

錦木の由來として語られる。

岩手縣　稗貫郡　昔研　一ノ二一七

「千手觀音の利益」　同書　一ノ三七六

〃

「手ぼこ春こ」〔例出〕

原文は語り物だつた痕が明らかである。

岩手縣　紫波郡昔話集　九六

「ちょへんこ・ちやはんこ」

〃　和賀郡　昔研　一ノ一一七

「手なし姫こ」

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　一九三

「お杉・お玉」

同縣　佐渡島昔話集　八一

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　三〇五

「京の日野屋・大阪の日野屋」

岐阜縣　吉城郡　續飛騨採訪日誌　一六一

〃　ひだびと　五ノ五

婚姻も子の事も無く。記憶斷片の補綴かと思はる。

靜岡縣　稲取町　靜岡縣傳說昔話集　三九〇

兵庫縣　氷上郡　旅傳　一〇ノ六

兄弟の優劣

島根縣　邑智郡　第一昔話號　七四

昔研　二ノ四一四

「繼子いぢめ」　鹿岡縣昔話集　一九

長崎縣　島原半島昔話集　四三

「手無し繼娘」

鹿兒島縣　喜界島昔話集　五六

〔參考

ヤーズレー　一一九　僞手紙の條まで外國にもあるは不思議。

兄弟の優劣

兄弟話

昔角館町の下川原の蔓谷地に赤淵といふ澤山な朱が埋まつてゐる深い〳〵淵があつた。その頃下川原に兄弟が居て、毎日朱を採り町へ持つて行つて賣つて暮しを立てゝ居た。その弟は兄と違つて腹黑いものだつたので、淵の朱を一人で採つたらさぞ儲かるだらうと惡心を起し、一晩思案の末、朱盗賊を合せて口として大きい、怖しい龍頭を拵へた。さうしてそれを赤淵へ持つて行つて浮

べて置いた。

何も知らぬ兄はいつもの通り朱を採りに來て、その大きな龍が眞赤な口をして、自分を呑まうとしてゐる樣子を見て、蒼くなつて逃げ歸つた。

弟は計畫通り朱を一人占めにする事が出來て大儲けをした。ある日も例の樣に淵に行つてさて水に這入らうとすると氣のせいか龍が生きて居る樣に見える。そんな筈はない、自分が拵らへて浮べたものだ。と思ひなほして潛らうとした時、その龍は眞實に生きて來て、その惡い弟を一呑みに呑んでしまつた。

——秋田縣仙北郡——

紫波郡昔話　五八

岩手縣

「夕顔長者」

秋田縣　仙北郡　第二昔話號　二七

「赤淵の朱」〔例出〕

廣島縣　高田郡　安藝國昔話集　一八一

「金噴き明神」

德島縣　阿波祖谷山昔話集　七四

「弓引く兄弟」

長崎縣　島原半島昔話集　一〇九

「金を屁る馬」

たやすく笑話となり二人椋助形となる。

長崎縣　（舊）壹岐島昔話集　九

鯨伏村の兄弟話。龍宮より「ミカンコー」の猫を貰つて來るといふ話。

鹿兒島縣　甑島昔話集　四六

甲賀三郎の「歌ひ骸骨」系なることがわかる。

鹿兒島縣　奄美大島　昔研　二ノ二三六

「慾の深い兄」

沖繩　南島說話　五四

日本昔話集　下ノ一四九

クガニーの實の話。

〇參考

×歌林良材集の下　（續群書類從一七ノ二二九）

×師說月見集下　（續群書類從一七ノ一三八）

×今昔物語三一　（下の六三〇）紫苑賞草。

×氣仙風土草ノ下　（一九六）百西塚の由來。

兄貧しくして一匹の牛、弟富みて九十九匹、兄恨みて火を放つ、牛悉く燒けたりといふは傳說の語り方であらう。

これが隣の爺型の先か。

弟出世

兄弟話系統。其項參照

宮城縣　桃生郡　鄉土の傳承　三

兄弟三人に五兩づつ分け與へて三年の修業をさせる。一郎は澤の淵に金を投げつけ、御堂に寢てゐると古椀が呼びかける。その椀をふところにして登人修業をなす。

但しこれは弟でなく兄。座頭話になつてゐるが、よくまとまつてゐる。

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　二六五・二七三

「潮茶」二六五　落語風の話。

「四の字嫌ひ」二七三

德島縣　阿波祖谷山昔話集　七八

「三人の兄弟」

別に夢見た型といふもの西洋にもあり。ヤーズレー　一六九

三人遊征の話は怪談に付してゐる。

兄弟と言はぬ例別にあり。

姉と弟

その一　貧しい姉と弟との二人暮しがあつた。ある日學校の友達が、明日扇子競べをしようと言つた。弟は家へ歸つて姉にその話をした。そこで姉は古い扇子の骨を探し出して紙を張り、それに梅と鶯の繪を描いた。

學校へ行くと友達の扇子は金銀の美しいものばかりで、弟は恥かしくて一番後から自分のものを出した。出して擴げた所が描かれた鶯がとび出して扇子の先に止つた。

弟の扇子が一番になつたので、友達は今度は船競べをしようと云つた。弟は又姉に船を造つて貰つた。姉は船を造つて、その中に赤土の人形を三つ造つて入れた。弟の船は大變見苦しい船であつたが競爭をさせた所が三つの人形が櫓を立て船を漕ぎ出したので弟の船は又一番になつた。

その二　姉と弟が居て姉の名はハナノセンマッと言つた。弟は學校の澤山の友達の中で誰よりもよく出來た。或日友達が弟を御馳走すると云つた。姉にその事を話すと姉は「お椀の蓋をあけて見て汗をかいて居るものは食へ。汗をかいてゐないものは食ふな」といふ。

弟は御馳走の蓋を取つてみると、どれも汁一つかいて居なかつたので、姉の言葉通り何も食べずに居たが、うつかり御飯つぶが手についたのを食つたので、家に歸るなり死んでしまつた。

友達が見に來たが姉は弟の姿をして平氣で居たので、友達等は歸つて御馳走を食べ皆死んでしまつた。それから姉は千種類の花を寄せ集めてその汁を弟の體に塗つて生返らせた。

——鹿兒島縣甑島——

右の二話は奄美大島、沖永良部島では連續して語られ、完備した形式で傳承されてゐる。

瀬戸内海島嶼巡訪日記　一九三

讃岐本島　　壹岐島昔話集　二六

長崎縣

「餞のなる木」

鹿兒島縣　　甑島昔話集　五六

「姉と弟」〔例出〕二話あり。

奄美大島　　昔研　二ノ八四・八六

二話あり。「姉さんと弟」

鹿兒島縣　沖永良部島　　おきえらぶ昔話集　一五二

「シモタ殿の話」

〔參考〕

昔研　二ノ五四八　岩倉市郎氏

三人兄弟

息子三人に百兩宛渡し、三年間暇をやるから各々の藏に一番價のある物を入れた者を跡取りにすると言ひ渡した。三番目の息子は上方へ行つて絹布類を買込んで入れ、二番目は米屋を始めて米をうんとつめ込んだ。總領は先づ足の向く方へゆくうち黒川の觀音樣の前を通つたが、お堂が餘り破れてゐるので葺替がしたくなつてこれと門の欅現樣と兩方とも葺替へた。しかし北上川に橋がなくて參詣人に不便な爲、大工を頼んで橋をかけると百兩の金を使ひ果して了つた。橋が出來ると參詣人がぞろ〳〵來るので總領はいゝ心持になつて、先づ觀音樣で一晩宿ると夢のお告に釣竿を載いたと見て目が覺めた。みると枕元に一本の釣竿がある。それを持つて次の晩は欅現樣へ行つて宿ると、今度はわかぎのほうぎと鍋のお神酒入を授つた。先づ釣竿で自分のかけた橋の上へ來て釣をすると、小袋が釣れたのでこれを橋の上ではたいてみると金がチャグ〳〵と幾らでも出た。家では藏改めの前日で女房が心配してゐると夫が歸つて來て「心配には及ばぬ。酒でも呑め」と鍋ヨを出して注いだ。いくら注いでも盡きない。それから藏の前へ行つて小袋をはたいて藏一杯に金を入れた。翌日は盡きぬ鍋ヨの酒で親類をもてなしたが、藏は金が一杯だしするので家督はやはり總領がつぐことになつた。若ぎのほうぎでは母親や嫁を若くしたが、母親はもつと若くなりたいと思つて、總領の留守に是を出してバタ〳〵と煽いだので、若くなり過ぎて子供になつてその邊をのた〳〵と這ひ歩くやうになつたとさ。

——岩手縣紫波郡——

青森縣　　津輕昔ヨ　集三二

〃　八戸　　昔研　二ノ一九一

二話あり。

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚　一二

「總領の運」

二話のつぎ合せか。

同縣　　紫波郡昔話集　一六

「若ぎのほうぎ」〔例出〕

〃　　上閉伊郡昔話集　六四

「蛇女退治」

宮城縣　桃生郡　　鄉土の傳承　二

二話とも笑話。

岐阜縣　　ひだびと　三ノ一〇ノ一一

長崎縣　北高來郡　　昔研　二ノ四七八

いさゝか道話めいて居る。

熊本縣　天草郡　　昔研　二ノ一七一

「三人息子」

喜界島の話と似てゐる。形よく調ひ、談議僧の製作かと思はれる。

鹿兒島縣　　甑島昔話集　三八

〃　　喜界島昔話集　六二・一五〇

六二　のものは、三兄弟の求婚と成功。頼まれて負うて來た鬼の母の屍は魚となる。大蔵の火と似てゐる。

一五〇　のものは「三男が後取り」といふ話。天草のものと似てゐる。

〃　沖永良部島　　おきえらぶ昔話集　二一七

この話は甲賀三郎はじめ色々の傳記の脚色となる。

財寶發見

五郎の缺椀

太郎・次郎・三郎の三人の息子にそれ〴〵お金を渡して、三年の間に何でもして立派になつて來よと云ひわたす。三郎は木綿や

に、次郎は米屋になつたが、からやぎ（怠け者）の太郎だけは金を懷にして奥山へ入つて行つた。すると山婆に會つたので一部始終を語り、三年の間山婆につかはれることになつた。三年經つたらよく働いて奥れたからと云つて、汚い椀を一つ奥れた。それを持つて家に歸ると次郎も三郎も一人立ちの商人になつて歸つて來て居た。その中へぼろ着物を着た太郎が入つて行くと、親父は何を覺えて來たかと聞く。すると懷の椀が泥棒を覺えて來たと云へといふのでその通りに云ふと、そんなら今夜馬を盗んで見よといふことになつた。馬の番には若衆を頼んだり、番犬の口へはホケア貝をあてがつたりして用意を調へてゐる。太郎は椀をふところにして厩の方へ行くと、椀がふところから落ちて大きな穴を掘り、そこから中へ這入れる樣にして置いて「今馬を盗むところだぞ」と大聲で呼んだ。人々は大驚きしてゐる間に馬をひき出して親父の所へ持つて行つた。

——青森縣三戸郡五戸町——　第一昔話號　三七

青森縣　五戸町
「盗人椀こ」（例出）
椀の代りに雛を買ふ話もある。
岩手縣　上閉伊郡昔話集　一六二
「泥棒神」
橋の下に雛子の音がする。見ると小さい人形があるので拾つて歸り、見たくなつて見ると盗みがし度くなり、懷中して居れば盗んでも判らない。後改心して人形を捨てた。
岩手縣　上閉伊郡　老媼夜譚　二三
〃　膽澤郡　黄金の馬　五二
同縣　江刺郡昔話　五六
「五郎の鉄椀」
栃木縣　芳賀郡　茂木昔話集　五八
「鼻高殿」
鉄椀を拾ひそれを叩いて鼻を高く低くする。
廣島縣　藝備「昔話の研究」四〇
熊本縣　玉名郡　第二昔話號　二八
「盗人雛さん」
盗む方法「五右衛門話」と近し。
長崎縣　島原半島昔話集　一〇四
「起上小法師」
鹿兒島縣　喜界島昔話集　六五・六六
「三人兄弟」
○參考
三國傳記　東洋口碑大全　一五一

寶物の力

岩手縣　東澤尻　聽耳草紙　二三〇

豆子噺の三

豆の轉び入つた穴の中に入つて行つた爺が小人からみにくい黄子を貰ふ。捨てようとすると自ら「爺樣投げんな」といふ。爺樣の家は段々と富んで村一番の長者になつた。

長崎縣　島原半島昔話集　一〇四

「起上り小法師」

起上り小法師を買ひ、そのさしづで色々の手柄をたてる。

（五郎の鉄椀參照）

八石山

裕福であつて吝嗇な兄と貧乏で人柄のよい弟とがあつた。或年、弟は兄から種籾を借りると兄は熱湯につけてから、貸與へた。弟は蒔いたが籾は一本も生えず夕顔が一本生えた。そして田地一ぱいに實がつて夕顔が澤山に實つた。

弟は米の代りに夕顔でも食べようと、一番成りの一本を採つて

財寶發見

庖丁を立てると仲々切れない。鉞をもつて切割ると中から白米がざくざくと出て來た。澤山の夕顔から白米が山の樣に出たので弟は名高い長者となつた。

——岩手縣柴波郡——

青森縣　八戸　昔研　二ノ二八三
同縣　津輕口碑集　二七
津輕昔噺集　九
津輕昔噺のものは天人女房。子守に豆一粒を與へそれを蒔くと段長して天にとゞく。子と子守はそれを傳はつて天に昇るといふ。
岩手縣（例出）　柴波郡昔話　五八
〃　江刺郡昔話　九六・三三
新潟縣　刈羽郡北條村　越後野志　六
〃　柏崎　越佐傳說　三〇六
新潟縣　高木敏雄氏傳說集　二〇六
石川縣　佐渡島昔話集　五一
能登名跡志　三〇五・三四三
松波の松岡寺の太鼓と鹿島郡飯山の奥の千石山の傳說。昔話の傳說化の例。
靜岡縣　賀茂郡　靜岡縣傳說昔話集　三九五
島根縣　邑智郡　島根民俗　一ノ四

廣島縣　賀茂郡　　安藝國昔話集　八三
佐賀縣　佐賀郡　　昔研　二ノ三二二
「虎の眼玉」
長崎縣　　（舊）壱岐島昔話集　一五七
「崩つた粟種」
○參考
×支那の例　昔研　一ノ四〇一
×ヤーズレー　二〇六
×ユエ　一八〇
×一粒一鍋の米の話。沖繩に多く又生蕃傳説集にもあり。
この話の大話化したもの。
×江刺郡昔話　三三　源五郎話につゞく。
×紫波郡昔話　一二八　夕顔長者　瓢の米。
×黄金の馬　八一　豆子噺の豆一粒發見。鍋で炒れば鍋いつぱい。臼でつけば臼いつぱい。

取付く引付く

昔或村に善い爺と惡い爺があつた。或時善い爺が一人で山に入つて燈事をして居ると、何處からともなく取つつかうか、くつつかうかといふ聲が聞えた。爺はあんまり幾度もその聲がするので取つつかば取つつけ、くつつかばくつつけといふと、不意に兩方の松林の中から金と銀とが幾らともなくとんで來て、肩や背中にうんと乘つた。それを持つて家に歸つて、婆と二人で眺めて居ると隣りの惡い爺がやつて來て、それを見て大さう羨しがつた。

隣りの爺は早速眞似をしようとして、次の日に山へ入つた行くと案の定左右の山の中から、くつつかうか、とつつかうかといふ聲が聞える。くつつかばくつつけ、とつつかば取つつけと背をむけると、松の樹の上から松脂がとんで來て重い位惡い爺の背なかに附いた。婆さん今歸つた、早く燈火をつけて來て見せろといふので婆が火を持つて近くに行くと、その火が松脂にうつゝて惡い爺は大火傷をした。

——和歌山縣有田郡——

青森縣　八戸　　奥南新報　一〇ノ八ノ一

年末に困つて遠い親類へ借りに行くと、夜明けに野中で呼びとめられ「金は借りられぬ。それよりも家へ戻つて油鍋で小豆を煮よ」と云はれ、歸つてその通りにしてゐると、鍋の上からヨイカと云つて何か飛込む。それから長者になるといふ話。

一つの變型。

青森縣　　津輕昔ッ集　六七

オボサル〳〵といふ化物。

福島縣　　磐城郡昔話集　三〇
和歌山縣　　有田郡童話集　一一
〔例出〕
兵庫縣　神崎郡　　第一昔話號　六七
鳥取縣　西郷　　因伯民談　三ノ二

「取りつけ引つつけ」

良い爺が柴刈りに行くと、鳥が鳴いて金が引つく。眞似をした惡い爺にはごみがつく。婆の尻に付けといふ話。又松脂がつく話もあるよし。

島根縣　邑智郡　　第一昔話號　七四

「出ば出い」

出よか出よかの聲に、「出ば出い」といふと、出盗になつたといふ話。

これは笑話化。

〃　松江市　　鄕土研究　二ノ六

「金銀と松脂」

廣島縣　比婆郡　　北斗
〃　高田・山縣・豐田郡　　安藝國昔話集　一七五以下
愛媛縣　北宇和郡　　昔研　二ノ一三一

「ヒッツカウカ、ヒッツカウカ」

大分縣　北海部郡　　昔研　一ノ一三六

「すひつかう」

同縣　速見郡　　昔研　一ノ五七〇

「ひつつこ〳〵」

やろか水の傳説との關係。

安藝國昔話集　三七〇。早物語の形をした話がある。

ウバリヨン（負はれよう負うてくれの意）

取付く引つく系統の昔話。

青森縣　　津輕昔ッ集　六七
〃　　津輕昔噺集

「山寺の怪」

オボサル〳〵と云ひ、ほんだらオボサレといふと、背の上でがらがらと崩れた。朝見ると大判小判であつた。

〃　八戸　　昔研　二ノ二八三

三人兄弟が大根畠へ行く、「奈良梨採とり」と同じ型。

岩手縣　上閉伊郡　　遠野物語　二三四

殼の中から背負うて行けとの聲、見れば佛像であつた。

岩手縣　上閉伊郡　老媼夜譚　一九六
向ふの峯で美しい姉様が「猪つぼいの蓋様さ行つてばつぱされたい」といふと。

宮城縣　郷土の傳承　一ノ一六八
ある家の祖先の老人、野の松の古木の上から「おぼさつてえ〳〵」と。傳說の形で傳はる。

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　一二七
「バロウ狐」

〃　北蒲原郡　昔研　一ノ五五七
二話あり。その一はバロンといふ化物、負うて歸ると金となつてゐる。その二は世間話の型。女房の千與こゝにも痕跡あり。

新潟縣　古志郡上條村
大榎の下でバローン〳〵といふ。これは狸。

愛知縣　北設樂郡　猪・鹿・狸　一七七
ノッコシ峠の狸。これもたゞの化物。

廣島縣　廣島市　安藝國昔話集　一六三
「お三狐と南瓜」　怪談。

長崎縣　（舊）壹岐島昔話集　九八
「金を負うた子供」

○參考

阿波德島の市外のオッパショ石。
星合茂右衞門、負ふと段々重くなるのを「オノレッ」と投げると二つに割れ、それからもはやオッパショとは云はず。
もと力士の墓石。勇士を試みた話となる。
產女話との關係。古くからあつた怪談か。

天福地福

善い婆と惡い婆とが隣どうしに住んで居る。四月八日に善い婆が、お釋迦様へお詣りに行かうと云つて惡い婆を誘つたが、惡い婆はお釋迦様などへお詣りしても仕方が無いと云つてきかない。仕方なく善い婆一人で出かけると、途中で金の小袋を拾つた。橋の欄干に縛りつけて置くと、惡い婆はそれを知り、慾を出してお詣りに出かけた。橋の所まで來ると小袋では無く、怖い蛇の死骸が橋の所にまきついて居る。惡い婆はそれを見て腹を立てゝ、竹の先を割りその蛇をはさんで善い婆の家に投げ込んだ。善い婆の方では急に窓から何か音をたてゝとび込んで來たので、見るとさつき橋の欄干にしばつて來た小袋で、中から金が出て來て家中金だらけになつてゐる。爺が歸つて來てからその話をすると、橋の欄干にしばりつけたものが家にとび込んで來るとは、授かりものに違ひ無いと大よろこびをした。

——山梨縣西八代郡——　老媼夜譚三一一・三一〇

岩手縣　上閉伊郡　昔研　一ノ五七五
「生れつき運」

「蛙聲」　昔研　一ノ五五八

山形縣　東田川郡
新潟縣　北蒲原郡
三話あり。その三は「千兩箱を釣る話」これは蛇の條はないが同じ話の變化であらう。

長野縣　北安曇郡　小谷口碑集　五九
越後能生の岡本茉、正月二日の初夢に、青木湖畔の山崎に黃金の埋めてある事を、三年續けて見る。從者拔駈けして掘れば、黃金は飛んでしまふ。家に歸つて見れば主家の屋敷は黃金で一杯であつた。

傳說型。

長野縣　北佐久口碑集
黃金上州へとぶといふ。
北安曇口碑集には別の傳あり。
死んだ蛇の話。生みついた運はこの變化なるべし。例へば柴波郡昔話集　一〇六　の例の如し。

財寶發見

山梨縣　西八代郡　續甲斐昔話集　三五四
「金袋と蛇」〔例出〕
○參考
南方隨筆　二六八

蛇と金の玉

天福地福系の話。其項參照

岩手縣　遠野　上閉伊郡昔話集　三三
「黃金の壺」
この話は形がよくとゝのつてゐる。

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　二五
「蛇と金の玉」
「取りつこ引つつこ」「金瓶のとんで來た話」「人が見たら蛙になれ」の笑話まで。
老僧の執念の話。
黃金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

財寶發見

天福地福系統の昔話。其項參照

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚　三〇七

金瓶が崖の崩れで危い〳〵と云つてゐる話。

〃　同書　三一二

金が隣の爺には蛇に見えるが、窓から投込めば忽ち金となるといふ話。

〃　紫波郡昔話　一〇七

「生みついた金」

蛇になることは無いけれども隣へとんで行つてしまふ話。

黄金の瓶

青森縣　五戸の昔話

母と子で黄金をほりあて、隣の婆が見ると青蛇に見え、屋根から放り込むと金となつてゐる。

岩手縣　上閉伊郡昔話集　三三

〃　老媼夜譚　三一一

福島縣　磐城昔話集　二〇

深夜にオッカナイ〳〵といふ聲、行つて見ると黄金の瓶が今にも川に落ちさうになつてゐる。

これも路傍の寶化物の變形か。

壺の中の蛇

九州では天福地福と云はず。

熊本縣　天草島　　昔研　二ノ一七二

「隣の爺」

隣の爺が見ると緣になつてゐる。

鳥取縣　岩美郡　　因伯民談　二

松川といふ村老の實話。昔話が世間話となつて行く實例。

同郡成器村　慮師寺の裏山で古い壺を見つけ、開いて見ると美しい小蛇が入つてゐる。それを隣の爺が貰つてめき〳〵と長者になる。

人が見たら蛙になれ

或寺の少し愚かな小僧、お使ひの駄賃の穴あき錢を藁のさしにさして庫の隅に穴を掘つて埋める事にした。埋ける時「俺が掘つたら錢で居ろ、他人が掘つたら蛙になれ」と云ひ〳〵埋めて、その後も駄賃を貰ふ度にさう云ひ乍ら埋めて置いた。

それに氣のついた和尚、或日小僧の錢をすつかりほり出して代りに蛙を一匹埋けて置いた。やがて小僧はいつもの樣に貰つた錢を埋けようと掘つて見ると錢はなくなつて、代りに一匹蛙がとび出した。小僧はあわて〻「待て〳〵他人おやない俺だ〳〵、さう飛べばさしが切れてしまふ」と云つて追かけた。和尚は腹をかゝへて笑つた。

——甲州西八代郡——

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚　一九六

「蛙壺」

石川縣　鹿島郡誌　九四〇

北大呑村大野木の七右衛門、錢の袋の夢を見る。夢の告で蛙を袋に入れ長持に入れておき、數日後に見ると、果してその長持一杯の錢となつてゐる。

破片か。

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　一七三

「錢と小僧」（例出）

栃木縣　芳賀郡　　茂木昔話集　八三

村人が見ると良い酒だが僧が見るとやはり蛇。

この話は靈異記にも、今昔にもこれに近いものがある。

岡山縣　御津郡昔話集　一六五

「オヘギと蛙」

福岡縣　朝倉郡　　福岡縣昔話集　九三番

嫁と姑と餅。嫁が見たら蛙になれ、と餅をかくす。それを嫁が見つける。

蛙を代りに入れる事無し。

〃　鞍手郡　　同書　五二番

これは餅の代りに蛙を入れる。姑がそれを見て「飛ぶな小豆が落ちるが」

熊本縣　天草　　郷土研究　五ノ四ノ二六三

「姑と嫁」

長崎縣　島原半島民話集　二四〇

○參考

×旅傳　一ノ四　嘉右衛門話。これは蛇で俺だ〳〵見忘れたか。

×本朝故事因緣集、口碑大全　六三四引）

石見市來にて夢に木の根元に金錢ありと見て、一人が掘れば鐵錢、隣人にはやはり金錢となる。

×この話託に醒睡笑　二ノ六八にあり。蛇、やれ見忘れたと幾度

も名のりつるこそ閑事なれ。

味噌買橋

昔飛騨の丹生川に澤上の長吉といふ正直な裝束が居て或時、高山の味噌買橋に行けば好いことがあるといふ夢を見て、早速出かけて橋の上に立つてゐると、そこへ橋の袂の豆腐屋の親爺がやつて來て譚を尋ねる。長吉の答をきいて豆腐屋は大いに笑ひ、夢をまに受けるとは愚かなことだ。わしはこの間から乘輿の籠の澤上の長吉の屋敷の杉の下に、金銀が埋まつてゐるといふ夢を見るけれども、夢と思ふから氣にもとめないと謂つた。長吉はそれを聽いて歸つて我家の杉の根を掘り、忽ち大金持になつたといふ。

——岐阜縣飛騨——

福島縣　石城郡　　磐城昔話集　三七

「運の玉」

岐阜縣　飛騨　　續飛驒採訪日誌　一三四

「夢と夢」〔例出〕

ロンドン橋の話と全く同じ。

香川縣　仲多度郡　　西讃岐昔話集　三五

「京の五條の橋」

二話あり。

○參考

「昔話覺書」二一三　味噌買橋

夢見小僧

正月二日の初夢を十二人の子供に師匠が話させたが、一人だけどうしても話さないので、怒つてうつぼ船にのせて流した。正月十六日に船は鬼が島の磯に着いた。鬼の大將の前へ連れてゆかれた子供は大將をうまくだまして千里棒、生き棒、聽耳の三つの寶物をゞ捕つて、千里棒で大阪の國へ飛ぶ。鶏が二羽止つてゐるので聽耳棒を耳に當てゝみると「西の長者の一人娘が死にさうだ」と言つてゐる。子供は急いで西の長者へ行つて生き棒で娘を生かし命の主だからとて聟にされた。すると今度は東の長者の娘がコロッと死んだ。西の長者の聟殿に頼め、とやつて來たので又生き棒で生かしてやると、こちらでも聟になつてくれと言つてきかない。とう〳〵殿樣に裁いて貰ふことになつた處が十五日は東、下十五日は西の聟になれとのことで、息子は二つの世帶を貰つて、十五日目ごとに途中の橋で二人の女に逆り迎へされるやうになつた。息子の見た初夢は、二人の女に手を打かけて橋を渡るといふのであつた。

——甑島——

青森縣　三戸郡八戸　　昔研　二ノ二八三

好い夢を見た長者の息子が、夢を賣らなかつた爲に勘當されるが後幸福となる。

岩手縣　上閉伊郡　　聽耳草紙　八五

「夢見息子」

これは結末に夢だつたとある話で、全く別のものゝやうなれど、もとは「いゝ夢を見た」で始まつた話の、あとさきを變へたものかもしれぬ。

秋田縣　　秋田郡邑魚譚　一一九

名主・大黒・鬼瓦等が夢をきゝたがるが語らず、だまして寶物をまきあげて幸福になるといふ話。

福島縣　石城郡　　磐城昔話集　三五

長崎縣　對馬仁田村久原　　旅傳　一二ノ八ノ一三

鹿兒島縣　　甑島昔話集　一二

「夢見長者」〔例出〕

財寶發見

夢の蜂

或所に二人の商人があつて連立つて商ひに出た。途中で一休みしてゐると、年長の男が眠つてしまつた。若い男が何氣なく寢てゐる男の顏を見てゐると、一匹の蜂が鼻の穴から出て佐渡島の方へとんで行つてしまつた。しばらくすると又先刻の蜂が戻つて來て寢てゐる男の鼻の中に這入つて行く。眠つてゐた男は眼をさまして、妙な夢を見たと言ふ。佐渡島に大金持があつて、庭に白い花がいつぱい咲いた椿の木があり、その木の根から一匹の蜂がとんで來て此處を掘れと云ふので、掘ると黃金の一杯入つた甕が出て來た夢だと語つた。若い方の男はその夢を賣つて呉れと云つて不思議に思ふ年長の男から三百の金を出して買ひ取つた。

旅が終つて村へ歸つた男はこつそりと佐渡島へ渡つた。そして大金持を探しあてゝ庭掃きに住み込んで春になるのを待つてゐた。春になつて椿の花は咲いたが赤い花ばかりで、白いのは一つも咲かぬ。又もう一年待つと今度は白い花がいつぱい咲いた木があつた。若い男は喜んで、夜そつと火箸でその椿の根をつゝいて見ると、こうん〳〵と音がする。掘ると黃金の一杯詰まつた金甕が出て來た。それを誰も知らぬ所へかくして、更に半年ほど經つ

た或日、暇を貰つてかの瘤をもつて越後へ歸つて來た。そして長者となり一生樂に暮した。

——新潟縣南蒲原郡——　南蒲原郡昔話集　九四

新潟縣
「佐渡の白椿」〔例出〕　傳說の越後（佐渡後ノ五八）

新潟縣
西蒲原郡間瀨村の仁助。寶は佐渡にあり。　北安曇郡鄕土誌稿　二ノ一〇〇

長野縣
これには夢を賣ることなし。
二人の歩荷の晝寢の夢。夢の話を聞いた男が掘ると、青い光となつて飛び、夢を見た方の男の家に入つて蛇となつて床前に居り、それを突くと崩れて黃金となる。　鹿島郡誌　七五

石川縣
夢に敎へられて海岸に行くと、金の鵲がとんで來て錦の袋を二つ置いて行く。

山梨縣　西八代郡　續甲斐昔話集　一六〇　旅傳　四ノ二
「東の壺屋、西の壺屋」
大榎の下に二人晝寢をし、鼻に出入する蜂を一人が見る。夢によりて二つの壺を掘り出すと、それに都合七つとあり。もう一人が見てあと五つを掘出す。
この話は語り物か。

愛知縣　北設樂郡
「馬子の夢」

德島縣　阿波祖谷山昔話集　一二三

大分縣　豐後傳說集　一二
萩原の山彌三助といふ行商人、生姜と節とで夢を買ふ。

鹿兒島縣　喜界島　島　二ノ四五七
がじまるの木の下から寶物の出る夢を、大和船頭が買つて掘ると長年たづねて居た父の死骸が出たといふ話。

〃　喜界島昔話集　一五五
「夢見息子」
良い夢を見たが誰にも話さないで、その夢の通りになつた子供の話がある。

鹿兒島縣　甑島昔話集　一一九
「三彌大藏」なほ一一七の「八鱗堂の夢」は夢の中で朋輩二人掘つて金持になる。

○參考
×夢を買ふ話。
×宇治拾遺　吉備眞備
×沙石集　八ノ二三
×東國輿地集覽　一二
×三彌大藏　永代藏　卷三
談國物語　六九
×旅傳　三ノ五（市場直次郎氏）山彌長者が事。
×蕉齋筆記　二　世間話とした形である。

藁しべ長者

昔ある男が觀音樣に出世が出來るやうに願がけをした。すると「寺を出て轉んだら一番先に手にふれたものを授ける」といふ御告げであつた。男が寺の門を出ると石にけつまづいて轉げて一本の藁が手に觸れた。それを持つて途で虻を取り藁でしばつて旅をつゞて行つた。すると向ふから貴人の行列が來て、その中の抱かれて居る子供が急に泣出したので、貴人はその藁でしばつて居る虻を欲しいと云はれたのでさげるとお禮に密柑を三つ與れた。男がそれを持つて行くと、呉服屋が喉を乾かして困つて居るので密柑をやると、お禮に布子を三反與れた。更に行くと道端に馬の死骸があつて人が立つて考へ込んでゐるので、その死骸と布子とを交換した。男が死んだ馬に水をのませたらすぐ生き返つて立派な元氣な馬になつた。大喜びして旅をつゞけて、或夜大きな家に泊めて貰つたら其家の主人が男を招んで、その馬を貸して貰ひたいと云ひ、その代りに西の方へ旅に出るから歸るまでこの家に留守居して貰ひたい。もし歸らない時はこの家は貴方に差上げるといふ。それから主人は旅に出たまゝ歸らず、男はその家の主人になつて一生安樂に暮した。

——廣島縣呉市——　紫波郡昔話　一六九

岩手縣
話の名は「靖鈴長者」とあれど、藁しべ長者の破片。大方宇治拾遺と近い。

岩手縣　上閉伊郡　老媼夜譚　二三五
「歌ひ骸骨」の前段に勘當の印に藁一本・朴の葉・味噌と變つてそれを食つてしまつたとあり、歌ひ骸骨につゞく。同書　三〇〇頁には子に貰つた錢一文より煙草屋になる話がある。

岩手縣　稗貫郡矢澤村　動物文學　二一

〃　岩手郡水澤町　聽耳草紙　六四
「鈴のお藁」
・雜題狸となつてゐる。

福島縣　石城郡　磐城昔話集　三一・一二一

岐阜縣　飛騨　昔研　二ノ五一五

廣島縣　吳市　　安藝國昔話集　一一〇

〔例出〕

宇治拾遺のまゝ。虻に意味ある事を知る。

島根縣　邑智郡　　昔研　二ノ四六五

山口縣　周防大島

後生忘却。

德島縣　　阿波祖谷山昔話集　一六・七六

長崎縣　　五島民俗圖誌　二四五

〃　　壹岐島昔話集　三四

「蘭シビ長者」

鹿兒島縣　甑島　　昔研　二ノ五五一

〃　　甑島昔話集　八

〃　喜界島　　喜界島昔話集　七二

わらしべの發端は無いが、スンとソウの兄弟の話で、壹岐の話に近い。

沖繩縣　　南島說話　九三

○參考

×宇治拾遺卷七　長谷寺參詣之男願利生之事。

×今昔物語　一六ノ二八

蜂出世

蜂に助けられて出世をした話色々あり。

一長者へ聟入り　中ソだブン〳〵。

二難題聟・聟危難これからの變化として打たぬ太鼓、又は「ぶん〳〵太鼓の袖かぶり」あり。

秋田縣　仙北郡　　角館民俗資料　一四二

これは完全に落語となる。昔一人のセボシ（怠者）が、蜂の巣を金紙で包み、金の珠をつくり質屋に置く。主人怪んで開けてみれば刺されるので番頭を叱つて曰く「質は取つても蜂はとるな」。

德島縣　美馬郡　　阿波祖谷山昔話集　一〇

「極道者の話」　助けた獺と獅子蜂のおかげで、長者の娘の病を癒し聟となる。

鹿兒島縣　　甑島昔話集　二七

助けた蝦・龜・猿のおかげで乞食が長者の難題を解き、聟入りする。

蜻蛉長者

岩手縣　岩手郡長山村　　旅傳　三ノ一一七〇

傳說として傳へらる。

渡しに光るものあり、近づけば黃金なりしといふ。蜻蛉に尋ねる條は無し。

別にマノ長者。雫石の岩井花家の本家、この長山村にあり。

同じ傳說ありしと見ゆ。

○參考

昔研　二ノ五ノ八　淺田勇氏「靈魂が動物となる話」

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚　一二七

「岩泉の里」　馬方が醉つて歸る話。

青森縣　　津輕昔コ集　三〇

娘柴刈に行き酒泉發見。兩親と行けば只の水なりしといふ。

破片なり。

石川縣　　鹿島郡誌　九六九

能登部村モロミ坂傳說。

沖繩縣　　遺老說傳　四四ノウ

伸城安里の佐久川に漁夫足を洗ふ。美人に酒壺を送らる。妻が見れば只の水なり。今も稻祭に祝女この川の水を載點す。

財寶發見

炭燒長者

ある所に隣どうし仲の好い父共があつて、山に木を伐りに行き山の神の御堂に泊り、夢を見た。神々達が待つてゐる所へ、山の神が歸つて來て里で男女二人が隣り合つてうまれ、その子等の持運は女の子は鹽一升に盃一個、男の子は米一升しか持つてゐなかつたと語つたのを父共が聞いた。緣は、と神々がきくと、はじめは隣どうしだから一緒にしようと思ふが、とにかくさうして置いてから又考へようと言つた。二人の父は目を覺して夢を語り合ひ、不思議に思つて家に歸つてみると兩方に男と女が生れてゐた。

二人は大きくなつて夫婦になる。神々から授かつた女の福分で家は繁昌した。夫は妻が一日鹽一升使ひ盃が手からはなれない樣な使ひ方に不滿で妻を追出してしまふ。

妻はあてなしに歩いて行つたが空腹になつたので路傍の大根を食べようとぬいてみると、酒が湧き出した。それを飲んで元氣を出し、向ふの山の灯をめあてに歩いて行つて鍛冶をしてゐた爺に泊めてくれと云ふと、爺は貧乏だからと云つて斷つた。然しその爺の家の竈掛石も敷石も臺石も皆黃金であつた。女は爺にすゝめ

て町へ持つて行つて賣らせた。山の鍛冶小屋附近はみな黄金であり又掘つた後からは酒が湧くのでたちまち長者となつて、その山は俄に町になつた。女の先夫はひどく貧乏になつて、息子と二人で薪を背負うてその町に賣りに來た。

——岩手縣和賀郡——

この話の特色は妻の福分といふこと。よき女房と寶發見に二つの型がある。運定めとつながる。

第二段には美酒を造る妻。米倉譚につゞく。

この話の笑話化して行く小口は、やはり鳥に小判、或は影法師に米を投ぐること。

傳説として方々に分布するは語り物の爲か。

青森縣　八戸　昔研　二ノ二八四

四話あり。又奥南新報　五ノ七ノ七　にもあり。

岩手縣　上閉伊郡　老媼夜譚　九

前夫は鍛冶屋、後に來て下男となる。

炭竈の邊は皆小判。鳥を打つ事はなく、影法師に米を投げてやる條あり。

此の書　三二二に　「炭倉長者」あり。

岩手縣　紫波郡昔話集　二八

「右衛門太郎と左衛門太郎」

よく整へり。この話强清水と因あるべし。

岩手縣　和賀郡黒澤尻　聽耳草紙　二七

秋田縣　仙北郡　角館民俗資料　三五

昔研　一ノ二八〇

昔研　二ノ一八一

福島縣　双葉郡　民俗叢話　九〇

旅の歌うたひの運搬かと思はる。

〃　遠刈田　傳説の越後と佐渡　上ノ三三

新潟縣　傳説としてあり。

〃　佐渡　昔研　二ノ一七五

〃　相川町誌　一七三

〃　南蒲原郡　加無波良夜譚　一五九・一九六

いづれも酒の發見。

石川縣　能美郡　第一昔話號　五一

長野縣　伊那郡　伊那の傳説　五・二四三

〃　小縣郡　小縣郡民譚集　一三六

〃　木曾　鄉土研究　五ノ二五八

御坂峠の長者屋敷のこと。

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　三・一七七・一八二

〃　續甲斐昔話集　一八四

靜岡縣　富士郡　高木敏雄氏傳説集　七七

日を招く話に伴ふ。

之は語り物か。

岐阜縣　飛騨　昔研　二ノ五ノ一六

〃　郡上郡　昔研　二ノ六ノ二五

兵庫縣　城崎郡　昔研　二ノ三七〇

「佐渡の金山の起り」

〃　氷上郡　旅傳　一〇ノ六

鉢かづき話の前段となつて付いてゐる。

この話は聯後でも前置きになつてゐる。後段に力を入れて語らること。

廣島縣　御調郡　藝備「昔話の研究」一七二

島根縣　邑智郡　昔研　二ノ三八四

長者の娘四十九度嫁し、五十度目に落付く。

徳島縣　美馬郡　阿波祖谷山昔話集　五一

徳島縣　三好郡　昔研　二ノ四二三

香川縣　三豐郡志々島　讃岐民俗　一

高知縣　幡多郡阿備池

財寶發見

炭燒小五郎　後に京の「すみのくら」と成る。（櫻田氏）

福岡縣　筑前傳説集　二五

勝山長者迹傳説。影法師に米を投げてやる條あり。これが愚者成功の一例。

熊本縣　菊池郡城北村米原　肥後國志

「コモ編小三郎」

全く炭燒小五郎なり。

長崎縣　島原半島民話集　一七三

「猫の恩人」是も炭燒長者の破片。猫と蛸との爭ひが入つてゐるのが不思議。

長崎縣　壹岐島昔話集　三四

前夫零落して笊賣となるもの方々にあり。

是と今昔物語　卷三〇　の靑刈とは關係あるべし。

鹿兒島縣　昔研　一ノ一六七

喜界島昔話集　三八

西のベンコイ、白鳥に黄金を投げる條あり、次に鬼ヶ島征伐あり。

打出小槌と小屋燒長者。

これにてこの話にも桃太郎分子あること判る。

鬼界島昔話集　三三「炭燒五郎」　八五「河童の恩返し」

鹿兒島縣　甑島昔話集　一

沖縄縣　南島說話　九八

雀の仲人で追出された妻、炭燒に嫁す。前夫は笊賣になりて來り再會して恥ぢて死す。

○參考

寛永諸家系譜傳（史料一一ノ三ノ七一五）

芋掘長者

或家の下男、芋を掘ると稱して山に入り、彼方此方と土を掘つて黄金のヒを掘り當て、長者になつたといふ話。

岩手縣　上閉伊郡昔話集　二三

芋掘りを毎日してゐて、黄金のヒを見付けた長者の話、ウソトキ話がつゞく。

これも一種の派生說話か。

岐阜縣　丹生川村　うつしばな　一一九

和歌山縣　有田郡　南紀土俗資料　四

津木村の長者が峯。芋掘長五郎へ隣村の醜い娘が嫁に來る。川口の鴨に小判を投げ「こんなものなら内に芋掘る程もある」といふよりこの名出づ。

島根縣　邑智郡　昔研　二ノ四一七

二話あり。一は龍宮女房の破片。一はいざりに、下關ガッカイ長者の娘が婢をつれて嫁に來る。婢の千代が米をとぐとその水が酒になつた。それが鶴池の起りといふ。

千代といふ名は田植唄の「ひるまもち」にも出て來る。

陸中の炭燒長者にも婢をつれた話がある。

土の色　一三ノ一（六七號）

鴨江觀音緣起　中國邊の女でいつも不緣となる。父から玉を貰ひ、その玉と同じ色の土の所を死場所とせよと云はる。濱松七軒町で自然薯賣の爺にあつてたづねると、心當りありとて山へ連れてゆき共に掘ると錢が出る。夫婦になり觀音のお告で御堂を建てたがまだ金が十兩も餘つた。

大歳の火

昔おふじといふ下女があつた。大歳の夜、旦那が圍爐裏の火を絶やしてはならぬと云ひつけたがおふじはいつの間にか消してしまつたので、他家へ火を貰ひに行つた。どこの家も寢てゐるのでずん〳〵行くと山の中に火が見えた。その家に行つて火種を乞ふと「火はやるがちよつとの間棺桶を預つてくれ」といふ。困つたが仕方が無いので棺を擔いで火を貰つて歸つて、棺桶は人に見つからぬ樣に部屋の奥に置しておいた。正月になつて四日經つても五日經つても棺を取りに來る者がない。困つて棺を明けて見ると中は黄金でいつぱいであつた。おふじはそれを旦那に話すとお金はおふじに與れるといふ。おふじはその金で寺を建てゝいよ〳〵出來上つた日に旦那と二人で招ばれて行つた。その途中おふじは紫の雲にのり、寺へ入つて觀音樣になつてしまつた。おふじを年徳神といふ。

——兵庫縣美方郡——

青森縣　八戸　昔研　二ノ二八五

鳥取縣　石城郡　磐城昔話集　三四

岐阜縣　丹生川　うつしばな　六四

兵庫縣　美方郡　昔研　二ノ四二一

「正月さんの起り」（例出）

廣島縣　高田郡　昔研　一ノ二八五

「鶴池話」

岡山縣　御津郡昔話集　一〇九

「大晦日の夜」

大歳の客

昔ある所に馬方があつた。歳越の日の晩方になるまで一人の客も無く、是では歳も取れぬと思ひ乍ら歸つて來ると、並木の松の下に一人の癩病人が唸つて寢てゐた。馬方は自分がなさけ無いと思つたらまだこんな人もあつたと、親切に介抱して馬にのせて家につれ歸つたが、體中がくさいので土間のすみに莚をしいて寢かしてどうやら年を取らせた。元日の朝になつたが昨夜の客は起きて來ない。搖つて見たが返事が無いので死んでしまつたかと思つてよく見ると大きな黄金の塊にかはつてゐた。

——愛知縣南設樂郡——

青森縣　八戸　昔研　二ノ二八六

「錢になつた話」

岩手縣　江刺郡昔話　三〇・六三

「座頭が身上に關つたといふ話」「六部五人が黄金箱になつたといふ話」

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　二二・三一

福井縣　坂井郡　昔研　一ノ三一

節榾を「年取男」といふやうになつた話。

愛知縣　南設樂郡　第一昔話號　六一

「大晦日の客」（例出）　藝備「昔話の研究」四三以下

廣島縣　四話あり。

一は乞食をとめる話。後の三話は火種を絶やす話。

高田郡のは乞食が來て「泊めてくれゝば火種をやる」といふ。

これは火種と乞食を泊めるのとがもとは一つである證據。

德島縣　阿波祖谷山昔話集　九・一二六

前者は「三軒長者」大晦日に二軒の長者にはさまれた貧乏人の息子が、屋根の上で不吉なとなへごとをするので、閉口した兩長者が米や錢を分ち、三軒とも長者になる。後者は、長者の家の女中が大晦日の夜泊めた七人の客は七福神で、その舅いでゐた死人が小判であつたといふ話で、火賣ひの條はない。

鹿兒島縣　甑島昔話集　一五六

〃　おきえらぶ昔話集　八二

沖繩　山原の土俗

〃　南島說話　一六

笠地藏

貧しい爺婆があつた。間もなく正月が來るのに餅を買ふお金がないので、二人で笠を作つてある雪の日に爺が町へ賣りに出た。途中までゆくと道ばたに地藏樣が十二體、頭から雪をかぶつて寒さうに立つて居られた。餘り氣の毒なので順に持つてゐた笠を被せてあげると一つ足りなかつた。しかし何とも一番しまひの地藏樣が氣の毒なので自分の被つてゐた笠をぬいで被らせて歸つて來た。婆さんが出迎へて餅ほと聞くから、地藏樣のことを話すと、婆は「それは良い事をした」と一緒に喜び、それでは火でも燃してあたつて寢ようと、やがて床についた。翌朝外の掛膳に目を覺して雨戸をあけて見ると、軒下に搗きたての餅が澤山置いてあるので、驚いて向ふを見ると、笠を被つた十二體の地藏樣が、爺の笠を被つた地藏樣を先頭にして歸つて行かれる處であつた。

——福島縣石城郡——

青森縣　八戸　昔研　二ノ二八九

岩手縣　紫波郡昔話集　六七

〃「六地藏が恩を返す」　紫波郡昔話　一一九

〃「七人地藏樣」　江刺郡昔話　四

〃　膽澤郡昔話集

秋田縣　角館町　聽耳草紙　二三三

山形縣　最上郡　櫻里村誌　二五八

〃　昔研　二ノ一八四

「地藏の返禮」

福島縣　磐城昔話集　三二

「笠長者」（例出）

新潟縣　中魚沼郡　第一昔話號　四六

〃　南蒲原郡　加無波良夜譚　一四三

〃　南魚沼郡　昔研　一ノ三一五

「六地藏の報恩」

〃　佐渡　同書　二ノ一一七

長野縣　小縣郡　第二昔話號　五五

鼠に曳かせて來たといふ條、他には見えず。童話化の經路。

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　九

「地藏の報恩」

千葉縣　五井町　市原郡誌　四八〇

島根縣　邑智郡　昔研　二ノ四一七

在りとのみにて、詳細不明。

〃　同書　二ノ五六二

德島縣　美馬郡　阿波祖谷山昔話集　六二

「正月神さま」

財寶發見

佐賀縣　杵島郡　口承文學（手帖三五）

六人の僧形の歸つて行く後姿のなつかしさと、婆がそれはよいことをしたとて共に悅ぶ平和な光景。東海道名所圖繪などにも見ゆる尾張笠の昔物語りも同系統。

「大歲の火」と關係あり。

弘法機

ある家で女房がせつせと機を織つて居るところへ、旅僧が托鉢に來たので機から下りて布施をする。二度來ても三度來ても快く機から下りて物を與れるので、旅僧はその素直なのに感心し、禮に貴物をやると云つて、ヌキベツ（横絲の綿苧）をくれて去つた。これはたて糸さへ紡んで立てれば、ヌキは一生使つても無くならぬといふヘツであつた。成程三年の間織り續けても少しも減らぬ。ところがその絲草の穴へ指を入れてはならぬと戒められて居たにも拘らず、三年も使ふのに減らぬわけは無いがと不審して、指をその穴に入れて見たら、忽ちヌキベツはかつちやらと無くなつた。其旅僧は弘法樣だつたといふ。

——青森縣八戸——

青森縣　八戸　昔研　二ノ二八七

四例あり　其中一つだけ機織る善心の女あり。

〔例出〕

これはもとの形に近きかと思はる。あとの三つは破片か、或は誤傳か。

遠江井川　旅傳　一三ノ一一

長崎縣　壹岐島昔話集　一一八

「泉の小くだ」

寶手拭

昔、ある日一人のみすぼらしい物貰ひが來た。恰度其家の主婦は機を織つて居て、やかましがつて追出したが、女中が内密に掘飯をやつた。物貰ひはそのお禮に手拭を一本與れた。その手拭で顏をふくと、顏がきれいになる。皆もびつくりしてそのわけをきくので昨日の事を物語ると、主婦は口惜しがつた。幾日かして前の物貰ひが來たので、主婦は丁寧にもてなして色々のものを澤山やつた。物貰ひは朱子の帶一本をお禮に置いて去つたが、それをしめるといつの間にか帶は蛇になつてゐた。

——壹岐島昔話集——

青森縣　八戸　昔研　二ノ三二九

四話あり。

その一は「猿のはじまり」善心の女、旅僧から貰つた島紗のやうなもので顏を拭くと若くなり、無慈悲の夫婦は猿となる。

その二は「弘法大師樣の話」顏はみにくいが心がけよき飯炊女に弘法樣が法衣の袖をちぎつて與れる。

その三は「和尙樣のムカシ」嫁姑の話。姑の顏が馬のやうになる。嫁に裏返して拭けばなほることを敎へて行く。

その四は「弘法樣と女中」女中は美しく、女主人は馬になる。

美話化。

新潟縣　佐渡の昔ばなし　一九一

靜岡縣　志太郡　靜岡縣傳說昔話集　一二九

德島縣　阿波祖谷山昔話集　一〇四

長崎縣　〔例出〕　壹岐島昔話集　一一七

全國記錄　四六

若返りの水（彼岸水）

昔爺と婆とあつた。婆は山へ薪を採りに行つたが木を伐つてゐるうちに咽喉がかわいてたまらず、山奥へ行つて泉を見つけて飲んだ。すると十七八の若い娘になつてしまつた。家に歸つて來ると爺が驚いてわけをきくので話すと、爺ももう一度若やぎたいとて泉をたづねて行く。家では婆さんがいくら待つて居ても爺さんが歸らないので行つて見ると、爺さんは泉のほとりで水を飲みすぎて赤ん坊になつて居た。

——栃木縣芳賀郡——

栃木縣　芳賀郡　第二昔話號　三二

「子供になつたお爺さんの話」〔例出〕

長野縣　小縣郡民譚集　一六一

廣島縣　神石郡豐松村　藝備「昔話の研究」八一

「よもぎの由來」

親の病氣に孝子が伊勢の若水を汲みに行く。歸つてみると死んで三十日も經つてゐるがこの若水で生き返らせた。妻が煩はしがつてその水を捨てるとその藥から不思議な木とも草ともつかぬものが生えた。夜の間に生えたのでもとは「夜の木」と云つた。

島根縣　邑智郡　昔研　二ノ四六四

落語にまで採用せらる。大話化する端緒である。

この話では授かる原因の段脫落せり。恐らくは亦見知らぬ旅人などの授けしがもとか。

黃金の鉈

正直な爺樣が、淵の岸で木を伐つて居たら、ふとした拍子に鉈を水中に落してしまつた。困つて居ると、淵の中から美しい姉樣が手に黃金の鉈を持つて出て來て、鉈を落さないかと尋ねる。爺樣は落したといふと黃金の鉈を前に差出して、これでは無いかと尋ねた。こんな立派な鉈では無い、さびた古鉈ですといふと、姉樣は又淵の中に入つて行つて古鉈を持つて出て來たので、それだといふと、姉樣は爺樣の正直なのを賞めて鉈を兩方共與れた。その お隣で爺樣の家は長者になつた。

隣の婆樣は、爺樣が黃金の鉈を貰つた話をきいて怠け者の爺樣を木を伐りにやつた。いくらたつても鉈が落ちないのでわざと淵の中へ投込んだ。すると淵から美しい姉樣が黃金の鉈を持つてあらはれたので、爺樣はあわててそれは俺の鉈だと姉樣の手から取らうとしたので、姉樣はこの不正直爺と云つて、その鉈で頭を切り割つた。爺樣は血みどろになつて家に歸つたが、これから家は益々貧乏になつた。

——岩手縣下閉伊郡岩泉町——

岩手縣　下閉伊郡　聽耳草紙　七〇

「黃金の鉈」〔例出〕

岩手縣　江刺郡昔話　八二
鉈の代りに觸ると雨のふる不思議な玉を得。
福島縣　石城郡　磐城郡昔話集　三九・一七二
二話あり。
愛知縣　額田郡誌　五二六
美合村大字岡の鈴木氏方には龍宮の斧を藏す。これは珍らしがつて人間界の鉈と取換へたものといふ。
大分縣　直入郡昔話集　二七
「金の斧銀の斧」

龍宮童子（心得童子、如意童子ともいふ）

昔肥後の國に一人の爺があり、山に行つて薪を伐りそれを町へ賣りに出て暮して居た。ある日薪はどうしても賣れず、くたびれてしまつたので町の中の橋まで來てその薪を一把づゝ川の淵へ投げ込み龍神樣を拜んで歸らうとした。すると淵の中から美しい女が小さい子供を一人抱いて出て來て、龍神樣から薪のお禮にとて子供を與れた。そしてこの御子ははなたれ小僧樣と云つて何でも願ひをきいて下さるがその代りに、毎日三度づゝ海老の膾を拵へて御供へ申さねばならぬと云つて、女は水の底へ歸つて行つた。

爺樣はその小僧樣を抱いて來て神棚のわきにすゑて、大切に育てた。何でも欲しいものを頼めば、ふうんと鼻をかむやうな音をさせて出して下さるので、少しの間に見ちがへる樣な大金持になつてしまつた。

爺樣は毎日町へ出て海老を買ひ膾を拵へて供へて居たがしまひにはそれも面倒になつて、はなたれ小僧樣に向つて「もう貴方に何も御願ひする事はありませんからどうぞ龍宮へ御歸り下さい。そして龍神樣へよろしく御傳へ下さい」と云つた。すると小僧樣は默つて外へ出て、しばらくの間家の外で鼻をすゝる音をさせて居たが、そのうちに段々と倉も家もなくなつて以前のあばら家だけが殘つた。爺樣はこれは大變と急いで小僧樣を引留めようとしたがもう姿は見えなかつた。

——熊本縣玉名郡——
昔研　二ノ三三二
二話あり。「龍宮の門松」「ギリが飛んだ話」
岩手縣　江刺郡昔話　一三・二三
〃　紫波郡昔話集　八
「福の神よげない」
新潟縣　南蒲原郡昔話集　八九
「龍宮童子」
熊本縣　玉名郡　旅傳　二ノ七
「鼻たれ小僧樣」〔例出〕　昔研　一ノ二二七
鹿兒島縣　喜界島　第二昔話號　二五
〃　喜界島昔話集　三
「龍神と花賣」
○參考
×桃太郎の誕生　五九
×昔研　一ノ一五一・二〇四

黃金小犬

愛知縣　額田郡　愛知縣傳說集　二五二
岩津町の富豪長者の由來。これは小さな蛇を助けて夢に小犬を贈られる。この犬は海中の寶云々といふことあり。毎日三升の米を炊き與ふれば三升の砂金を吐き、つひに長者となる。
之は記錄かと思はる。
鹿兒島縣　喜界島　島　二ノ四四〇
長崎縣　壹岐　第一昔話號　八一
「金を放る龜」
財寶發見

忽ち小僧

長野縣　下伊那郡山本村　露原　三號
安倍童子は狐の子。龜を助けて龍宮へ行き「トラの卷」と「リウセンガン」といふ寶物を貰つて歸る。トラの卷は肌に付けて居ると寒暑を感ぜず、リウセンガンをつけると鳥の言葉が判る。鳥の言葉に依り出世をしに京へ行き「忽ちわかる災難を、知らぬ者とそふびんなれ」と呼んで歩き、忽ち小僧の名を得、天子樣の病氣をなほす。

龍宮入り

青森縣　八戸　昔研　二ノ三三〇
外ケ濱の善助といふ男、鱗を助けて龜に迎へられ水都を訪問、開くなの玉手箱を開いて見て白髮となること浦島太郎の如し。
岩手縣　上閉伊郡　聽耳草紙　四六三
「龍神の傳授」
龍神より授かつた瓶に入つてゐた靈水で病を治す。誤つて割るとそのかけらのある地より草を生じ、それが艾だといふ。
若返りの水、のみすぎの笑話なども考へあはされる。

打出小槌

龍宮童子と同系の昔話。

爺が門松を川に投げ込むと、川の中から龍宮の使ひがあらはれて爺を龍宮へつれて行つた。いろ〳〵御馳走にあづかつて、歸りには小さい打出小槌を貰つて來た。何でも欲しいものが出るといふので試みにコメと云つて打つと米が澤山出て來た。次にクラといふと倉が建つてその中に米が入つた。隣の爺さんは羨しがつて譯をきゝ、打出小槌を借りて、一度に澤山の倉を建てようとコメクラコメクラと續けざまに云ふと小盲が續々と出て遂に隣の爺さんを殺してしまつた。

——熊本縣八代郡——
昔研　二ノ三三三

青森縣　八戸
廣島縣　藝備「昔話の研究」　七〇

米倉出よ、と打出小槌を振ると、小盲が澤山出て「爺さんまゝ食ひたい、婆さん菓子食ひたい」といふ。

これは子供の盲と見ゆ。童話化して行く經路がわかる。

岡山縣　岡山文化資料　二ノ六
熊本縣　天草　鄉土研究　五ノ六

熊本縣　八代郡
「米倉小盲」〔例出〕

話者が盲法師だつたことを考へると、この酒落が一段とおもしろい。

鹽吹臼

ある所に兄弟があつて、兄は情深く氣立てがよかつたが弟は慾深の博奕打であつた。

飢饉のつゞいた年、兄は貯へを段々と人々に施して貧乏になつてしまつた。或る日食べるものも無くなつて困つてゐると白い鼠の生えた爺がやつて來て、今まで村の衆の爲になる事をしてくれたから、よいものを持つて來たといつて、何でも出る石臼を兄に渡したまゝ行つてしまつた。兄が米出ろ、金出ろと云つて廻すと米や金が出るので又それを貧しい人に施してやつた。慾深い弟は兄の寶の臼の話を聞いて手に入れたいと思ひ、ある日兄を誘つて石臼を持たせて一緒に舟にのつて海へ漕ぎ出し、船の中で兄を殺してしまつた。そして弟は家に鹽が無かつたので、鹽出ろ鹽出ろと臼を挽きはじめると、鹽は舟いつぱいになつたが止め方を知らないので、どうしても止まらない。とう〳〵石臼といつしよに海の中に沈んでしまつた。

海の水の鹹いのは、今でもこの臼が廻つてゐるからである。

——德島縣美馬郡——
老媼夜譚　二九三

岩手縣　上閉伊郡
小人に逢つて毒饅頭と石臼とを交換する記述に、一寸法師式のをかしみを添ふ。

福島縣　石城郡　磐城昔話集　一六九
「海の水のしよつぱいわけ」

岡山縣　御津郡昔話集　一七一
德島縣　美馬郡　阿波祖谷山昔話集　八七
「海中の石臼」〔例出〕

○參考

×昔話研究　一ノ九ノ二一　支那類話。

善惡二兄弟、山神の教で小妖より石磨を貰ふ。賊之を盜みて云々。

×朝鮮民譚集　三〇
「海水の鹽辛い理由」

寶の引臼と盜。之を手に入れる順序は云はず、前半脫落か。

厄難克服

鬼むかし

福島縣　方言　四ノ五

會津にこの話あり。鬼と戰つた昔話の一類を言ふかと思はる。別に「狐昔」といふもあり。

なら梨採り

昔三人兄弟があつた。父が長い患ひで仲々治らず、奥山のなら梨を食べさせれば治るといふので上の兄が採りに出かけた。薪採りの婆さんに會つて道をきくと、奥山には怪物が居て今まで歸つた人が無いから行かぬ方がいゝと言ふ。止めるのをきかずに行かうとすると、もう少し行くと黑い鳥と白い鳥とが居る。黑い鳥が啼いたら行くな、白い鳥が啼いたら行けと教へて與れた。本當に黑い鳥と白い鳥が居て、黑い鳥が行くなガアと啼いたが、父の病を癒したい一心で行くと大沼があつて、そばに一本のなら梨の木があり實が甘さうになつて居る。兄は喜んで木に登つてもいでる

ると、池から怪物が出て來て兄を呑んでしまつた。次に次兄が行く事になり、これが亦怪物に呑まれてしまつた。三番目の弟は父のとめるのもきかず、藁人形を拵へて出かけた。途で例の婆樣にあつて兄の行方をきくと、怪物に呑まれた樣だから行くなと云はれた。けれども父の爲だし又兄の仇打もしたいとて、行く事になつたが今度は白い鳥が行けと啼いた。沼の邊りのなら梨の木に持つて來た藁人形を結びつけて自分は隱れて居ると、怪物は藁人形を人だと思つて呑まうとするが、結付けてあつて呑めないで居る所を弟が出て來て馬のりになつて喉をしめると、赦してくれと云ふので兄二人を出せば許してやるといふと、兄二人を吐き出した。三人はなら梨を澤山もいで父に食はせたので病氣は治つた。

——岩手縣稗貫郡花卷——　昔研　二ノ四二八

四話あり。前三つは「さやずりふくべ」文句はやゝ面白いが前後のつゞきは明かならず、いづれも破片。

岩手縣　紫波郡昔話　六六

「山梨の化物」

〃　上閉伊郡　老媼夜譚　一九七

「奈良梨」

父と二人の男の子、懷妊の母の爲にとりに行く。途中色々の警告と援助あり。

その形は正しく昔話。

岩手縣　稗貫郡花卷　第二昔話號　三〇

「三人兄弟のなら梨もぎ」（例出）

山形縣　東田川郡　昔研　一ノ三七四

「成田李」

こわれてゐるらしい形。

秋田縣　仙北郡　角館民俗資料　二八一

「三人兄弟と和尚」　化けた古狸は和尚に退治される。

洪印と狐とによくある型の流用か。

新潟縣　佐渡昔話集　一四八

栃木縣　那須郡烏山町　國民童話　一二二

「化物梨の木」

鹿兒島縣　奄美大島　昔研　二ノ三七六

「情深い三男」

（參考

ヤーズレー　七六

さやずりふくべ

「なら梨採り」系の話。歌うたふ瓢を二人の兄は怖れて逃げ歸り、三番目がとると賣は寶物であつた。

青森縣　八戸　昔研　二ノ四二八

岩手縣　上閉伊郡　老媼夜譚　一九六

〃　上閉伊郡昔話集　二六

「瓢簞長者」

歌ひ瓢骨とも關係がある。

人影花

「鬼ケ島渡り」「美女奪還」「天人女房」の話などに伴ふ。「人花」とも云ひ、佐伯郡では男花女花といふ。

青森縣　八戸　昔研　二ノ四二八

廣島縣　藝備「昔話の研究」　一一九

同書　一九六

鬼の子小綱（鬼の笑）

爺と婆とが娘を育てゝ居たが或時鬼にさらはれてしまつた。爺は長い間捜した末、山奥で子供に會つてたま〳〵それが自分の娘の子である事を知つた。親子三人會つて喜んで居る處へ鬼が歸つて來たので、爺を押入の中へ隱して置いた。鬼は人臭い〳〵とて方々探すので爺の來た事を語り、母と子とで食はないやうに頼んで爺を出した。鬼は食べたくてたまらないので、風呂で煮殺して食はうと子供に風呂を焚かせる。子供は爺を拔道から逃がしてやつて、知らぬ顏をして風呂を焚いて居た。爺がもう逃げのびたと思ふ頃風呂に蓋をして大石をのせ杓子を一本持つて、母と拔道から逃げ出した。鬼は來て見ると子供は居ないし、風呂の中も空つぽで何もない。逃げたと思つて怒つて追かけた。爺と母と子とは海岸に出て船へのつて漕出さうとする所へ、鬼が追付いて來て口惜しがり海水を呑みはじめた。見る〳〵うちに海水が減つて船は海岸へ戻り、鬼の手がとゞきさうになつた。そこで鬼の子は杓子で滑稽なまねをして見せたので、鬼は笑ひ出してその拍子に海水をはき出し無事に船は沖に出て家に還る事が出來た。

——長野縣南安曇郡——

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚　一三五

「鬼の子小綱」

これには後段あり。鬼の子の小綱燒け死んで、その灰は虻蚊となるといふ。

岩手縣　岩手郡雫石　　聽耳草紙　一三三

「よい夢」

よい夢を見たといふ小僧、舟に入れられ鬼が島に流れつく。鬼を笑はせ海水を吐き出させ、浮靴と生針の寶物を持つて歸る。話はやゝ略され、又複合してゐる。

新潟縣　　南蒲原郡昔話集　一四三

「母子と鬼」

一四五　の「鬼の子」話の前半は聟入。

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　九一

「七つの釜」

鬼を笑はす條は無し。

これが成功譚の後に伴ふはグリムにも例多し。

美女奪還

鬼の子小綱と同型の話。逃竄說話の一型式。

青森縣　三戸郡八戸　　昔研　二ノ四二八

「鬼が島渡り」

二話あり。

その一は鬼に呑まれて腹の中で鬼を笑はせる。白犬を助手とすることは桃太郎に近い。

その二は嫌聟入のやうな爲端で娘を鬼に與れる。それを助けに行くのがボサマである。

岩手縣　　紫波郡昔話　一三八

「鬼にさらはれた女」

夫は笛吹きの名人とあることで天人女房の破片であることを知る。

岩手縣　　紫波郡昔話　一八六

「天のお姫樣と若者」天上聟入。

〃　岩手郡　　聽耳草紙　九四

「姉のぼからひ」

〃　　同書　九八

「鬼の豆」

秋田縣　仙北郡　　角館民俗資料　八七

宮城縣　桃生郡　　鄉土の傳承　三

石川縣　　江沼郡昔話集　一二六

「神さまと酒のみ」

長野縣　南安曇郡　　第一昔話號　五三

「鬼を笑はせる」（鬼の子小綱參照）（例出）　小縣郡長久保年中行事

〃　蛇聟入の發端。一月晦日の鬼の目の傳說。

靜岡縣　志太郡燒津町　　靜岡縣傳說昔話集　四六三

岐阜縣　吉城郡　　ひだびと　五ノ二五〇

「鬼の子小綱」

旅の藥屋が藥を酒に加へて鬼を殺して、若い女房を助け出すことは、綱光大江山に似てゐる。但し題名の小綱に當るものは無い。

兵庫縣　氷上郡　　旅傳　一〇ノ四ノ七四

「女房のはからひ」

伊勢四郎といふ男。一旦賣つた女房が、山奥の山賊に請出されてゐるのを助けに行く話。

「蓬の葉に露一つ」の挿話あり。

鹿兒島縣　喜界島　　島　一ノ六ノ三六六

「花のマダズミ」

妻が後生（あの世）に行つて夫の命を貰ひ歸る話。

鹿兒島縣　喜界島　　昔話集　一〇五

〃　　島　一ノ六ノ五七三

「アサナローの花」　　喜界島昔話集　一一三

厄難克服

鹿兒島縣　　島　二ノ七ノ四三六

「鬼の子」

探しに行くは弟、姉は之を虎がめにかくす。暇を見て子供と姉弟と三人で逃げ出す。疑に針千本をたてゝ置くと返事をする笑話あり。その代り海水を呑み干されても尻を叩く笑は無し。鬼の子が鳥に變ぐ前に海に投じて死ぬ哀話を伴ひ、情の動きは昔樂のやうである。

鹿兒島縣　　喜界島昔話集　一一〇

「椎の木山の妻」

夫婦で親ゲンドーに出かける。夫が途中の山で椎の實を探つてゐる中に妻を大蟹人にとられる。乾鰯を賣りに行つて妻を救ふ。

○參考

ヤーズレー　九三

鬼ヶ島脫出

迷ひ込んだ鬼の家より鬼を殺して逃れる話。

德島縣　名西郡　　昔研　一ノ一三三

「白い鳥」

姉妹二人道に迷うて婆の家に泊る（椎拾ひと似て居る）。爺が歸

つて來て二人を食ふ相談をして居るのを立聽し、釜に湯を沸かす婆をうしろからくどへ突落して逃げる。爺も鬼となり追かけると白い鳥が來て二人を助けてめせて行つた。白い鳥は氏神樣であつた。

竈に突落す所までヘンデルグレッチェルと似てゐる。

鹿兒島縣　　喜界島昔話集　七〇

「二人兄弟」

繼母に憎まれて家を追はれた二人、互に留をもつて、又弓の弦が切れたら死んだと思へと云つて別れる。弟は奉公し、死鞭と同じ効ある力を貰つて出る。迷つて鬼の家に入り美女に教へられて刀を以て鬼を殺し、寶物の生鞭ととりかへて來る。弓の弦がきれて兄の死を知り、葬禮に間に合うて生鞭で蘇生さす。

七つの釜

鬼ヶ島の變化。

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　九一

鬼の聟の家に舅が行つて七つの釜を見せて貰ふ話。之を七つとも見た者は必ず殺されるといふ。舅は一つづゝ褒めて一足づゝ退く。鬼はその智慧に感心して無事に歸す。

後半はこわれて居る。

鹿兒島縣　　喜界島昔話集　一〇五

アサナロー花の話の中は酒甕を見せてもらふ話がある。

千里の靴

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　一五九

「捨て子と鬼」

貧しい母が三人の子を育てかねて奥山に捨てた。夜になると兄二人は泣き出したが、弟は兄等を勵まして灯を目あてに行くと鬼の家であつた。婆は三人をかくしておいた。其處へ鬼がかへつて來て人臭い〳〵と云ひつゝ、獄されて千里の靴をはいて探しに出て行つた。留守に三人は別のみちから逃げたが道に例の鬼が高鼾で寢て居る所へ行き當つた。こゝでもまた弟の智慧で鬼の足の千里の靴を奪ひ、三人無事に親元へ歸ることが出來た。

千里の靴は外國のものゝ傳來か？

母が貧しくて子を山林に捨てることは、ペンタメロネなどゝ全くおなじである。

水の神の文使ひ

或男が夕方急いで川端の道を通ると、雜魚釣りをして居た一人の男が呼びとめて、下の方の淵のほとりにも一人の雜魚釣りが居る筈だから、これを屆けて呉れと云つて一封の手紙を渡した。

男はそれを何氣なしに下の淵のほとりに居た人に渡すと、開いて見て居たが、急に一寸まつてくれ、今淵に落し物をしたからと云つて水の中にとび込んだ。暫くすると出て來て俺は實はこの淵に住む河童で、今上の河童から「此男は柴尻でうまいから捕つて食へ」と云つてよこしたのだが、お前があんまり正直だから食ふ事は出來なくなつた。そして、その心に賞でてそをやると云つて黄金包みを呉れ、誰にも云つてはならぬぞと云つて淵にとび込んで行つた。それから男は金持となつた。

——岩手縣岩手郡——

青森縣　三戸郡八戸　　奥南新報　昭和五・四・四

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚

〃　上閉伊郡昔話集　一九

「盡きぬ錢緡」

〃　贈澤郡　　黄金の馬　一

厄難克服

「黄金の馬」

お蘆に貰つたのは駒。駒形山の傳說となつてゐる。

岩手縣　岩手郡　　聽耳草紙　四四

「上下の河童」（例出）

岩手縣　下閉伊郡　　聽耳草紙　四二

「兄弟淵」

二つの淵の傳說となつてゐる。六部の手紙書換の條あり。

〃　柴波郡　　柴波郡昔話集　一〇五

「大沼のぬし」

宮城縣　　登米郡誌　下ノ八一二

茨城縣　行方郡山田村　　民俗叢話　六二

「たぶつが池の獨り姫」

石川縣　能美郡　　昔研　二ノ三七二

「槇山長者」

主人公は八歳の子供。修驗者の手紙書換へあり。

京都府　桑田郡　　口丹波口碑集　三七

「川の主」

和歌山縣　　地方叢談

大分縣　日田郡　　趣味の傳說　二二九

猿神退治

昔黒石の正法寺といふ寺には、何遍和尚樣がついても化物に食はれて困つてゐた。或時そこへ托鉢して來た和尚樣があつたのでこの空寺に泊めた。和尚樣は師匠から「空家に泊まる時は一つ戸の口に寢よ」と敎へられたのを思ひ出して、臺所の釜の下に入つて寢てゐると、夜中に太堂の方からガタ〳〵と何だか出て來て、今日御晦走のある前祝ひだと言つて

丹波の國デンジョウ坊に此事必ず聞かせた——チウ、、、、

と歌つて踊つた。それから人臭いナ〳〵とそこらを探し廻つたが何も居ないと思つたか出て行つてしまつた。朝になつて村人は、又和尚樣は骨になつてゐるだらうと見に來ると生きてゐるので、これは偉い和尚樣だと感心してこの寺の住職になつてくれと願つた。和尚はそれなら又來るから、それまで待つてくれと丹波の國へデンジョウ坊を尋ねて行つた。するとデンジョウ坊といふのは猫であつたが、それを借りて帶つて來ると、村人はもう歸つては來るまいと噂してゐたところであつたから、喜んで寺の住職にした。猫はいつも和尚について歩いて一時も離れない。譯を尋ねると、この寺の化物といふのは古い鼠で、自分がゐなければ貴方は忽ち食はれて了ふのだといふ。これを退治するには自分の兄弟猫の助けがなければならぬといつて、自分の代りに繪姿を貼つて十日程留守にしたが兄弟を連れて戻つて來た。そしてその夜中に二匹で古鼠と久しい間戰つて、猫も鼠も共斃れにたほれて死んだ。鼠の足で經机を作つて今も寺に寶物となつてあるといふ。猫は手厚く葬つて和尚樣はお寺の住職となつて暮したとさ。

——岩手縣稗貫郡——

岩手縣　稗貫郡　　昔研　一ノ五〇九

「正法寺の古鼠」（例出）

「稗貫郡黒石の正法寺の古鼠」

此寺に昔話の多きことは、ボサマを庇護したかと思はれる。

岩手縣　上閉伊郡　　聽耳草紙　七四

「樵夫の殿樣」

秋田縣　平鹿郡　　昔研　二ノ三六四

「丹波の國の素平太郎」

山形縣　　旅傳　七ノ六

「二毛犬・四毛犬」

山形縣　大山　　旅傳　一ノ八ノ六五

五月十五日の大山の犬祭の記事中に傳說としてある。

宮城縣　桃生郡　　鄉土の傳承　三

「竹篦太郎」

犬の名は竹篦太郎といふ。

福島縣　石城郡　　磐城昔話集　五九・一五一

「ばけものゝ話」

石川縣　　鹿島郡誌　九五一

七尾山王社の人身御供。

〃　鳳至郡柳田村　　鳳至郡誌

新潟縣　南蒲原郡　　加無波良夜譚　三七・二〇〇

二〇七に　猫にも二話あり。

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　四八

「丹波のお作丈」

建長寺の和尚話と結合してゐる。

長野縣　上伊那郡　　鄉土研究　一ノ三ノ一七〇

上伊那赤穗村光前寺に早太郎の碑があり、早太郎又はヘイボ太郎といふ犬で、美濃伏見里に於て怪物を噛んだといふ傳說がある。

長野縣　下伊那郡　　傳說の下伊那　一二二

長野縣　北佐久郡　　北佐久口碑傳說集　二二七

「普正寺の化物」

化物は古猫、望月の普正寺といふ寺、無住の時化物等の歌より知つて「高崎のたんぼろりん」といふ犬をつれて來て退治させろ。

厄難克服

兵庫縣　城崎郡　　昔研　二ノ四一八

「人身御供」　犬の名はなし。

この話は破片。

島根縣　邑智郡　　第一昔話號　七三

「猿退治」

德島縣　　阿波祖谷山昔話集　五

正月七日に出て千里四方の洗螺貝の中に三年間暮す。「すつぺい太郎に知らしてくれるな」の歌はあるが、退治話は無い。

福岡縣　鞍手郡　　福岡縣昔話集　八八

「日向の日向次郎」

〃　糸島郡　　同書　八九

「化物退治」

長崎縣　南高來郡　　島原半島昔話集　九三

「地藏と旅人」

〃　　同書　九五

「村の神樣」

二話とも世間話化してゐる。

熊本縣　葦北郡　　昔研　一ノ三三四

「婆に化けた猿」

或男　山の家に泊るとその家の婆は猿で、犬を食つてしまつた。

「濱に出て四十年生きとる犬と勝負させう」といふので、つれて來て勝負させると兩方共死んでしまふ。

話はこわれてゐるがたしかに猿神退治系のもの。

三國傳記の目檢校　カマタラノ「メイケントウ」

鹿兒島縣　　甑島昔話集　一四八

「三太郎犬」

旅人馬（板橋三娘子型）

一人の和尚が六人の若衆と共に山道を逃ひ一つ屋に泊つた。その家の爺は夕飯の支度をしようと云つて炉に粥の鍋をかけて置いて隣室へ入つて行つた。和尚が隙見すると鹽へ土を入れそれに何か種をばら〳〵とまいて蓆をかけて暫く置くと青々と草が生えて來た。和尚が知らぬ顏をしてゐると、その草をもつて室から出て來て鍋の中に入れて煮て皆にすすめたが、和尚だけは食はずにふところに流し込んだ。その後爺は風呂をすゝめ、若衆を入れると皆馬になつてしまふ。和尚はその間に逃げ出すと爺は心づいて鬼の正體をあらはして追かけて來た。南無阿彌陀佛を唱へつゝ逃げてやつと夜明けとなり、鬼も仕方無く引返して行つたので、和尚は危く助かつて人里へ歸ることが出來た。

——山梨縣西八代郡——

友人の助力あつて又もとの人間となる話もある。

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚　二七五

綿の薄を食へば又人の形となる云々。

末めでたしであるから本の形といふべきか。

秋田縣　仙北郡　　昔研　一ノ四六二

「馬毛の生えた六部」

旅で怪寺に泊り、和尚と思つたのが實は馬で、逃げた跡に馬の沓を投げつけられ、其處だけ馬の毛が生えた。

福島縣　石城郡　　磐城昔話集　五一・一三九

これは牛にする話。

山梨縣　西八代郡　　續甲斐昔話集　一三〇

「人が馬になる」（例出）

鹿兒島縣　　喜界島昔話集　九七

「旅人馬」

よほど外國風の結構が見え、鹽害らしくはあるが、直接のものとは思はれない。

鹿兒島縣　　甑島昔話集　一二四

鹿洪比べあり。

沖永良部島　　おきえらぶ昔話集　一四七

「旅人馬」

危險の行きどまりまで行く事がこの話の叙法か、所謂スリル。

○參考

×南方隨筆　二二八

×奇異雜談集

×クラヴストン　一ノ九七

×老媼夜譚　二四七のものなどは復讐を伴ふ。此方が今昔などよりも幻異志に近い。

×今昔物語　下ノ六一〇　には復讐なし。鬼の家に逃げ込み、なほ救はれる。夜更けて鬼の歸る條は、なほ昔話の形を保つてゐる。

×幻異志　板橋三娘子の話がある。

×寶物集　親が馬となつたのを子が助けた天竺の話。

續　續　城（脂取り）

旅人馬と同系。人を捕へて肥らせ、又脂や血をしぼりとる話。

嘘話參照

岩手縣　　紫波郡昔話集　一四一

「怠け者」

厄　難　克　服

人間の脂しぼりで續續城式の話となり、結末は夢としてゐる。結末の夢としてある所を見ると、後に入つて來たものゝ利用である事が判る。ボサマの語り物か。

青鬼式抑話はあるが「あけてみるな」の禁は無し。大きな家に女一人といふ所、板橋三娘子と似てゐる。

又婆に助を乞ふと「俺はあの家のお蔭で暮して居る云々」とこれは今昔に近い。

徳島縣　　阿波祖谷山昔話集　九五

「血を搾る家」

鹿兒島縣　喜界島　　昔研　一ノ三三一

「力士泉川」

力士泉川が山賊の家に行つてみると、人を飼つて肥らせ鬼に賣る算段をしてゐたのでこれらの人を助け一歸した。

鹿兒島縣　　喜界島昔話集　一〇八

「脂取り」

三枚の御札

或寺の小僧が山へ花を折りに遣つて下さいと和尚に頼むと、鬼が出て來ると大變だから行くなと云はれたが、どうしても行きた

いと云ふと和尚は守札を三枚與へて、困つた時があつたらこれを投げろと敎へてくれた。

小僧が花を折つてゐると婆が出て來て、いゝ物をやるからと云つて家につれて行かれた。そしてその夜は其處に泊ることになつた。夜になつて雨がふつて來た。寢たがら雨だれの音を聽いてゐると「タンタンたるぎの水はづみ、起きてばんばの面ア見ろ」と音がする。小僧はそつと婆の方を見ると、婆は鬼になつて居た。これは大變、どうかして逃げようと思つて便所に行きたいと云ふとやつと出してくれたが腰に繩をつけそのはしを挽臼に結びつけられてあつた。「小僧いゝか」と聞く度に「まだまだ」と返事をしながら、腰の繩を解いて柱に結びつけ守札を一枚さして返事をして與れと云ひ置いて逃げ出した。

婆はいつまでたつても小僧がまだ〳〵と云ふのでひつぱつてみたらもう居なかつた。怒つてすぐ追かけて來た。追ひつかれさうになつたので川出ろと云つて守札を一枚投げると大川が出來、又危くなつて大きな山出ろと投げると大山が出來た。婆がその山に上りかねてゐる中、小僧は寺に着いて和尚樣に戸棚の中に隱して貰つた。婆はとび込んで和尚樣と押問答をし、遂に和尚を食ふといふ。和尚は拔備比べをしようとて婆に豆粒になれと云ふと、コロリと小さな豆粒になつてしまつたので、和尚は魏いてゐた餅につけてその豆を食つてしまつた。

——秋田縣仙北郡角館——

「鬼の家の便所」「和尚と化物」「耳切團一」など參照

この話多く和尚の參與あり。

青森縣　南津輕郡黑石　　津輕口碑集　二九

菖蒲の中に隱れて助かると云ひ、五月五日の節供の由來と結びついてゐる。

青森縣　　津輕昔コ集　九六

「小坊糞（こんぼはば）いゝが」

岩手縣　　江刺郡昔話　四一

惡鬼が芥子粒になつて和尚に食はれた話。

〃　　膽澤郡昔話集

〃　　紫波郡昔話　七八

「山女」

これは御札が一枚で、和尚も山女に食はれ、唐櫃にかくした小僧は白い犬となつて出て來る。

秋田縣　仙北郡角館　　聽耳草紙　九一

「鬼婆と小僧」〔例出〕

〃　鹿角郡宮川村　　昔研　一ノ九二

「山姥と小僧」

秋田縣　平鹿郡淺舞町　　昔研　二ノ一二四

「小僧と鬼婆」

鬼は豆粒となつて和尚に食はれた。その糞から澤山の蠅がとび出した。鬼婆が日本中の蠅のもとであるといふことは蚤や蚊の起りと近い。

宮城縣　桃生郡　　鄕土の傳承　三

〃　栗原郡菅澤村　　同書　一ノ一七四

福島縣　石城郡　　磐城昔話集　五二・一四一

新潟縣　　南蒲原郡昔話集　一三六

「山婆と小僧」

〃　南魚沼郡　　昔研　一ノ四六九

「山姥と小僧」

長野縣　　小縣郡民譚集　二五〇

「便所の神樣」

〃　　同書　一九〇

「まつたらこうよ」

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　一〇〇

「小僧と山婆」

栃木縣　芳賀郡　　茂木昔話集　三六

「三本の手紙」

厄難克服

蛟端蛇聟入に近く、家の庭の割目を繕ふ約束で鬼に娘をやる。鮭が便所で三本の手紙をくれ、それにより菖蒲と蓬の中で難をのがれるといふ。五月節供の由來話となる。

岐阜縣　吉城郡上宮村　　ひだびと　五ノ二四八

二話あり。その一は兄弟。その二は鶴子の栗拾ひの後に續く。

〃　　國民童話　一〇八

熊本縣　　天草島傳說集錄　六三

長崎縣　南高來郡　　昔話採集手帖　六三

「子淩ひ鰤」

馬の援助により逃げ、三つの玉と打出の小槌で助かる。

キリンは鬼神か。

鹿兒島縣　喜界島　　島原半島昔話集　八四

「鬼の母」

母が鬼で、その子が坊樣から貰つたお札の守護によつて危難をのがれる。

鹿兒島縣　　昔研　一ノ三二七

「和尚と小僧」

三十三尋の大蛇が首を取られに來る。和尚は三枚のお札でその蛇を退治するが、それは麝香の蛇で、天とうから授かつた寶であつた。

○參考
唾が代つて返事をする事、北アフリカの例にある。
ヤーズレー　一一二

鬼の家の便所

「三枚のお札」の話からお札の條のぬけた話。よほど「天道さん金の網」に近くなつてゐる。
岐阜縣　吉城郡上寶村　ひだびと　五ノ二四八
二話あり。
その一は兄弟が婆の家に泊り便所の窓から逃げる。神樣に一心に願んで繩を柱にくゝりつけて置くと代りに、「まだや」と答へてくれる。
この點に興味を持つたかと思はれるが、便所の神の代理の話は他の地方にもある。
その二は鑑子の奪拾ひの後につゞく。鑑子の方が繩を歸にむすびつけて歸る。「まだや」と答へるのはその子自身である。

鬼を一口（和尚と化物）

「三枚のお札」の後段。
鬼が和尚に欺かれて化けたあげくに退治される話。
岩手縣　膽澤郡　黄金の馬　一
「和尚と小僧」
〃　上閉伊郡遠野　遠野物語　二七六
旗屋の縫といふ男、山に入り、青入道と智慧比べして小さくして火打箱に入れて持歸る。歸つてその火打箱の中を見ると青蜘蛛であつた。
栃木縣　芳賀郡　第二昔話號　三八
「蛋になつた山男の話」
守札は無い。
新潟縣　南蒲原郡
のらくら息子が鬼を欺いて小餅に化けさせて食ふ話。
栃木縣　芳賀郡　茂木昔話集　五一
鬼が蛋に化けて和尚につぶされる話。
德島縣　阿波祖谷山昔話集　二六
「狐と息子」狐を饅頭に化けさせて食つてしまふ。
大分縣　直入郡昔話集　八四
○參考
醒睡笑　一五

耳切團一

前半は三枚のお札。後は和尚が小僧の耳だけにお經を書かなかつたので、鬼に耳をとられたといふ話。
福島縣　石城郡　磐城昔話集　五四・一四七
「鬼婆に耳から食はれた話」
新潟縣　南魚沼郡　昔研　一ノ四六九
「山姥と小僧」

鬼と睨みくら

大分縣　豐後傳說集　一〇
百合若。鉦を眼にあてゝ鬼に目勝つこと。壹岐にもあり。
語りものによるか。
○參考
目勝といふ語は吾妻鏡に見える。看聞御記にもあり。

天道さん金の網

昔或所に三人兄弟があつた。母親が買物に出かけるとて兄弟等を呼んで「私が歸つて來るまでおとなしくして居よ、人食ひが來るかもしれないから、その時はよく氣をつけて居たければいけないよ」と言つて出て行つた。
夕方になつたら戸を叩くものがある。上の兄が出て行つて見ると、お母さんが居る。が、よく見たら手に一杯毛が生えてゐた。それで戸を閉めてしまつた。人食ひは今度は芋摺りで手をこすつて又戸を叩いた。兄が今度はお母さんだと思つて中に入れた。
その夜、兄が眼をさまして見たら、お母さんが何か食べてゐる。「お母さん何を食べて居るの」ときくと「腹がすいたからこれを食べてゐるのだよ」と云つて、食べかけの指を投げてよこした。兄はすぐ次の弟を起して外へ逃げ桃の木へ登つて居たら、末の弟を食べてしまつた人食ひは外へ出て二人を探してゐる。そして桃の木の上の二人を見つけて自分も登つて來る。二人は困つて「天道さん〳〵助けて下さい」と云つたら、天から鎖が下つて來た。兄弟はそれへ登つた。人食ひも眞似して「天道さん天道さん助けて下さい」と云ふと、鎖がさがつて來た。人食ひがどんどん登つて行くと鎖が切れて落ち、人食ひは石に當つて死んだ。
その時石の近くに植えてあつた唐黍の根に人食ひの血がついて赤くなつた。其次の年から唐黍の根は赤くなつたのである。
——廣島縣安佐郡——
これが日本の「赤頭巾」又は「七つの小羊」である。

厄難克服

福島縣　双葉郡川田村　　昔研　二ノ三二四

「花子と次郎」姉弟の兄弟。姉は食はれ弟は逃れる。金の綱の條は無し。

福島縣　石城郡　　磐城郡昔話集　五五・一四七

栃木縣　芳賀郡　　茂木昔話集　四八

埼玉縣　川越　　川越地方昔話集　九五

「兄弟星」

奈良縣　北葛城郡　　五倍子雜筆

廣島縣　　昔話採集手帖　六四

三話あり。　　藝備「昔話の研究」

〃　安佐郡　　安藝國昔話集　九七

「唐黍の根はなぜ赤い」〔例出〕

〃　呉市　　同書　九九

「お月さん　十三七ッ」

香川縣　高松市　　第二昔話號　三八

「山姥の話」

德島縣　　阿波祖谷山昔話集　七〇

福岡縣　築上郡　　福岡縣昔話集

「山姥の話」

福岡縣　宗像郡　　福岡縣昔話集

「兄弟星」

企救郡、鞍手郡の話一つづゝ載す。鞍手郡のは羊と狼の話。これは魏譯かと思はれる。附錄に山姥と三人姉妹の話あり。天に登りて星となるといふ。

福岡縣　　豐前民話集

「山姥と兄弟」

大分縣　西國東郡賀玉村　　第二昔話號　三七

「小供と狼」

熊本縣　天草郡　　昔研　一ノ四七四

「天道さん金ん綱」

類話二つあり。

熊本縣　　高木敏雄氏傳說集　二六七

「蕎麥」

豐前民話集のものとよく似てゐる。

長崎縣　北高來郡　　昔研　二ノ五二一

「山姥」

長崎縣　　島原半島昔話集　六五

四話あり。第三のものは「星になつた」とあり。第四は「目一つ五郎が來て食ふ」といふ。

長崎縣　北高來郡諫早　　口承文學　八ノ四

「狐と子供」

發端は牛方山姥の如く、天の綱の條は無い。

破片か。

長崎縣　南松浦郡　　五島民俗圖誌　二五八

「山うば」

〃　　壹岐島昔話集　五一

「山姥の話」

鹿兒島縣　　喜界島昔話集　一一五

「姉妹と鬼」

發端は牛方山姥の如く、鬼の腹を割い一母を活かしかへすことは「七ッの小羊」に似てゐる。

鹿兒島縣　奄美大島　　昔研　二ノ三七五

〃　沖永良部島　　おきえらぶ昔話集　一四〇

「天道さん強い綱」

○參考

×朝鮮の例あり。

日本昔話集　下ノ七三

×朝鮮民譚集　五

「日と月と星」

厄　鏡　克　服

×朝鮮民譚集　附錄　一

牛方山姥

昔ある一人の牛方が鹽鯖を積んで山の在所に賣りに行く途中、峠で山姥に行き逢つてしまつた。鯖をねだられて段々と投げ與へてしまふと、まだ後をついて來て、牛を食はせろと云ふ。牛を食べてしまふと今度はお前を食ふぞと云ひ出した。牛方は夢中で逃げて堤の上にあつた大木に登つて隱れようとしたが、生憎下の方に葉が無いので牛方の影が沼にうつゝた。山姥は水中に居ると思つて、沼に入つて探してゐるので牛方はその暇に逃げ出して山の下の一軒の家に逃げ込んだ。するとそれが又今の山姥の家であつた。そつと天井に登り梁の間にかくれてゐると、やがて山姥は歸つて來て炉に火をたいて餅をやき始めた。そして居睡りをしてゐるので牛方は屋根裏から茅の棒をぬいてそれで餅をさして取つて食べた。山姥は眼をさまして「餅は誰が食べた」とどなると牛方は小さい聲で「火の神火の神」と云つた。山姥は火の神なら仕方が無いと云つて、一片の黑こげの餅を食べると今度は鍋に甘酒を沸かしながら居睡りをはじめた。牛方は又長い茅の棒を使つてその甘酒をみんな吸つてしまつた。山姥が眼をさまして又誰だと

どなると、火の神火の神と答へた。山姥は、もうこんな晩は寢た方がいゝ。石の唐櫃にしようか、木の唐櫃にしようかと獨言を云ひつゝ、石はつめたいから木のからとにしようと、中に入つて蓆を立てゝ寢てしまつた。牛方はそれを見て梁から降りて來て炉に火を焚き湯をぐら〳〵と沸かしておいて、雖で木の唐櫃に穴をあけた。中の山姥はその音をきゝ乍ら「明日に天氣と見えてきりきり虫がなくよ」と云つて居たが、そのうち熱い湯を穴からつぎ込まれて、とうとう牛方に鹽を打たれた。

——越後南蒲原郡——

後半が仇討ちする話と、天道さん金の綱の樣に木に登つて逃れる話と二つある。

青森縣　三戸郡　民俗學　五

〃　八戸市　昔研　二ノ四二九

三話あり。その一は「鬼婆と鱈助サアブ」

牛の食はれる條が落ちてゐる。

その二の「山姥」は一の完形かと思はれる。

その三は「牛方と山蜘蛛」

珍らしいのは路傍の堂の中で子供が泣いてゐるといふ條で、それを牛にのせてやると大きな鬼婆（又は山蜘蛛）となる。

岩手縣　上閉伊郡　遠野物語　九九

發端瓜子姫と同じ。山母に追はれた娘、一つ家の若い女に匿くまはれ、その女と二人で山母を殺して逃げる。

岩手縣　上閉伊郡　老媼夜譚　二一五

「牛方と魚」

傳說の形となつてゐる。

岩手縣　紫波郡昔話集　八七

「牛方と山婆」

野宿の牛方、山婆に迫られ百姓の家に入つて妻女にかくまはれるが、その妻女が牛方を殺すといふ珍らしい形である。

湯をかけて殺すこと、他の話の山姥を殺すのと同じで、誤りか話かへかであらう。

岩手縣　九戸郡誌

少し變つた型。山姥と賭をした牛方が負けて追はれゝ娘の居る一軒家にかくれた。娘は騙して山姥を殺す。山姥に食はれた牛七匹の毛の數と米の數とが昔錢となり金持の夫婦となる。

岩手縣　岩手郡滝澤村　聽耳草紙　一〇〇

「山男と牛方」

牛三疋を食はれ船矧きに助けられる。山婆は木に登らうとして落ちて死ぬ。

金の綱と似てゐる。

岩手縣　岩手郡永岡村　岩手郡昔話集

聽耳草紙のものとほゞ同じ。

秋田縣　仙北郡　角館民俗資料　二四六

牛方山姥の家にかくれる。

山形縣　東田川郡　昔研　二ノ三一八

「鯖賣りの話」

山婆の所に鯖賣りが來る。但し牛方では無い。

福島縣　石城郡　磐城昔話集　五六・一四八

「馬方と鬼婆」

新潟縣　南蒲原郡　越後三條南郷談　一一九

「鬼婆と魚賣」

鯖賣り。甘酒も餅もあり。〔例出〕

新潟縣　南蒲原郡昔話集　一三九

「鯖賣りと山婆」

富山縣　上新川郡　昔研　二ノ二七〇

「魚賣りと鬼婆」

牛はなく鰤を賣る男。

石川縣　江沼郡昔話集　四四

「狐と馬方」

山姥の代りに狐で、やはり馬の足をよこせ、などと云ふ。鎗は逃げて歸る。

これは尻切れである。

栃木縣　芳賀郡　茂木昔話集　四六・五〇

二話あり。その一は「魚屋と山姥」

終りが天道さん金ん綱に近い。

その二は「山姥を退治した宿さん」

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　一四七

「馬方と鬼」

鬼の家に行き仇討をする。鬼を殲殺して釜をあけてみると、松脂となつてゐた。それを賣つて長者になつたといふ。

後の一段は新話であらうか。

長野縣　北安曇郡　小谷口碑集　一九

「三十郎の話」

三十郎は牛方。干鱈をつけてゐて峠で山姥にあふ。唐櫃に熱湯を流し込んで殺すと大きな山蜘蛛であつた。

岐阜縣　吉城郡　ひだびと　五ノ三

「牛方山姥」

岡山縣　邑久郡　岡山文化資料　三ノ四

「馬子と鬼婆」

鹽をくれと云つて皆食ふ。馬を食ふ事に無し。馬子は山姥の家に

ついて行つて風呂で殺す。

廣島縣　豐田郡　　安藝國昔話集　九五

「長太と鬼」

〃　安佐郡　　同書　九二

「長吉と鬼婆」

馬をつれて鹽を買ひに行つた歸途危難にあふ。山婆を退治し死體を唐黍畑へうめたので、根が赤くなつたといふ。

廣島縣　山縣郡　　昔研　一ノ四一七

「馬子と鬼婆」

鬼婆を撲殺してみたら狸であつた。カチ〳〵島の話も伴ふ。

廣島縣　　藝備「昔話の研究」八二

「鯖才次郎」

山姥を自分の家に誘ひ、釜に入れて撲殺す。天井から餅をさす。類話　一〇七　にあり。

鳥取市　　因伯民談　一ノ五ノ二五八

「やまんばと馬子」

鳥取縣　八頭郡　　因伯昔話　七五

山口縣　周防大島　　口承文學　一一ノ一八

香川縣　　小豆島民俗誌

德島縣　　阿波祖谷山昔話集　四五

「與二郎とお婆」

筑前　　國民童話　三一八

「山姥と馬吉」

日本童話集のもおなじ。

大分縣　　豐後民話集　二四

「馬子と山男」

馬子が干鯖をとられ逃げ歸り、女房と相談して柔團子をつくり、栗・蟹・針・牛・蜂・石臼などの助勢を得て仇討をする。

熊本縣　球磨郡上村　　藤俗問答集

「鹽の千兵衛どん」

猿に鹽をなめられ、蟹・臼などで仇討に行く。

熊本縣　玉名郡　　第二昔話號　三四

「イッチョメ」

山姥は一ツ目なりと。

長崎縣　杵島郡　　口承文學　一一ノ一二

「馬方と山姥」

中間と結末はなく、馬子は食殘しの馬の頭を引きずつて歸る。

長崎縣　　島原半島昔話集　六二

「馬方山姥」

やゝこわれてゐる。

長崎縣　　(舊)壹岐島昔話集　三六

「鬼の話」　結末は不完全なり。

〃　　同書(全國記錄)　七七

「山姥を煮殺す」

鹿兒島縣　　甑島昔話集　一四〇

〃　喜界島　　旅傳　三ノ六四五

「鬼の話」

男の家に鬼がやつて來る。豚を食ひ、馬を食ひ、その次に男を食ふといふ。男は池の端の木に登り、天より下る金の綱によつて天に登り、鬼は落ちて死ぬ。

沖繩縣　德之島　　旅傳　一ノ八

「鬼の話」

○參考

×嬉遊笑覽　九　「小はだの小平次」もとはこの話。

×常陸久慈郡王瀨村、明神阪の傳說といへども、鬼婆といふから昔話に近い。

馬に鰹節をつけて通る三助、山姥にあひ逃げて家に行き、餅を食ひ、後に石をやいて殘しておく、又鬼が長持の中に寢たのを殺す。

厄難克服

食はず女房

昔獨身の男が山に木を伐りに行き仲間の者と物を食はぬ女房が欲しいと話し合つた。すると四五日たつて俺は物を食はないから女房にして呉れと云つて男の家へ尋ねて來た女がある。女房にするとなるほど少しも物を食はないが、女が來てから米も味噌も無くなるので男は不思議に思つて、或日町へ行くふりをして家を出ると、女は厠へ行つたのでそのひまに厩の梁へ登つて隱れてゐると、女房は米を出して一斗炊きの鍋に入れて炊き、次に味噌汁を炊いた。そして掘假を拵へて蹇の上にずらりと並べ、味噌汁は提に入れてさまし、髮を解くと頭の頂上に大きな口があいてゐた。そこへ掘假を投込み、お汁を注ぎ込みしてあとは元通りに髮を結つてそこらを片づけてゐる間に、男はそつと梁から下りて、今歸つた樣な顏をして家に這入つた。

次の朝女房に暇を出すと云ふと、それでは何か呉れといふのでそこにある桶を持つて行けと云つたら、女は桶の中に虫が居るから取つて呉れとだまして男をその桶の中に突入れ、それをちよつと擔いでどん〳〵と山奥の方へ走つて行つた。「よい肴を持つて來たからみんな來い」と云ふと、山の木の中であちこちから返事

をするので男は生きた心持も無かつた。さうしてゐる中に桶の側に木の枝が當つたのでそれにつかまつて桶を拔け出ると一生懸命山を走り下つて逃げた。

女は皆の居る所に行つて桶をおろして見ると男が居ないので、さては逃げられたと思つてどん〳〵追かけて來た。男は追つかれさうになつたので傍の蓬と菖蒲の生えて居る中に隱れると、山婆は追付いてその蓬と菖蒲の中を見て、この中に手を入れると手が臑るからくやしいけれども仕方がない。と云つて山へ引返して行つた。男は危い所を助かつて、その蓬と菖蒲を頭にかぶつたり腰にさしたりして家に歸ると屋根だの戸口だのにさして置いたら山婆はとう〳〵來なかつた。

——岩手縣紫波郡——

青森縣　喜良　津輕昔ヨ集　六七

「千人の頭に立てられた話」

蛇が化けて女房となる。一子あり、一枚のうろこを子の爲に殘して行く。

蛇女房の型。

岩手縣　岩手郡雫石　第一昔話號　三四

「食はず女房」

節供禮に餅をつくり女房の里に行く。女房は鬼、逃れ歸つて菖蒲と蓬の中で難をまぬかれる。

岩手縣　九戸郡誌　四六四

〃　紫波郡昔話集　九四

「物食はぬ女房」

これが最も普通の形。〔例出〕

〃　贈澤郡昔話集

「鬼婆」

秋田縣　仙北郡　角館民俗資料　一九三

「桶屋と山姥」

〃　昔研　一ノ五〇七

「飯食はぬ女房」

火箸で纏殺したら赤鬼だつた。

〃　聽耳草紙　三八三

「糞が綾錦」

瓜子姫の話のつゞきに、山母が飯を炊かせて頭の口から投げ込む條がある。

秋田縣　平鹿郡　昔研　二ノ三六四

「五月の鬼」

二草の由來譚はあるが桶の條は無い。

山形縣　東田川郡　昔研　二ノ三一八

「喰はず女房」

主人公は米屋。早桶を拵へて女を入れて棄てる。棄てゝも戻る。菖蒲と蓬との由來譚に付く。

山形縣　昔研　二ノ九二

「喰はず女房」

女房は鬼。五月五日の菖蒲につゞくは型の如し。

宮城縣　登米郡誌　下ノ八六三

福島縣　石城郡　磐城昔話集　五七・一四九

新潟縣　南蒲原郡昔話集　一四一

「飯食はぬ女房」

石川縣　能美郡　昔研　二ノ三七三

「もの食はぬ嫁」

五合ほどの米を一斗鍋に一杯にする云々の點は、まだ天人女房の形を存す。

石川縣　江沼郡昔話集　六八

「ものを食はぬ嫁」

福井縣　坂井郡　昔研　一ノ三〇

二話がある。一つは蜘蛛、一つは山姥。

長野縣　小縣郡民譚集　二〇一

二話あり。二階に隱れる等とあるは牛方山姥に似てゐる。

厄難克服

長野縣　下伊那郡　昔ばなし　九〇・一三五

その一「蛇の嫁樣の話」

飯の話、喰はずといふ事は無し。家の中に水がいつぱいになつて蛇が泳いでをつたといふ。

その二「菖蒲と蓬」

長野縣　南安曇郡年中行事篇　一五三

菖蒲、蓬の由來話が幾つかある。昔話の形としてでなく傳說として語られて居るか。

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　六六

「休んだら輕いなあ」

頭の口の事は無く、ただ二草の由來を云ふ。

栃木縣　芳賀郡　茂木昔話集　四七

「口をきかない嫁」

五月節供の二草の由來の外に、四月八日に紅藥と蘭とをさす由來を語る。

靜岡縣　駿東郡　靜岡縣傳說昔話集　四五六

「蜘蛛嫁」

靜岡縣　富士郡　同書　四五七

「夜の蜘蛛」

愛知縣　北設樂郡　昔研　一ノ五六

「夜の蜘蛛」　ひだびと　五ノ五
女房でなく、作男として雇はれた男。
岐阜縣　吉城郡上寶村　口承文學　一〇ノ二〇
四話あり。第四の話は蛙女房。蛙に石を投げつけると坊主の頭に當るといふ條がある。
和歌山縣　伊都郡　御津郡昔話集　一〇七
大體型通りだが、隣の爺が秘密を發くといふ條あり。
〃　有田郡　有田郡童話集　二四ウ
奈良縣　なら　十八號
兵庫縣　城崎郡三椒村三原　昔研　二ノ四一九
「食はぬ嫁」
菖蒲・蓬の二草を語る代りに、櫃の枝に掛まつてカゴヨシキより拔け出し、譫葉の中にかくれたとあり、正月六日の儀式と結びつけてゐる。
儀式の說明に昔話を結びつけてゐるか。
兵庫縣　川邊郡　北斗
昔話採集手帖　六六
島根縣　隱岐昔話集　一二
「山姥」
口無しと反對に、大食なので歸すといふ。棄てられて蜘蛛となつて來て、撲殺すと山姥になつた、と。
岡山縣　上道郡　岡山文化資料　三ノ一
頭の口のことを言はず。留守中に多くの蜘蛛が集つて麥飯を炊いて食ふ。
同縣　後月郡　昔研　一ノ三六三
「夜蜘蛛は殺す話」
〃　「蜘蛛はけようてエ」
これには眞中の私かに握飯を食ふ條無し。山に男をつれて行つてクモになり糸で卷いてしまふ話。
廣島縣　安藝國昔話集　一二五
朋輩の入智慧で女房の秘密を知ス。女房怒つて先づ朋輩を食ひ、夫をさらつて山へ逃げる。
廣島縣　安佐郡　同書　一二八
蛇女房で後蜘蛛となつて來る。
〃　高田郡　同書　一三〇
蛇女房。寺に行つて離緣を頼む。
斷片である。
山口縣　周防大島　口承文學　一一ノ一五
「しようことなしのゆづの木」といふ話の起り。夜の蜘蛛の結末となるが菖蒲の條はない。
徳島縣　鄕土研究　二ノ三七八
阿波祖谷山昔話集　六七
香川縣　小豆島民俗誌
女の頭に釜のやうな大きな穴があるので、それを見た男は目をまはして死ぬ。
愛媛縣　三轡郡志々島　昔研　二ノ五六六
福岡縣　早良郡　筑前傳說集　三三
齒染とゆづり葉を正月行事に用ゐる理由。
熊本縣　球磨郡　昔研　一ノ三七四
〃　玉名郡　第二昔話號　三五
「玉蜀黍の根の赤いわけ」
後段「天道さん金の綱」と結合してゐる。
熊本縣　天草島民俗誌　五七
「山の神まつり」の條に一話あり。
長崎縣　壹岐　第一昔話號　八三
「五月節供の菖と蓬」
女房は蛇と明らかに云ふ。
長崎縣　北高來郡諫早　口承文學　八ノ二
長崎縣　島原民話集　八四以下
後の二話は缺せてゐる。
鹿兒島縣　甑島昔話集　一四一
「蜘蛛女房」
鹿兒島縣　喜界島　島　一ノ四七九
「猫の妻」
夜中に外に出て鼠を取つて食ふ。ツキ草、ミハ草の二種の汁を耳につぎ込んで退治する。
鹿兒島縣　島　一ノ四二四
「鬼ゝ菖蒲」
鬼が家中の人を食ひに來たのでみんなで菖蒲山に逃げた。それは五月五日。
鹿兒島縣　奄美大島　昔研　二ノ三一四
沖繩縣　南島說話　八八
「鬼に追はれて菖蒲へかくれた話」

口無し女房（又食はず女房とも）

主人公は或寺の惣深和尙、飯を食はない嫁をほしいと云つて漸くロの無い女を見付けた。しかし毎朝御飯を澤山炊くのを不思議に思つて庭の桶の中で見て居ると、髮を解いて中ずりの所にある

大きな口から食つてゐる。和尚は驚いて聲を立てると、桶をかついでどん〳〵走り出した。桶を路ばたに置いたら轉んで和尚は大きな蒲鉾がいつぱい生えた中に落ち、その爲に女の方は這入れなかつた。それで五月五日には軒に菖蒲をさし、湯にも入れて浴みするのである。

——宮城縣登米郡——

「口無し」といふ例あり。

青森縣　八戸　昔研　二ノ四三〇

二例あり。

共に菖蒲で助けられる。何故か第二の話は主人公が卵賣りとなつてゐる。

宮城縣　登米郡〔例出〕　郷土の傳承　三

〃　伊具郡誌

傳說化してゐる。

妹は鬼

夫婦二人に兄と妹がある。妹は毎夜兄の寢てしまふのを見とゞけて出て行く。不思議に思つて兄がついて行くと村はづれまで行つて鬼の姿になつて馬を奪つて食うた。毎夜さういふ事が續くので兩親に語すと、兩親は信用しないのみか却つて兄を追出した。兄は物貰ひになつて歩いたが緣あつて或家の養子となつて五年の月日がすぎた。五年目に鄕里へ歸つて見たくなり、暇を貰つて妻には鏡を渡し「この鏡が曇つた時は自分の命が有るか無いかの時だから、其時は庭の雌鷄雄鷄を放して與れ」と云つて出かけた。

自分の村に近づいて山の上から見ると家が一つも無くなつて妹が一人怖ろしい姿をして仰向けに寢てゐた。兄は咳拂ひしたら妹は元の姿になり、兄を見つけて何年も會はない中に兩親は悪い流行病で死んだと語り「この太鼓を心慰みに叩いてゐて下さい」と云つて米磨ぎに行つた。するとその後へ父母の化身の鼠が出て來て代つて太鼓を叩いて兄を遁がした。妹は太鼓の音が違つたので來て見ると鼠が叩いてゐる。怒つて鼠を追うたりしてゐる間に、兄は遁げのびたが、妹は又その後を追ひ、兄は今にも摑まりさうになつた。一方、家の妻は鏡を見て夫の大事を知り、雄雌の鷄を放してやる。兄は松の木に登り鬼がその根を掘つて、木は危く倒れようとする所へ二匹の鷄がとんで來て鬼の眼を啄つぶした。しかし鷄は鬼の息がかゝつて死んでしまつた。兄は鬼を退治し、鷄の塚をたてゝ妻とその父母に迎へられ無事に家へ戻つた。

——鹿兒島縣甑島——

岐阜縣　續飛騨採訪日誌　一四一

福岡縣　福岡縣昔話集　一四九

長崎縣　北高來郡　方言誌　二二ノ三五

同縣　壹岐島昔話集　六九

「蛇になつた妹」

「蛇聚の話」　同書　七二

熊兒島縣　奄美大島　昔研　二ノ一六八

「鬼の姉」

虎の報恩を件ふ。

〃　喜界島　昔研　一ノ三二七

「鬼の母」

鹿兒島縣　甑島昔話集　一二六

「鬼の妹」〔例出〕

〃　沖永良部島　おきえらぶ昔話集　三二〇

「鬼の姉」

○參考

朝鮮民譚集　一一〇　「狐妹と三兄弟」

千疋狼

甲州の或商人が駿河へ旅をして歸り途、甲斐と駿河との境、裾野の廣い原の中で日が暮れてしまつた。その邊りは一軒も人家がない。恰度秋の末であつたのでそこゝに積んであつた枯草の堆の中に一夜を明かすことゝした。夜中になると澤山の山犬共が人間の臭ひを嗅ぎつけて堆の周りに集り嗅いだり唸つたりするので慌てゝ逃げ出し、近くの木に登つた。山犬共は追かけて來たが登ることが出來ない。さうかうしてゐる中に、山犬共は相談して孫太郎婆を呼んで來いと云ひ、二三匹どこへかとんで行き、あとのは殘つて商人の番をして居た。商人が孫太郎婆とは何の事かと考へてゐると、連れて來たのは年取つた虎猫であつた。山犬どもは待ち兼ねた樣に、どうしたらよからうと相談をかけると、暫く考へて居た古猫は、犬梯子をかけたらよからうと云ふ。先づ一匹がしやがみ、その上へ〳〵と山犬が登つて商人のすぐ足許まで屆く樣になつた。商人も困つてもつと上の方へ登らうとしたが登れさうにもなく、犬梯子はどん〳〵高くなつて來る。困りはてゝ腰の脇差を拔くと何か分らぬ頭の上の巢を力一ぱい突いて見た。すると それは熊の巢で、眠つて居た熊はびつくりした拍子に地べたに轉がり落ちて大あわてにあわてゝ逃げ出した。それを見た山犬共はそれ落ちたぞとばかりあわてゝ犬梯子を崩して後を追かけたが、それが熊だと判ると、がつかりして、それではまだ人間は木の上に居る筈と木の下に戻つて來た。がその頃はもう夜が明けはじめ

厄難寬服

たので孫太郎婆をはじめ山犬共はもう夜明けだから仕方が無いと云つて皆どこかへ行つてしまつた。

商人は漸く恐る〳〵木より下りて逃げ歸つた。

——山梨縣西八代郡——

新潟縣　南蒲原郡　南蒲原郡昔話集　一三五

「彌三郎婆さん」

福井縣　阪井郡　昔研　一ノ三〇

「ベベンの婆」

二話あり。但し犬梯子の條は無し。

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　二九六

「孫太郎婆」〔例出〕

〃　續甲斐昔話集　七一

「太郎婆」

是は狸で、狼ではない。狸が肩梯子をする。

長野縣　下伊那郡　昔ばなし　一四

「婆さんに化けた山猫の話」

發端牛方山姥に似てゐる。

兵庫縣　城崎郡　昔研　二ノ四一九

「狼の恩返し」

狼報恩の條參照

鳥取縣　日野郡　因伯童話　九五

「山伏」

五郎太婆といふ狼を呼んで來い、といふ。結末は他と異り村人が油斷せぬ樣になつたといふ。

鳥取縣　八頭郡若櫻町　因伯民談　一ノ一八七

「五郎太婆」

〃　氣高郡豐見村　因伯民談　一ノ一八八

「かねの尾のがあだい婆」

題名の樣な名の狼。

島根縣　松江市　高木敏雄氏傳說集　一四九

「小池婆」

同縣　隱岐昔話集　二一

「山猫と商人」

庄屋婆といふのは大きな白猫。袖無しを着て白手拭を被つてゐたといふ。

この島、狼は無いか。

山口縣　周防大島　口承文學　一一ノ二五

「狼に食はれる話」

これには鎌を投げたら逆になつたといふ話がある。

德島縣　阿波祖谷山昔話集　二二

香川縣　三里郡志々島　昔研　二ノ五七二

「のねのかじの婆」

○參考

×山梨縣北都留郡上野原村字西原にも犬梯といふ名木がある。

×越後では「オホインッナギ」ともいふ。山村の長怖ではあるが實は見た者が無い。

×朝鮮民譚集　一九六　巫女虎。前半はこの話。

猫と茶釜の蓋

或所に狩人があつた。山立に行く朝鐵砲の彈丸を數へてゐるのを、飼猫の三毛猫が炉傍に眠つたふりをして見て居た。狩人は何の氣なしにそのまゝ山に入つた。

山へ行くと見た事も聞いた事も無い恐しい怪物に出會した。それは一つ目の化物であつた。狩人がいくら撃つても〳〵平氣であつた。そのうち持つて來ただけの彈丸が盡きてしまふと、その怪物は忽ち大猫になつて、狩人に飛かかつて來た。狩人は秘法の秘丸（ひくしまる）で難無く撃ちとめ、それをしらべて見ると、傍に一つの鍋の釜の蓋が落ちて居た。猫はそれを口にくわへて彈丸を防いだものと判つた。

然しその猫はどうも家の飼猫らしいので蓋を持歸つて見ると、案の定家の釜の蓋は無くなり、猫も居なくなつてゐた。

——岩手縣上閉伊郡——

岩手縣　上閉伊郡　聽耳草紙　三四四

「怪猫の話」その二

〔例出〕

福島縣　石城郡　磐城昔話集　一七三

石川縣　鹿島郡誌　九四九

どうの川の「チッキン被り」といふ怪物。詳しい話は出て居らぬ。

同縣　能美郡　昔研　二ノ二七四

「谷峠の猫又」

福井市　昔研　二ノ一四〇

「化け猫退治」

夜木の上に居て人を食ふ猫。侍が矢を猫が見たより多く用意して退治する。何で防いだかは明らかで無い。

これは破片。

長野縣　下伊那郡　昔ばなし　四九

「婆さんに化けた山猫の話」

喜界島の昔話に近い。

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　二九九
「猫と狩人」
愛知縣　南設樂郡　　猪・鹿・狸　四二
「昔の狩人」の項に一話あり。猫が茶釜の蓋の上でまるめてゐる彈丸をかぞへ、その蓋を持つて山に入る。
福岡縣　築上郡　　豐前民話集
「鐘を殺つた狸」
豐後　　山岳　一九ノ三
「やかん太郎」
九重山黒岳、老猿が釣鐘をかぶつて居た話。
大分縣　北海部郡　　昔研　一ノ一七九
「しようべえ婆」
狩人が潮ネラヒに出て猫の角力を見る。庄兵ヱ婆を討つ。血をつたはつて村に來り、婆の家に見舞に行き、夜具の上から鐵砲で討つて退治する。
鹿兒島縣　喜界島　　島　二ノ二六
「黒鎮の彈」
伊那昔ばなし所載のものと近い。
「猪討と飼猫」
獵師を迎へに妻が山奥まで來たので不審に思つて彈を放つと逃げた。血を傳つて來るとそれは家の飼猫で、臺所の火の神の所で死んで居た。彈を數ふることは云はぬ。

猫　山（猫　又）

或人が尾去澤から山越して、毛馬内に行かうと思つて新田に出たが、迷つて山の中に來てしまつた。向ふに明るい大きな家が見えたので、泊めて貰ひに行つた。臺所に大勢の女や子供が居て、泊めて下さいと頼むと常居に通され、やがて後の襖が開いて年寄つた婆様が出て來た。そして挨拶して云ふには「私は貴方の祖父様に永年育てられた三毛猫ですが、此處は猫又と云つて村の餘り猫の集る所で、いまみんな貴方の夜具をとりに行つたが、此處に居ると食はれるから早く逃げて下さい。この床の間の隅に穴があつて、それをくぐると縁に出る。門を出ると川があるが、その川を渡りさへすればもう猫は行けないから安心です。早くして下さい」と云つた。男はなるほど祖父の時代に、年寄つた三毛猫が居なくなつた事があつたが此猫だつたかと思つた。云はれた通りに屋敷の外に出て川を渡りかけたら、猫どもが後から大勢でがやがやと追かけて來たので、夢中で川を渡つて向岸に着いた。夜が明けてあたりを見ると、思ひがけない山の中だつた。やつと道をみつけて家にかへる事が出來た。

――秋田縣鹿角郡――
秋田縣　鹿角郡　　第二昔話號　二一
「猫又」（例出）
新潟縣　南蒲原郡　　加無波良夜譚　一七〇
「猫又屋敷」
石川縣　能美郡白峯村　　昔研　二ノ二七三
「仙太郎」
仙太郎といふ男、昔の飼猫の奥れたふくべに身をかくし猫又の難を逃れる。
山口縣　周防大島　　第二昔話號　一九
「猫山」
猫山に去つた猫の報恩話。愛された女中には恩返しをし、いぢめられた奥さんは食ひ殺す。
舌切雀と近く、隣の慾型を伴ふ。これが元の話か。
阿蘇
この猫岳の話は冒險譚。寶物を貰つて歸る段も、亦第二の試みも無し。

猫岳・猫島

ある家に一匹の猫が居て下女はその猫を可愛がつて居たが、奥さんはいぢめた。ある時その猫が急に居なくなつたので下女は悲しがつてゐると、六部が來て「九洲のいなばの山の猫山に居るからあひに行け」と云ふ。下女が尋ねて行くと、山の中で暮れてしまつたので、立派な家に案内を乞うて泊めて貰ふことにした。
そこは猫の家で、夜になつたら可愛がつた猫が出て來た。女の婆をして顔だけは猫だつた。そして紙包を渡して、こゝは猫の來る所だから早く歸るがよいと云つた。翌朝教へられた通り、そのあたり一ぱいの猫の中を、貰つた紙包を振り乍ら無事に通りすぎて家に歸つて來た。紙の中には犬の繪がかいてあつて、本物の十兩の小判をくわえてゐた。奥さんは羨しがつて尋ねて行つたが猫を愛してゐなかつたので、食ひ殺されてしまつた。

――山口縣周防大島――
秋田縣　鹿角郡宮川村　　第二昔話號　二一
「猫又」
石川縣　能美郡白峯村　　昔研　二ノ二七二
「仙太郎」

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　一七〇
「猫の恩返し」
山口縣　周防大島　第二昔話號　一九
「猫山の話」〔例出〕
福岡縣　高木敏雄氏傳說集　二三二
筑前鞍手郡根子岳の傳說。
鹿兒島縣　喜界島昔話集　八二
「猫の恩返し」

寶化物

昔ある島に一軒の家が建てゝあつて、鍋釜の用意もあり旅の人は誰でも寢泊り出來るやうになつて居たが、どうしてか誰も二日つゞけてこの家に泊つて行ける者が無かつた。或時旅人がこの島に來て其の家に泊つて見た處が、夜中に立派な女が出て來て何か二言葉三言葉言つたと思ふと見えなくなつた。不思議に思つてゐると次の夜は大きな蛇が出て來た。又次の夜は男が出て來て、何か言つて消えてしまつた。四日目には初めて女があらはれて「何處のどういふ者か」と訊いた。答へると、「此家は何處の國の客人が泊つても二日と續かないが、貴方の樣な人は無い。それで貴方に頼みがある。自分は永くこの家の下に埋められてゐる金で、早く世の中に出て人を喜ばせたいと思ふのだが、自分の力だけでは出ることが出來ないので今迄苦しんで來た。どうか早く私をほり出して下さい」と頼むのである。男はあくる日早速村人を頼んでその家の下を掘つて見たら、金が澤山出て來た。男はそれを半分村人にやり、半分は自分が貰つて歸つた。何百年ふ埋もれて居た金は化けて物を言ふとの事である。

——鹿兒島縣喜界島——津輕昔コ集　六

宮森縣
「化物と踊つた話」
瘤取りと似てゐる。
岩手縣　紫波郡昔話集　四五
「伊勢詣り子」
伊勢詣りのみちで泊つた空家で踊る化物。それは黃金と錢であつた。
怖れぬ勇士に秘密の幸福。
福島縣　磐城昔話集　一五四
新潟縣　佐渡島昔話集　一三〇
「寶化物」
〃　同書　一三一
「金の靈」
出雲の町の奧坊といふ修業者を尋ねて嫁ぎ來た娘、夫婦で化物屋敷を借りて金の魂にあふ話。
炭燒長者の話とつゞくものがある。
山梨縣　西八代郡　續甲斐昔話集　一六四
「茶の木の下の茶ツ壺」　以下三話がある。
岡山縣　御津郡昔話集　八四
「錢の化物の話」
島根縣　邑智郡　昔研　二ノ四一五・五六三
前者は梅村長者の由來といふ物語の中の一節に、荒屋敷に泊り化物にあふ。終に長者の娘の幽靈が出て法事を頼む。
全體の語り方が何か職業的な話し方である。
德島縣　三好郡　昔研　二ノ四二五
「三井のおとり」といふ話。中間に脫落あり。
大分縣　北海部郡　昔研　一ノ一八三
「化物話二つ」の中その二
鹿兒島縣　喜界島昔話集　一三六
〔例出〕
○參考
秋田郡邑魚譚　一五四　土藏や床下に埋つてゐる財寶が、人に知られようとして色々な不思議を示すことを「金の母が何々した」といふ。

山梨の恠

これも恠物の本性を見あらはすといふ話の變化。
岩手縣　紫波郡昔話　六六
「山梨の化物」
寺の小僧に糞を食へ、といふきたない化物の大入道、後をつけて見ると山梨の大樹で、年々八知れず熟れて落ちた實が小山のやうになつて居たといふ話。
秋田縣　仙北郡　昔研　一ノ四六四
「林檎の恠」

人食ひ菌

人を食ふ菌があるので、空家となり荒れはてた家に泊り、その正體を見とゞけて退治する。
岩手縣　上閉伊郡　老媼夜譚　二七
ごろつきの旅人、大家の空家に泊る。菌自ら身の上話をする。火氣と嚏氣が嫌ひと。
新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　二〇四

「鹿の化物」
「おれは人間の化物だ」といふユーモアがある。何が一番嫌ひだの問答。
長崎縣　（舊）壹岐島昔話集　五五

「人食ひなば」
退治するのは三人兄弟の末弟で、味噌汁をもつて行つてかけるといふ。

山寺の怪

寶化物の樣な話だが、黄金發見を伴はぬ。
昔或村に旅僧が來て宿を乞うた。すると此村では一人旅は泊めてはならない事だから、氣の毒だがあの山際の明寺（あかでら）に行つて泊つて呉れと云はれた。行くと村人が五六人火を焚いて居たが、飯も酒もあるからと其人達は歸つてしまつた。夜更け本堂の方で物音がするので、そこにある鍋を被つてだまつて居たら、目が三つ齒の二枚ある大入道が厩裡から出て來て鍋を被つた旅僧の頭をパチンと彈いて露い頭だなと謂つた。すると旅僧は今度は俺の番だと云つて、木剽でその入道の頭をゴチヤリと打割り外へ投出して置いた。さういふ化物が三度出て來たが皆退治して外へ投げて置く

と豐朝村の人達は、ゆうべの旅僧はきつと化物に食はれたらうと揃つて寺へ來てみると、旅僧は無事に火に當つてゐた。昨夜は何事もなかつたかと聞くので話をし、化物は外に投出してあるから朝日にかざして見れば正體がわかるといふ。みると大入道が三人死んで居る。朝日にかざしてみたらそれは古下駄の化けたものであつた。村人は旅僧に向つて此寺は幾度住職が入つてもみな取つて食はれたので明寺になつて居たが、今度は貴僧が住職となつては呉れまいかと頼まれ、旅僧はそれを引受けた。
——岩手縣紫波郡——

旌護授福を伴ふ例に最も古いのであらう。
古いものは皆化けるといふ考へ。
岩手縣　紫波郡　紫波郡昔話集　一四

「化物寺」〔例出〕
秋田縣　仙北郡　昔研　一ノ五〇四

「古みのに風呂敷・古太鼓」
奥州の瘤取話と似てゐる。
新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　二〇一

「臼と杵」
寺の臼と杵が化け、怖れぬものに金の在處を敎へる。
長野縣　小縣郡民譚集　二六六

「金銀總鑑」
長野縣　小縣郡民譚集　二六九

「鯉・羅・狐」
赤・ねず色・茶色の頭巾をかぶつた化物の話。翌朝みな取つて食ふ。
山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　九七

「埋けた瓶」
長野縣　北佐久郡　北佐久口碑傳說集　二一九

「梅園坊の化物屋敷」
布施村上の山の御堂の化物。張水僧の名は「梅園坊」
長野縣　下伊那郡　昔ばなし　二八

「ソクヘイタン」
化物は東原の馬頭・西竹林のヤイショウ鷄・南海の大魚・北池のガマ。
北佐久のものと共に文字尊重の時代のものか。
岐阜縣　吉城郡上寶村　ひだびと　五ノ一八四

「寶化物」
物は箕と木魚と太鼓の古いもの。
化物とは題してゐるが寶ではない。

厄難克服

一ッ屋の怪

一ッ家に泊り其處で死人をあづけられ、怪を見る。その實は何でも無かつたといふ話が多い。
これも亦一つの型と云ふべきか。
旅人が夜更けて或知人の家に辿りついた。すると主人は「恰度いゝ所へ來て呉れた。今夕死人があつたが留守の者が無くどうしようかと思つて居た所だつた。暫くの間頼む」と云つて主人が出て行つた。迷惑とは思つたが仕方なく炉端に煙草を吸うて居ると、老女の死人がむくむくと起上る。驚いたが心をしづめてあたりを見廻すと、流し元の水口の穴から狐の樣なものが面をさし入れて頻に死人の方を見詰てゐた。さてはと、密かに家を出て背戸へ廻つてみると果して狐で、流し元の穴へ首を入れ後足をつき立てゝ居た。旅人は有合せの棒で之を打殺してしまつた。
——岩手縣下閉伊郡豐間根村——

岩手縣　下閉伊郡豐間根村　遠野物語　八八
〔例出〕
事實譚として語られて居る。眞相を後に知るは他とおなじ。
山形縣　東田川郡　昔研　一ノ四六六

「はやおげの中の小判」

主人公は茸取りのヤロ。死人を入れた早桶を預り、更にそれを背負うて來て呉れと頼まれる。以下「大歳の火」に近く、夜が明けてみると、桶の中に小判がいつぱい入つてゐた。

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　二八六

「一軒家」

鹿兒島縣　　喜界島昔話集　一三七

「亡者と鹽買ひ」

爺と婆とは櫃納めしてからも合圖をし合ふ約束で婆が先に死ぬ。約束通りやつて居たが、爺がいやになつて、折柄來合はせた鹽買ひを屬して留守番させ應答させる。亡者は「お前は誰だ」と出て來たので鹽買ひは逃げ出すと、亡者もそれを追うて何處かへ行つてしまつた。

動物の援助

聽耳

昔、心の善い一人の爺が氏神の稲荷樣に祈つて赤い寶頭巾を授けられた。それを被ると鳥でも獸でもなんでも言ふことがすぐ解るといふのである。爺は喜んでその頭巾をふところに入れて途を歩いて來たが、道ばたの大きな木の下に休んでゐる中、うと〳〵と眠くなつた。すると濱の方と國中の方から鳥がとんで來て同じ木の枝に留つた。爺は頭巾を試してみるなら今だと思つて、被つて見ると鳥の聲が聽えて來た。濱の鳥は、村の長者の家の土藏はたて〻から五六年にもなるが、屋根葺きの時に這上つて釘づけにされた蛇が半死半生になつて、雌蛇が食物を運んで來るのでやつと生きて居るのだが、その思ひが積つて長者どんの娘が永のわづらひをしてゐる。蛇さへ助けてやれば娘も癒るのだが、本當に人間といふものはこんな事も判らないで情ないものだ、と話して別れてとんで行つた。

爺さんは好い事を聽いた。早く長者どんの娘も蛇の命も助けてやらうと、八卦屋に化けて長者の家に行き、八卦を置くまねをして鳥から聽いた事を話して蛇をすくひ出した。すると娘も段々となほつて來たので長者は大喜びで大金を呉れ、爺はたちまち大金持になつた。氏神樣のお宮も新に建て立派なお祭もした。

爺さんはまた旅に出て先の大木の下に寢んでゐると、前の二羽の鳥が來て話をする。今度は町の長者どんが大病でそのもとは、離れ座敷をたてる時に伐り倒された桶が、ちやうど軒下に雨に打たれてゐるが、根が死に切れないので苦しんでゐる。その思ひで旦那はわづらつてゐるのだが、桶の所へは山の友達の木が見舞にやつて來て大變なものだ、と語つてゐる。爺はそれをきいて又八卦やに化けて町の長者の家に行き、其はなれ座敷に一晩泊つた。すると方々の山の木が見まひに來ては、なぐさめて歸つて行く。翌日八卦置きのまねをしてから桶の話をして、その株を掘出させてしまつた。すると長者の病氣も日ましによくなり、又お禮として大金を呉れたので爺はもう八卦屋を止めて長者として暮した。

——岩手縣上閉伊郡——

青森縣　八戸　　昔研　二ノ三三二

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚　八六

日本昔話集　一〇三

「聽耳頭巾」〔例出〕

岐阜縣　　益田郡誌

馬瀬村中切の治郎兵衛酒屋の話。

熊本縣　鹿本郡　　昔研　二ノ三七八

「くのつ」

くのつといふ鳥を龍宮から貰つて來る。是を耳にあてると鳥の言葉がわかる。

鹿兒島縣　奄美大島　　昔研　二ノ一四一

「聽耳」

男が鯛を助けて龍宮に招かれ、「聽耳」を得て鳥の言葉を解するやうになり、長者の聟になる。

金の扇・銀の扇

昔、貧乏な男があつて、金持になるやうに神樣に願がけをした。願明けの日白髮の老人があらはれて、金銀の扇を一本づつ男に授け、金の扇は望みの者の鼻を高く、銀のは低くすることが出來る。これを上手に使つて金持になれと云ひ聞かせられた。男は長者の娘のお花見の時に、それを使ひ娘の鼻を三尺も高くした。醫者に見せても癒らないので長者夫婦は大變に困つて、癒してくれるものは聟とするといふ。男は按摩に化けて長者の家に呼び込まれ、銀の扇であほいで低くし聟となつた。ある日自分の鼻をあほぎ乍ら居睡りをすると、鼻は伸びて天まで屆いてしまつた。すると空の雷の家の爐の中に出たものだから、雷達は氣味惡がつて火箸をつきさした。男は鼻が熱いので驚いて銀の扇で煽いだ所が鼻はちゞまるが、火箸で天に止められてゐるので、身體の方が昇つて宙にぶら下つてゐる。雷が火箸を拔いてくれるまではさうして居るだらうといふ。

——山梨縣西八代郡——

福島縣　石城郡　磐城昔話集　四一・一三〇
埼玉縣　川越地方昔話集　一一四
「源五郎の天昇り」
山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　三〇
「權右衛門の鼻」〔例出〕
德島縣　阿波祖谷山昔話集　一一五
鹿兒島縣　薩島昔話集　一八一

尻鳴箆

或所に男があつた。あんまり法螺ばかり吹くため、誰も相手にしなくなつたので改心して神樣に願がけをした。滿願の日御堂の前の坂を下りて來ると、鳥居の下に赤い小箆が一つ落ちてゐた。拾つて又ぶら〳〵歩いて行くうち、偶然の事からその箆の片面は朱塗りで、其方で尻を撫でると大きな音で鳴り出し、もう片面の黑塗りの方で撫でれば、それが止むと云ふ事を發見して、長者の娘の尻をたでた。すると娘の尻は鳴り出して止まらない。長者は型通り醫者よ法者よと騒いだが一向癒りさうにも無いので、高札を出して、娘の病氣をなおした者は何でも望み次第といふ文句を書きつけた。法螺吹きは大勢の醫者や法者の中にまじつて、長者の家に行つた。そして娘の尻を例の箆で撫でてなほしてやり、遂にその長者の聟となつてえらい出世をした。何もかも小箆のおかげだといふので後にそれを神樣に祀つて御箆大明神とあがめた。

――岩手縣上閉伊郡――
青森縣　八戸　昔研　二ノ三三三
二話あり。
岩手縣　膽澤郡　黃金の馬及び採集手帖の　四三
同縣　上閉伊郡昔話集　五一
「御箆大明神」〔例出〕
秋田縣　平鹿郡淺舞町　昔研　二ノ二二〇
「不思議な箆」
宮城縣　桃生郡北村　鄕土の傳承　一ノ一八一
竹伐・屁ひり爺との連絡。

文福茶釜

或村に屠屋の爺があつた。貧乏して居るので、仲よしの狸の所へ行つて茶釜に化けてもらつた。そしてその茶釜を持つて和尚さんの所へ行き三兩で賣りつけた。和尚さんは小僧に云ひつけて茶釜を磨かせた。小僧が茶釜に砂をつけて磨くと、その茶釜が「小僧小僧痛いでそーつと磨け」といふ。小僧は驚いて和尚さんに話すと、和尚さんが今度は自分で磨いた。するとやつぱりおんなじ事を云ふ。小僧が水を入れて火にかけると茶釜は「小僧々々熱いでそろ〳〵焚け」と云つた。火が段々熱くなると茶釜から狸の頭が出、尻尾が出て遂に大きな狸になつて山の方へ逃げて行つた。和尚はそれでとう〳〵三兩の損をした。

――長野縣下伊那――
青森縣　八戸　昔研　二ノ三三四
岩手縣　江刺郡昔話　九五
秋田縣　平鹿郡淺舞町　旅傳　一三ノ一ノ四一
狐にだまされた話。釣鐘に化けお寺に賣られ、小僧につかれて昔をあげる。
福島縣　磐城昔話集　一六九
新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　九四
狐遊女の話を載す。同書　一六九には猫の話あり。
長野縣　下伊那郡　昔ばなし
〔例出〕
愛知縣　設樂　十五號
ポンポコ茶釜といふ。　この地方古茶釜の話多し。
德島縣　阿波祖谷山昔話集　二〇・九八
動物の援助

前者は四人の魔術師の話のあとに續く。

狐遊女

文福茶釜話と同種と見てよい。狐を馬に賣り、遊女に賣る。みな同系統か。馬が最も古く、茶釜は之に次ぎ、女は最も新しい變化か。動機も三つあり。報恩と單なる好意と、退治されようとした折の謝罪と。

青森縣　八戸　昔研　二ノ三三四
謝罪のしるしとして遊女に賣られる。證文は文字も判も狐の足跡であつた。
岩手縣　上閉伊郡昔話集　九八
「狐の報恩」
釜・遊女・馬と三樣になり報恩する。
新潟縣　佐渡　昔研　一ノ一八六
「狐の恩返し」

動物報恩

多く世間話の形を以て行はれ、又傳說ともなつてゐる。
長野縣　下伊那郡　昔ばなし　一三八

狼の喉にかゝつた太い鳥の骨を取つてやり、そのお禮として一羽の雉を貰つた話。

兵庫縣　城崎郡濟瀧村　　昔研　二ノ四一九

「狼の恩返し」狼が喉の骨を取つて貰つた飛脚を、穴の中に引込んで千匹狼の難より救つた話。

廣島縣　高田郡　　安藝國昔話集　一三八

「黒い犬の報恩」

犬の仔を助けると、その父親が禮をのべて犬の家に迎へられ、三人ある娘の中の一人の聟となるといふ話。

話は大分こわれてゐる。

長崎縣　　五島民俗圖誌　二四〇

大晦日に、貧しい爺が蜷取りに行き狼を救ふ。その恩返しに山の酒の泉、教へられ金持となる。下の爺は泉に蘿の蛇を沈めて一人占めにしようとすると、それが本當の蛇になつて爺を呑む。

犬と猫と指輪（寶物恢復）

昔ある所に川を挾んで東西に家があり、共に爺さん婆さんが住んで居た。東の正直な爺さんはある時龍宮樣から「猿公の一文錢」といふのを授かつた。それから日增に身上がよくなつたので西の慾ばり爺は羨ましがつて貸りてそのまゝ返さない。西の爺さんの家はよくなるが、東の家は貧乏になるばかりであつた。そこで東の家では飼猫に云ひつけて、取つて來て呉れといふ。猫は犬に負はれて川を渡り、西の家に行くと鼠が居るので捕へて、助けてやる代りに猿の一文錢をとつて來よと命じる。鼠は間もなくもつて來たので、猫がくわえて川を渡る時、誤つて水中へ落してしまつた。鳶・鵜・鮎等を通じてその援助により寶物を持歸る。

——島根縣邑智郡日貫村——　　昔研　二ノ四二八

青森縣　三戸郡八戸

「犬と猫と指輪」

犬と猫の仲の惡くなつた說明のみ。

岩手縣　稗貫郡　　昔研　一ノ四五五

「こげら玉」

山形縣　東田川郡　　昔研　一ノ四六五

「白いんこ」　隣の爺話。コメクラ話と複合してゐるので無理がある。

秋田縣　仙北郡　　昔研　一ノ二七八

「延命小槌の取戻し」

犬は居らず、龍吉譚と似てゐる。

新潟縣　南蒲原郡　　昔研　一ノ二一

「犬と猫と鼠」

二話あり。その一は蛇の助命と龍宮の指輪。盜まれたのを三つの動物の援助で取戻す。

その二は笠地藏の話。地藏樣より財布を貰ふといふ話。犬と猫の仲の惡い理由を語る。

長野縣　下伊那郡　　昔ばなし　一〇三

「石の正兵衛」　發端は蛇息子。

大阪府　泉北郡　　第二昔話號　一〇

犬と猫は昔は仲が好かつた。といふばかりで他はすべて缺けてゐる。

島根縣　邑智郡　　昔研　二ノ四六一

「東岸の爺と西岸の爺」〔例出〕

この話はよく調うてゐる。

鳥取縣　　國民童話　二二〇

「猿の返禮」

犬は關與してゐない。これは珍らしい例である。

因伯童話　七〇のものも之と似てゐる。

長崎縣　南高來郡　　島原民話集　一五六

「犬と猫と指輪」

主人公は三年寢坊太郎。龍宮に行き指輪を得たが、愚かな女房が紛失し、犬と猫と河童の援助あり。

鹿兒島縣　　甑島昔話集　一三三

○參考

×朝鮮　日本昔話集　下ノ九六

「酒のわき出る石」

寶物は酒のわく石。

×朝鮮　朝鮮民譚集　二四〇

「犬と猫と珠」

海邊に住む老夫、鯉を助けて龍宮に招かれ珠を貰ふ。惡婆にすりかへられたのを犬・猫・鼠の助力を得て取戻す。

×朝鮮民譚集　附錄四二　ルブリヤ族の例あり。

×アイヌにもこの話ありと、アイヌ民俗資料一ノ二九に引用。チェンバレン氏の「アイヌ民間傳承」

×昔話研究　一ノ一三　關敬吾氏「犬と猫と指輪比較資料」

舌切雀

爺さんと婆さんがあつて籠に雀を飼つて居た。或日お婆さんが團子を拵へて、唇根に乾してゐたら雀がみんな食べてしまつたので怒つて舌を切つた。爺さんが山から歸つてこの話をきゝ「雀々

「どこへいつた」と云ひながら行くと、竹を伐つてゐる人が居る。雀の行方を聞くと手傳ひをしたら教へてやると云はれ、その手傳ひをする。次に肥汲みなんか居て、又その手傳ひをする。そして雀の宿へ尋ねて行く。（以下一般のものと同じなれば略す）

——福井縣阪井郡——

福島縣　石城郡　磐城昔話集　一六九

新潟縣　佐渡昔話集　一五

犬の番、牛馬の番に道を尋ねる條あり。後段は雀を燒いて食うてから、鳥呑爺話になるのはこゝのみの混同か。

福井縣　阪井郡　昔研　一ノ二七

〔例出〕

大分縣　直入郡昔話集　二八

馬洗ひと牛洗ひに、舌切雀のお宿への道をたづねる。

熊本縣　鹿本郡　昔研　二ノ三八一

「雀報恩」

石川縣　能登七尾　第二昔話號　六〇

腰折れ雀

山の中に正直な婆と慾深い婆とがあつた。正直な婆は子供に腰を折られた雀をたすけてその恩返しに一粒の瓢の種をもらつた。早速庭に植ゑると、忽ち大きくなつて庭一面に伸び、大きな瓢がなつた。それを食べてみると美味なので隣近所にも分けてやり、又大きいのを軒につるして干して置いた。するといつの間にか大變重くなつたので、振つてみると中から米がいつぱい出て來た。それからは毎日米の飯を食べて仕合せに暮した。瓢の米は後から後から出て來るので段々金持になつた。

隣の慾深婆はそれを見て羨ましがり、腰折雀を探したが居ないのでわざと一羽の雀の腰骨を折つて、それを介抱して逃がしてやつた。するとその雀も瓢の種をもつて來たのですぐ蒔いて置くと瓢が七つ八つなつたが近所にもやらず、みな軒に吊して置いたら段々重くなるので樂しみにして、或日おろして見ようとした所が一人では持てさうにもない程重い。お米がいつぱい入つてゐると大喜びであけてみると、中から蝮や蜈蚣や蟇が出て來たので慾ばり婆さんは正氣を失つて死んでしまつた。

——大分縣宇佐郡——

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　三九

「雀の恩返し」

島根縣　邑智郡　昔研　二ノ五六二

「腰折雀」

大分縣　宇佐郡　第二昔話號　五八

「米のなる瓢」〔例出〕

熊本縣　鹿本郡　昔研　二ノ三八一

「雀報恩」

宇治拾遺と全く同じ話。朝鮮にもあり。日本にも案外弘く分布して居て、近世の讀書によるものとは思はれない。

ココウ次郎

昔爺と婆があつた。爺は毎日山へ薪伐りに行つて晝飯の殘りを澤の蟹に與へて居た。するとその澤から酒がわき出した。爺はいつもそれを汲んで飲つた。婆は不思議に思つてその澤に行き、爺の知らぬ間に蟹を食つてしまふ。次に爺が行つた時には澤には蟹が一つも居らないので爺が心配してゐると鳥が木の上から

甲羅はたね畑
實どころは姥の前　があ〳〵

と鳴いた。爺樣がたね畑に行つてみるとある木の根に蟹の甲らがどつさりあつた。（以下忘却）

——青森縣八戸——

青森縣　上北郡野邊地　旅傳　一二ノ七ノ一七

動物の援助

青森縣　八戸　昔研　二ノ三五八

「蟹と爺」〔例出〕

舌切雀と少し似てゐる。

秋田縣　仙北郡角館　旅傳　一一ノ七ノ三四

蟹女房譚。その蟹を婆が殺し、爺が探すと鴉が「ハサミは居根に甲羅は畑、カロン〳〵」と鳴く。

秋田縣　秋田邑魚譚　七

仙臺　聽耳草紙　二五七

「ココウ次郎」

ココウ次郎は蟹の名。

鹿兒島縣　鹿島昔話集　一八九

「蟹の甲羅」

猫檀家

或山寺にひどく年をとつた和尚が居て、飼猫でこれも年とつた虎猫と共に爐ばたで居眠りばかりして過して居た。或日猫が急に口をきいて、永い間の恩返しに、此寺をもう一度繁昌させて見ようと云ひ出した。それは近い中に長者の一人娘が亡くなるが、其葬式の時に自分が棺を宙に釣上げて下さずに居るから、その時に

和尚様が來て御經をあげて、その經文の中で南無トラヤヤと謂ふ聲をかけた時に、棺をおろす事にしようと謂ふのであつた。

その中長者どんの娘が病氣で死んだ。一人娘の事なのでその邊りの和尚をみんな集めて立派な葬ひをしたが、彼の山寺の和尚さんだけは忘れられてゐた。すると葬ひの行列が闍塔場廻りをはじめると、娘の棺は天へ釣上つて宙に懸つてしまつた。人々は驚ぎ、和尚達は一せいに秘術を盡して、御經をよんだり珠數をもんだりしたが一向利目が無い。長者どんは歎き、人々は和尚達を惡く云つた。長者どんは誰でもあの棺を降してくれた者には、一生年貢米を上げお寺も普請するし、何でも寄附すると云つたが誰も降すものは無い。誰かゞ山寺の和尚を思ひ出して迎へに行つた。和尚さんは杖をついて靜かにやつて來て、草の上に坐りお經をよみ出したが、いゝ加減の時に南無トラヤヤと聲をかけた。すると宙の棺がする〳〵と降りて草の上に置かれた。皆聲をあげて感歎し、長者はひれ伏してお禮を云つて、朱塗の獨籠をしたてゝ寺に送り返し、約束通り寺もたてなほしていろ〳〵寄進したので、寺は繁昌して門前に市が出來るほどになつた。

——岩手縣上閉伊郡——

昔研　二ノ三五八

二例あり。共に傳說と化し、ある寺の由緒として語られてゐる。

淨法寺にもこの話ありと。

岩手縣　上閉伊郡昔話集　一一八

「虎猫と和尚」〔例出〕

福島縣　磐城昔話集　四二・一三一

長野縣　北佐久郡　昔研　一ノ五六四

「猫旦那の話」

山梨縣　西八代郡　續甲斐昔話集　八三

「猫寺」

德島縣　美馬郡　昔研　二ノ二九

阿波祖谷山昔話集　五七

「瀧寺の猫」

猫寺（猫の助力・援助）

或所に長者があつて、美しい娘があつたがふと病になつた。夜中の丑滿時が來るとウン〳〵唸つて苦しむが、醫者も法者もどうすることも出來なかつた。よく氣をつけてみると、不思議なことは飼猫がいつも娘の所を離れない。追つても離れない。母親が心配してゐると、夢に猫があらはれて「私がお孃さんのそばをはなれないのは、天井に大きなてんこが居て、お孃さんを殺さうとしてゐるからで、もし私が居なかつたら危いからです。之を退治るのには、私だけでは迚も駄目ですから、之から何十里先の某といふ所に居る兄弟をつれて來て下さい。さうすれば必ず退治してしまひます」と云つた。夢であつたが本當かどうか人をつかひに出してみると、何日かたつて同じやうな猫をつれて歸つたので、二匹に御馳走を食はせて置いて。どうしたらいゝか聽くと、又夢の中で猫が「何月何日の何刻、何番目の倉の中に入れてくれ」と云つたと思ふと目がさめた。その日二匹を倉の中に入れて待つてゐると、暫らく何事もなかつたがそのうち大きな音がして來て、どたんばたんと大騒ぎになつた。再び靜まり、又大きな音がしたのでもうよからうと戸をあけて見たら他所の猫が出て來て、うちの猫は白銀の毛をした「てんこ」を食ひ殺して居た。間もなく二匹の猫は死んだが、娘の病氣はそれからけろりと癒つてしまつた。長者は猫の爲に二つの塚をたてゝやつた。

——岡山縣苫田郡——

老媼夜譚　一二五

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　二・六

「猫の恩返し」

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　三七

「猫と娘」

もう一話。猫塚鼠塚といふ類話がある。

岡山縣　苫田郡　御津郡昔話集　七七

「猫のてんこ退治」〔例出〕

〃　御津郡　同書　七九

「猫の守護」

見るなの座敷（鶯の一文錢）

或若い百姓が旅稼ぎに出て途中峠にさしかかつた時日が暮れてしまつた。燈が見えるのでやつと辿りついてみると立派な家で若い美しい女が出て來て泊れと云つた。話の末に男はその家の留守番に雇はれることになつた。翌朝女は馬で出かける時、食べたいものは何でも戸棚をあければあるから、腹が空いたら食べて下さいといひ、それから奥の間だけは決して襖を明けて下さるなと云ひ置いて出て行つた。

男はたゞ其處に留守居して、戸棚をあければ食べたいと思つた

ものが何でもあるので、正直に一年間つとめ上げた。男は家の方も心配だからと云つて暇を乞ふと、お禮に白木綿一反と錢を包んだ紙包一個を與れた。歸つて紙包を明けてみると妙な一文錢が一枚入つて居るきりなので、不思議に思つて庄屋に見せると、之は鶯の一文錢といふ寶物だと云つて千兩で買つて與れたので、男は急に大金持になつた。その話を聞いて隣の親父が峠の一軒家をたづねて行き留守番に雇はれることになつた。開けるなと云はれた部屋を開けて見たけれども、何もない空な部屋であつた。女は歸つて來ていつもの樣に先づ奥の部屋に入つたが、がつかりして戻つて來て「お前さんがあの部屋をあけたばつかりに、私が長い間山を廻つて讀んだほけきようがみんな出てしまつた」と云つて歎き、男は何一つ貰はずに暇を出されてしまつた。

——新潟縣南蒲原郡——

岩手縣　稗貫郡　昔研　二ノ三八
山形縣　最上郡　昔研　二ノ一八五
「鶯の內裏」
福島縣　磐城昔話集　四三・一三二
新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　四六
「ほけきよう」〔例出〕
岐阜縣　飛騨　ひだびと　五ノ三

土藏の中だけは見るな、といふ女、その留守にかべを破つて見ると多くの桶があり、中にきれいな魚がいつぱい泳いでゐる。三千年かゝつて積んだ行が一度に戻つた。もう人間界には歸れぬといつて、ホーホケキョとないて山へとんで行つてしまつた。

○參考

昔研　二ノ五三〇　に鈴木棠三氏の研究を載す。

猿の一文錢

鶯の一文錢と同じ系統。猿の恩返しに貰ひ、これを金箱の上に置けば金が出來、米櫃におけば米がふえる。

（犬と猫と指輪の條參照）

山形縣　東田川郡　昔研　一ノ四六五
「白いんと」
新潟縣　佐渡昔話集　八一
花咲爺の系統。
廣島縣　高田郡北村　藝備「昔話の研究」五四
こゝでは猿の金といふ。この金を隣の婆にとられ、犬猫が取もどしに行き、猫がとつて來たのでそれからは犬と猫の仲がわるくなつた。と語られる。
因幡　國民童話

島根縣　邑智郡　民族文化　二ノ七
少しこわれては居るが、始めに、子供にいぢめられる小猿を救ふ條あり。
〃　昔研　二ノ四六一
「東岸の爺と西岸の爺」

鼠の淨土

昔或爺が蕎麥燒餅をもつて畠打ちに行き、畠を打つてゐると鼠が一匹ちよろ〳〵と出て來た。そこで燒餅を半分こわしてやると唾えて穴へ這入つて行つた。又出て來たので又投げてやると、又唾えて行つた。すると今度は親鼠が出て來てお禮を云ひ、自分の家に來て與れろといふので、云はれるまゝに目をつぶつて鼠について行くと立派な座敷の中に來て居た。そこへさつきの仔鼠どもが出て來て禮を述べ、うんと御馳走になつて歸りがけには金を貰つて來た。

隣の爺はそのまねをして蕎麥燒餅を持つて畠打ちに行き、仔鼠に與れて鼠の家に招かれた。御馳走を食べながらあたりを見ると向ふの方で鼠が臼に黃金を入れて

猫の聲こは聞きたくないであ

動物の援助

と歌ひつゝ搗いてゐるので、その黃金欲しさに猫の啼聲を眞似すると、鼠共はみな逃げてあたりは暗闇になつたので、大變だと思つて氣がついて見ると、自分は畠の中で鼠穴に頭を突込んで居たのだつた。

——岩手縣紫波郡——

青森縣　津輕昔話集　第二十七
〃　八戸　昔研　一ノ三六八
岩手縣　紫波郡　紫波郡昔話集　一〇七
「餘なの畠打ぢ」〔例出〕
〃　上閉伊郡　聽耳草紙　二二〇
「豆子噺」
山形縣　東田川郡　昔研　一ノ四二七
「鼠の餅搗き」
〃　北村山郡　昔研　二ノ二八二
「鼠淨土」
秋田縣　平鹿郡　昔研　二ノ二一九
「鼠の餅搗き」
〃　鹿角郡　第一昔話號　四三
「鼠の國」
福島縣　石城郡　磐城昔話集　四四・一三三

「鼠と團子」　南蒲原郡昔話集　三〇
新潟縣
「鼠の淨土」　昔研　一ノ三六
長野縣　小縣郡
「鼠によばれた話」　下水内郡誌　一九七
〃　下水内郡
〃　鄉土研究　四ノ八號
兵庫縣　美方郡　昔研　二ノ三二六
「鼠淨土」
〃　城崎郡　同書　二ノ三七一
廣島縣　山縣郡　安藝國昔話集　七二
「鼠の國」　二話あり。
同縣　藝備「昔話の研究」　五九
隱岐　昔研　一ノ三六八
「鼠の島」
大分縣　速見郡　昔研　一ノ五六八
熊本縣　飽託郡　昔研　一ノ四二〇
鹿兒島縣　奄美大島　昔研　二ノ三七四
同縣　甑島昔話集　一六九

地藏淨土

お爺さんが山へ柴採りに行つて晝飯にお結びを食べようとすると、どうかしたはずみに轉がして穴へ落ちてしまつた。爺がその穴へ這入つて行くとお地藏さんが食べて居る。爺さんはお結びはそれ一つしか無いから返してくれと云ふと、お地藏さんはあやまつていまにとゝへ鬼が來るから自分の尻の下に這入つて居れ、そして尻を振つたら鶏の鳴眞似をせよと云はれた。間もなく鬼が來て人間臭い〳〵と云ふので怖くてふるへてゐると、お地藏さんは三遍尻を振つた。爺は鶏の眞似をすると鬼は夜明けだと思つて金棒を置いて逃げて行つてしまつた。爺さんはそれを持つて戻つたが何でも欲しいと思つて振るとすぐ出て來るといふ寶物で、たちまちに大金持となつた。

隣の爺さんはそれを見て眞似したくなり、握飯をもつて島に行き地藏樣の所へ行つた。けれども鬼が出て來て地藏樣が合圖の尻を振つた時をかしくて笑つたので、鬼は見つけてきのふ欺したのもお前だらうとて金棒に爺さんを突刺して地獄へつれて行つた。

――廣島縣佐伯郡――
青森縣　三戸郡　昔研　二ノ五五四

「かけろ虫」　磐城昔話集　四六・一三四
福島縣　石城郡
「地藏樣と團子」　高志路　六ノ七ノ一五
新潟縣　安藝國昔話集　六五
廣島縣　佐伯郡
「轉げた握飯」〔例出〕
〃　山縣郡　同書　六五
「ころげた餅」　藝備「昔話の研究」　六六
〃
此處では小さい穴を鬼の穴、蟹の穴等と云つてゐるが、この點で鼠淨土に移るか、又猿蟹話にも。たつた一粒の米と小豆で萩の餅をつくる誇張話もあり。
豆子噺參照
島根縣　隱岐知夫郡　昔研　一ノ三六六
「燒餅爺さん」
〃　昔研　一ノ四〇九

團子淨土

地藏淨土よりやゝ笑話化したものを團子淨土とする。例へば豆一粒にて團子をつくるなど。
岩手縣　岩手縣縣澤村誌　二六七
新潟縣　南蒲原郡　第一昔話號　五〇
南蒲原郡昔話集　二四
越中　水橋　ひだびと　七ノ一二
終に「爺はんコロリン」のあることは、肥後の例と近い。
熊本縣　天草郡　昔研　二ノ四一
大分縣　速見郡　同書　二ノ四三
九州のものは形よく整ひ古風である。

花咲爺

（犬子話・上の爺下の爺・灰蒔き爺・雁取爺などを含む）

昔京州に善い爺と惡い爺とが隣どうしで住んでゐた。二人は川に鮫をかけておいた。上の爺が朝早く行つてみると自分の鮫には犬が一匹、下の爺のには雜魚が這入つて居たので、中だけを取換へて歸つた。下の爺は行つてみると小犬がかゝつてゐるので拾つて歸り、椀で食はせると椀だけ、鉢で食はせると鉢だけ、大きく

なつた。或日爺樵と山へ柴捕りに行き、犬の手柄で鹿を澤山捕つて歸つた。隣の爺は犬を借りて行つたが、しゝといふ所を蜂と云ひ違へたので澤山の蜂に刺されてしまつた。爺は怒つて犬を殺してこめの木の下に埋めて歸つて來た。下の爺は犬をかへして呉れないので聞くと、殺してこめの木の下に埋めたといふので山へ行つてこめの木を伐り、臼につくつて米や金を授かるやうにと臼唄をうたひ乍ら搗くと、本當に米や金が出て仕合せに暮せるやうになつた。隣の爺はその臼を借りて婆と二人で搗いたが肝腎の歌の文句を忘れて、間違つた唄をうたつたので汚いものが家の中に流れて來た。二人はそれを臼のせいだと云つて腹を立てゝ臼を火にくべて燒いてしまつた。

下の爺は臼を燒いたと聞いて、せめてその灰だけでも貰つて行かうと灰を持つて來て、畑のそばの沼に居る雁めがけて

雁の眼さあくはいれ、雁の眼さあくはいれ

と云つて投げつけると、唄の通り雁の眼の中に灰が入つて、雁はころ〳〵と死んでしまつた。婆と二人で雁汁をこしらへて食べてゐると、又隣の爺が來て譯をきくので、灰を投げた話をすると、又その灰を分けて貰つて歸つた。そして風のつよい晩樫根に上つて空にむいて

ぢんぢ眼さあくはいれ、ぢんぢ眼さあくはいれ

と唄つたので、文句通り爺の眼に入り盲となつて樫根からころげ落ちた。下に待つて居た婆は雁が落ちて來たと思つて大きな槌で爺を打つた。

——岩手縣江刺郡——

國民童話	一五二	青森縣
津輕口碑集	三三	〃
津軽昔ッ集	四三	〃　八戸市
昔研	二ノ三六二	四話あり。
江刺郡昔話	一五	岩手縣
紫波郡昔話集	七三	〃　〔例出〕
上閉伊郡昔話集	六八	「上の爺と下の爺」
老媼夜譚	一三〇	〃
第一昔話號	二七	「上の爺と下の爺」
昔研	二ノ五一四	〃　岩手郡
		「下田おうぢ・上田おうぢ」
		山形縣　北村山郡
		「花咲爺」
昔研	二ノ四五六	秋田縣　平鹿郡
		「上の爺と下の爺」
人類學雜誌	一二八	宮城縣　加美郡
磐城昔話集	一七二	福島縣　石城郡
		「こゝ掘れわん〳〵」
昔研	二ノ一七六	新潟縣　佐渡
		「花咲爺」
昔研	一ノ四二四	新潟縣　中蒲原郡
		「花降り爺」
加無波良夜譚	六〇	〃　南蒲原郡
		「花まき爺」
南蒲原郡昔話集	三四	〃
		「灰播爺」
昔研	一ノ三七〇	福井縣　阪井郡
うつしばな	四七	岐阜縣　飛騨丹生川
昔研	一ノ四一四	岡山縣　御津郡
		「犬の恩報じ」　灰をまく條無し。
昔研	二ノ一三二	愛媛縣　北宇和郡
		「花咲爺」
昔研	二ノ三二〇	佐賀縣　小城郡
		「ものいふぐうずう」　ぐうずうは蟲。
		寶犬はしば〳〵蟲になつてゐる。
昔研	二ノ四一一	長崎縣　北高來縣
方言誌	二二號ノ一二	
		「上ン爺下ン爺」
瓶島昔話集	一六七	鹿兒島縣
おきえらぶ昔話集	三一	沖永良部島
		「灰播童子」

竹伐爺

昔殿樣が竹籔のそばを通ると竹を伐る音がした。「俺の籔を伐る者は何者ぢや」と云ふと、竹を伐つて居た者が、「日本一の屁こき爺」と答へる。「俺の前で屁を一つこいて見い」と云ふと爺は「ちゝんぷい〳〵、こよの盃おちちんぷ」とやつたので殿樣は感心して澤山の褒美を下された。近所の惡い爺がこれを聞いて、殿樣の竹籔で竹を伐つて居て眞似をしたが、失敗して縛られてしまつた。

——滋賀縣高島郡——

第一昔話號	六三	青森縣　八戸

「屁ひり爺」　昔研　二ノ四二六

青森縣　昔研　二ノ二八〇

屁をひる段「膝へ上れ、肩へ上れ」は轉用か。

鳥呑の條はない。

山形縣　北村山郡

「屁つぴり長者」　昔研　二ノ五五九

秋田縣　平鹿郡

新潟縣　南蒲原郡　昔研　一ノ七三

二話あり。鳥を食ふ話あり。

長野縣　北安曇郡　小谷口碑集　一四七

「さとりのわつぱ」の主人公。

愛知縣　北設樂郡　第一昔話號　五七

此地の外十七例を擧げてゐる。

滋賀縣　高島郡　第一昔話號　六三

【例出】

廣島縣　藝備「昔話の研究」　七一

島根縣　邑智郡　昔研　二ノ五六三

德島縣　阿波祖谷山昔話集　九一

「屁ひり婆」

香川縣　三豐郡志々島　さぬき民俗　八

〔參考　福富草紙との關係。昔研　二ノ三五二〕

鳥呑爺

誤つて鳥を呑み、尻が面白く鳴る樣になり、幸運を得る。後半は竹伐爺に同じ。竹伐爺參照

福島縣　石城郡　磐城昔話集　四七・一三六

新潟縣　南蒲原郡　昔研　二ノ二二六

「唄うたひ爺」

石川縣　江沼郡昔話集　七三

三話あり。

福井縣　坂井郡　昔研　一ノ三〇

岐阜縣　飛騨丹生川　うつしばな　五〇

鹿兒島縣　甑島昔話集　一七〇

猿地藏

昔ある所によい爺樣があつた。或日山へ柴刈りに行つて、向ふの河原を見たら、猿が集つて石地藏を擡いで對岸へ渡して居た。爺はこれは面白いと思つて自分も河原へ行き、全身に米の粉を塗り白を倒にして其上に立つて地藏樣のまねをして居た。それを猿が見つけて此處にも地藏樣が御座ると云つて手車にのせて擡ぎ、川の中をかしい唄をうたつて對岸へ渡しそこに据えて拜んだ。爺は作り鬚をして「石を枕に礎を用意しろ」と云ふと、猿はその通りにして背寢た。寢入つた頃槌で猿の頭をつぶして殺し、家へ持歸つて婆樣と猿汁にして食べた。

——秋田縣鹿角郡——

青森縣　八戸　昔研　二ノ四二六

四話あり。四つとも山畑に行く爺。粉を白く顏に塗つて、とあり。三つは笑つたのが隣の爺の失敗。終の一例には隣の爺無し。

岩手縣　膽澤郡　黃金の馬　一一九

膽澤郡昔話集

同縣　江刺郡昔話　二八

〃　柴波郡昔話　九四

「爺と猿」

山形縣　北村山郡　昔研　二ノ二一四

「水引きの話」

秋田縣　鹿角町　第二昔話號　六七

「爺樣と猿」〔例出〕

〃　仙北郡　聽耳草紙　二四一

「猿と爺地藏」

福島縣　石城郡　磐城昔話集　四九・一三九

長野縣　小縣郡民譚集　二五三

和歌山縣　田邊市　鄉土研究　二ノ二四二

島根縣　邑智郡　第一昔話號　七四

「ぶいが谷の酒」

廣島縣　藝備「昔話の研究」　一七九

三話あり。何れも笑つたのが失敗。一は猿の代りに鬼。

〃　山縣郡新庄村　安藝國昔話集　八〇

大分縣　速見郡　昔研　一ノ五六九

長崎縣　對馬佐須村　旅傳　一二ノ八ノ二二

爺は山芋掘りに行く。猿の代りに狸。

瘤取爺

昔正直な爺と心の惡い爺があつて、二人とも頬に大きな瘤を持つて居た。正直な爺がある日山へ木を伐りに行き、歸る時になつたら雨がふり出したので、木の洞穴の中に入つて休んでゐる中眠つてしまつた。起きて見ると夜中で、洞穴の前にはいろ〳〵な化物どもが澤山集つて酒盛りをして居たが、そのうちに醉つて踊り

出した。爺も思はず踊の面白さにつられてそこへ出て行つて踊りはじめた。みんな驚いたが、仲間に入れて呉れて夜明けまで騒いで引上げる時、面白い爺だから又今夜も來る樣に、大事なものを預つてやると云つて頰の瘤を取つてしまつた。爺は家に歸つてその話を婆にして二人で大喜びをした。

心の惡い爺は、自分の瘤も取つて貰ひたいものだと山の中の洞穴で待つて居た。夜中になると又化物が出て來たが、怖いので探へてゐると、化物共はゆふべの爺は來ないかと洞穴の中を探して爺を引出した。が、少しも踊らないので怒つて昨夜の瘤を片方へ引つけた。それで惡い爺は兩方に瘤のある樣になつて歸つた。

——山形縣最上郡——

江刺郡昔話　二五

岩手縣　和賀郡　聽耳草紙　二一一

〃　西磐井郡　同書　二一四

〃　上閉伊郡　老媼夜譚　三一九

「柴刈爺」

山形縣　最上郡　〔例出〕　昔研　二ノ一八六

福島縣　石城郡　磐城昔話集　五〇・一三九

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　一四

昔研　一ノ四〇四

靜岡縣　濱名郡　靜岡縣傳說昔話集　四六二

和歌山縣　伊都郡　口承文學　九ノ一六

二人の爺の踊の巧拙は云はず。たゞ存在分布を知るのみ。

語りは零落してゐる。

廣島縣　加茂郡　安藝國昔話集　八四

〃　山縣郡　同書　八五

致富譚に近く、怪談の古い形に近い。

大分縣　北海部郡　昔研　一ノ一三五

發端は畑の掘飯話。穴の中に天狗。

同縣　直入郡昔話集　四一

佐賀市　昔研　二ノ三二二

鬼の踊に參加するだけにて、瘤の話なし。又團子淨土に比し團子も掘飯もない。

これで二つの說話は、もと同系だつたことがわかる。

○參考

朝鮮　日本昔話集　下ノ八八

醒醉笑にも。

言葉の力

化物問答（狐狸を言ひ負かす話も含む）

或山の中の村に醫者が來て、住む事になつたが家が無いので村から少しはなれた山の空寺に住む事になつた。すると夜になると雨戸の外に何か來て縁に上り、割れ鐘の樣な聲で

醫者どんの頭をステテンコテン

醫者どんの頭をステテンコテン

と怒鳴り乍ら戸を割れさうに叩く、醫者は怖くて蒲團の中にもぐつて居たが、翌朝見ると縁側に大きな獸の足跡がいつぱいあつた。村人に話すとそれは古狸の惡戯だらうと、その夜は村の若者が幾人も一しよに寺に泊ることになつた。戸締りをしたり又天秤棒を持つたりして爐をかこんで待つてゐると、夜更けて又戸をたたいて醫者どんの頭をステテンコテンとやり出した。こつちも負けて居ず

そんな事言ふ者の頭をステテンコテン

そんな事言ふ者の頭をステテンコテン

と叫鳴り返す。又狸の化物も叫鳴り返すといふ大騒ぎをしたが遂に長い競爭の後狸は負けて默つてしまつた。翌朝見ると大きな古狸が一匹言ひ負かされた口惜しさに、自分で自分の腹を食ひ切つて死んで居た。それを皆で狸汁にして食つた。

——山梨縣西八代郡——

岩手縣　上閉伊郡　老媼夜譚　八〇

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　四一

「醫者どんの頭」〔例出〕

岐阜縣　吉城郡　ひだびと　四ノ三四九

「さつとと狸」

狸が「お前の頭はすつてんてん」といふと座頭も負けずに「お前の頭はすつぺらぽんぢや〳〵」と三味線に合せて彈くといふ。

愛知縣　北設樂郡振草村　愛知縣傳說集　二五八

「狸」

〃　南設樂郡　猪・鹿・狸　一五九

遠江　國民童話　五二

「山の芋」

大山の芋の化物が和尙と小僧を食つてしまつた後、座頭が琵琶でいひ負かして退治する。

福岡縣　鞍手郡　福岡縣昔話集　七八

婆と娘と「うそ」と三人住んでゐる。うその留守に狐が來て

うそがばゝうつてんとん〳〵
といふ。うそがこれを聞いて
さういうものこそうつてんとん〳〵
と云へと教へそ。朝起きて見ると、狐が舌をかみ切つて死んでゐた。

「うそ」は吉吾等と同じ地位のものか。
この話は後段あれど何分にも不明なり。然しもとの形にやゝ辿り得られる。
或は座頭の語り方のまゝか。

○參考
筑前宗像郡東郷村平井の建興院にて天井の鼠と云ひ合ひ、代々の僧負けて死ぬ。
建興院はボックリシヨ
千も萬もボックリシヨ
一人の旅僧これに和し、饒ほどの狸云ひ負けて死ぬ。

蟹問答

或偉い旅僧が山中で日が暮れた。見すぼらしい木樵小屋が見付かつたので行つて泊めてほしいといふと、斷られた。この先に化物が出るといふ古寺があると教へられ其處に泊る。
眞夜中になると何處からとも無くガタ〳〵音をさせて大入道が出て來て、自分の出す謎が解けなかつたら食つて了ふと云ふ。さうして、「小足八足大足二足、色紅にして兩眼天に翹くこと日月の如し」と喚鳴つた。旅僧が蟹と答へて杖で大入道の頭をピシヤリと叩くと音をたてゝ引込んだきり朝まで何も出て來なかつた。夜があけて大入道の逃げた方を探してみると藪の下に大きな古蟹が一匹死んで居るのが見付かつた。それからこの寺には化物が出ない樣になつた。

——埼玉縣川越市——
石川縣　珠洲郡　能登國名跡誌　下ノ二九九
飯田の蟹寺（永禪寺）の月庵「四足八足兩足八足、右行左行眼天にあり」といふので蟹なるを知そ。
山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　二九〇
「かに坊主」
〃　續甲斐昔話集　三一九
「蟹坊主」
東山梨郡萬力村　蟹追阪長源寺の話。
埼玉縣　川越市　川越地方昔話集　一〇〇
「化物問答」（例出）
熊本縣　天草島　郷土研究　五ノ一七七
「蟹の甲」
虚無僧が夜道で旌光に逢ひ、「四足八足云々」と云ふので「汝ハ蟹ナラン」と尺八で打つた。それでいまでも甲に痕があると。
「蟹山伏」の狂言もあるから古い話であらう。

灰の發句

「かきならす灰は濱邊の砂に似る」と詠み、後の句が續かぬのを苦に病んで和尚が成佛しないで居る。ある小僧が「國物裏は海かオヤは見ゆるぞ」とつけて旌止む。
——大分縣直入郡——
昔研　一ノ五〇六
秋田縣　仙北郡
「灰ならし灰は」
〃　平鹿郡　旅傳　一三ノ二ノ三九
「羽後淺舞町近傍聞書」に灰句和尚の話あり。
新潟縣　佐渡島昔話集　一六〇
「下の句」
これは和尚で無く宿屋の亭主、泊り客の一人が下の句をつけゝ話。
大分縣　直入郡昔話集　七四
「歌と幽靈」「例出」

大工と鬼六

昔薬の力

或處に流れの早い川があつて、幾度橋を架けても流されるので近郷で一番名高い大工に架けて貰ふ樣に頼んだ。引受けたものゝ大工は心配でたまらず、川のほとりでじつと流れる水を見て居ると、水面に泡が浮んでその中から鬼があらはれた。何を考へてゐるときかれるので譯を話すと、鬼は笑つて「お前がいくら上手でも此處へ橋は架けられまい。しかしお前の眼玉をよこしたら代つて架けてやる」といふ。大工は眼玉をやるつもりで家に歸つた。次の日は橋が半分、その次の日はもう全部架つて居た。驚いてゐると鬼が「サア眼玉をよこせ」といふ。大工は待つて呉れと云つて山へ逃げて行つてあちこち歩いてゐると
早く鬼六ア　眼玉ア　持つて來ばア　えゝなア
と子供のうたふ聲がする。大工はそれを聞いて家に歸つた。次の日川へ行くと又鬼が出て來て「眼玉をよこせ、それがいやならば俺の名を當てゝ見ろ」と云ふ。大工は鬼六と云ふと、鬼はたちまちに消えて失くなつてしまつた。
——岩手縣膽澤郡——

か、しかし子守の唄といふ所にまだ「大工と鬼六」などの痕跡が見られる。

「平林」などゝ同系か、又トム・チットトットの系統か。

長崎縣　南高來郡　島原半島民話集　二四四

「山の中の子守唄」

この歌は誰かの下手な作りものであるが、古くあつた話と思はれる。

尾張のも一つ家の石の枕の歌、淺草のも中心はこゝにあつたか。

鬼との約束の話も「子守の歌」から。

天人女房の飛羽も「子守の歌」から。

ズイトン坊

貉に名を呼ばれる話。

長野縣　小縣郡民譚集　二六九

「ズイトン坊」

節穴から窺くと貉が尾で戸をたゝいてゐるので、その尾をひつぱると、尾が切れたので血をたどつて行くと、奥山の洞穴へ入つて居たのでそこで捕へる。

長野縣　下伊那郡　昔ばたし　三〇

子守唄内通

危難に逢はうとして居る事を子守の唄から覺りそれを逃れること。

福岡縣　築上郡　福岡縣昔話集

「學問のおかげ」

江州にての事といふ。山中の茶屋に泊り、乳母が子守をして頻りにうたふ唄。

「文字に書きて見れば」とあり。之は一種の字を教へる教育用

日本昔話名彙　聽耳草紙　一〇六

「大工と鬼六」（例出）

この話など多分古い形。子供の唄を立聽して鬼六といふ名を知ること。

昔話採集手帖　七〇　岩手日報所載のものも同じ話である。

石見　旅傳　四ノ七一六

テイテイコブシ

「テイ〳〵コブシはお泊りか」などと云つて、南池鯉魚など來る。テイ〳〵コブシは椿の木の箍だつた。

現在「西竹林の一目鶏」などとなつてゐるのは漢字教養普及後の改作で、もとはたゞ箍物の名を知るのみであつたらう。

「山寺の坊樣とズイトン坊」

言ひ負けて死ぬと云ふ。どうしてその聲を出すかは云はず。

聲の調子で面白味を出すもので、なかば音曲による。

ボサマの作。

智慧のはたらき

狐退治

叺狐などゝ同系。狐を騙して退治る話。

青森縣　八戸　昔研　二ノ四三一

二話あり。これは陸中にもある話。

前者は犬をかくして置いて爺婆が躍る。後者は狐の客を騙して袋に入れ打殺す。たつた一匹の狐が逃げ歸る條双方にあり。立聽により狐の復讐を防いだこと。

二つとも座頭製か。

岩手縣　紫波郡昔話　三一

「狐と小僧」

狐が和尚に化けて來るのを退治する話。

山梨縣　旅傳　三ノ五二七

「狐をだました話」

泉州藤原　口承文學　一〇ノ二五

長崎縣　南高來郡　島原民話集　四四・四八

二話あり。前者の中目ちがひの事なく、後者は狸で、馬にしばりつける。末に修飾あり。

叺狐

狐を騙して袋に入れ退治する話。

農民なれば袋に入れるかはりに馬を乘せると云ふ。似せ本位例話參照

青森縣　八戸市　昔研　二ノ四四六

四話あり。

その一は「だまされ狐」　袋に入れて叩くまで、爺片目を伴ふ。

その二は「狐をだました話」　息子等の手柄、片目の條無し。

その三は「騙され狐」　婆が行くと孫になつて來る。

その四は「新井田のしよつぱ爺」　叺はあるが、中の鹽を食はされる話。敗北承認談。

岩手縣　九戸郡誌　四七七

狐が化けて聟に來る。化けかけを見つけて叺に入れ、それを「み

さいな〳〵」と云つて叩くといふのは、やはりボサマの三味線の音であらう。

岩手縣　上閉伊郡昔話集　一〇三

「ボサマと狐」

狐狩に通りかゝつたボサマが、その智慧で袋の中へ狐を欺き入れて殺す話。

山形縣　最上郡釜里村　釜里村誌　二五二

瑞典話。二つ太象。

長野縣　北安曇郡　北安曇郡郷土誌稿　一

小座頭の狐退治。

山梨縣　西山梨郡　地方傳談

コンブクロ淵の古狸。

片目ちがひ

昔爺と婆とあつて、爺の右の眼は盲であつた。爺は正月の挨拶に歩いた道で古い貉にあうた。貉は爺の眞似をして左の眼を盲にして家に歸つて行つた。婆は貉の爺がかへつたので湯を沸して入れた。お風呂の蓋をきせ重い石をのせて置くと、貉は風呂の中で本當は爺で無く貉だと云つたが出して、やらなかつた。本當の爺が家に歸つて來て貉をあげてやつた時にはもう死んで居つた。

——石川縣江沼郡——　老媼夜譚　一八八

岩手縣　上閉伊郡

狐との話の進行が非常に面白く、それに又目のまちがひも子供にはをかしかつたらう。

〃　稗貫郡　口承文學　九ノ二

狐の化けた爺は右が片目。なほ熱湯で足を洗へないといふから試みる。遂に叺に入れられる。

〃　贈澤郡　黄金の馬　一〇四

破片か。

長野縣　下伊那郡　昔ばなし　六三

「化けた貉」

右の瘤が左にある。たゞ問答の條は無し。

長崎縣　諫早　口承文學　九ノ九

「狸退治と火繩」

似せ本尊

或多若者が集つて仕事をしながら狐を捕る話をし、結局一人が狐捕りに出かけることになつた。殿から馬をひき出し、荷鞍をつけ支度して常々狐の出る所に行つて人待ち顔をして居た。そして「婆さんはもう歸つて來るだらうな」と云つてゐると其の婆さんが粢をあらはしたので若者は喜ばしさうに「さあ〳〵馬に乘つて下さい」と云ひ乍ら、この馬は特別亂暴だからとて婆さんの體を縄でぐる〳〵と馬にしばりつけて歸つて來た。既の前で皆の若者たちに周りを取卷かせて置いて縄をとくと、婆さんは狐の正體をあらはして慌てゝ家の中にとび込んだ。一同は家中を隅なく探したが一向狐の姿は見えない。捕へて來た若者は終々と憤慨で煙草をすつて居たが「俺の家には阿彌陀樣が二人居たすつて、そして手招ぎなさる」と誰に云ふとも無く云つた。すると忽ち佛樣が二體となりその中の一體は手招ぎをした。若者はそれッとばかり手招ぎした佛像を佛壇から引ずりおろして殴り倒した。果してそれは狐であつた。それから狐汁をこしらへて皆で食ふ事になつたら捕へた若者は先づ毒見をするとて一寸食ふとたちまち腹痛を訴へて苦しみはじめた。一同は介抱したがきゝ目が無いので、怖しくなつて一人二人と去り皆歸つてしまつた。その後で假病をつかつた若者は思ふ存分狐汁を食べた。

——岩手縣贈澤郡——　老媼夜譚　一八六

岩手縣　上閉伊郡

「狐と小僧」

智慧のはたらき

岩手縣　紫波郡昔話集　三一

「狐と小僧」狐退治の二　參照

〃　贈澤郡　(新)黄金の馬　四三

「若者が狐をだました話」(例出)

あとさきあり。阿彌陀樣は手招ぎなさると、云つて見あらはす。

〃　平泉　和尚と小僧　九七

「俵で狐を捕つた話」

福島縣　石城郡　磐城昔話集　六七・一五八

長野縣　北安曇郡郷土誌稿　二ノ八三

「ずるてん坊」

山梨縣　西八代郡　嶺甲斐昔話集　三三

「狐と狸」

島原よりの傳來と甲斐では言ふ。

島根縣　隱岐昔話集

德島縣　阿波祖谷山昔話集　二九

福岡縣　糸島郡　福岡縣昔話集　九七

「福間の赤兵衛」

婆に化けさせて狐をとる話。三つあつた地藏が四つになる。

長崎縣　南高來郡　旅傳　二ノ六

同縣　島原民話集　六〇

「狐が煮殺された話」

敗北の承認

昔美作の或山の峠の上に一軒家の茶店があつて喜兵衛といふ人の夫婦が住んで居た。その茶屋へ或夜遅く立派な身たりをした旅の侍が入つて來て休んだが、よく見ると狐の化けたのだつた。袴や着物、大小の刀は本當の侍の通りであつたが、まだ未熟と見えて少し毛があり顔が尖つてゐたし、耳も三角で突張つてゐた。喜兵衛はをかしくてたまらなかつたが笑ひを我慢して、金盥に水をいつぱい汲んで「お使ひたさいまし」と侍の前に置いた。しばらくして、狐は水をつかふつもりで水に映つた自分の顔を見て化けきれずに居たのに氣がつき、非常に驚いた聲を出して茶屋をとび出して行つた。

次の日喜兵衛が一人で山へ木を伐りに行つての歸り途、だしぬけに林の中から名を呼ぶものがある。妻は見えなかつたが返事をすると「喜兵衛さん、昨晩はをかしかつたなあ」と云つた。化けそこねた狐だつたのである。

――美作　日本昔話集による――

退治譚を一層愉快にする手段か。

假面を被つて敵を欺き、危難を免れ且福を授かる。

松山鏡の變化といふのは當つてゐるだらう。　老媼夜譚　二三〇

岩手縣　上閉伊郡　小縣郡民譚集　一七三

長野縣

「蛇の金攻め」

孝行な子が親の藥と狸の面とを買つて歸途蛇に逢ふ。呑まれようとして狸の面を被つておどろかす。「何が一番怖い」の問答で、金が怖いと云つて後に金を授かる。

狸と役者の話も之と關係があらう。

徳島縣　阿波祖谷山昔話集　五八

福岡縣　浮羽郡　福岡縣昔話集　一三三

孝行な下女が父に似た面を拜んでゐると、朋輩が鬼の面に替へておく。驚いて歸宅の途中、惡者の焚火にその鬼の面を被つてあたると、惡者は金を置いて逃げて行く。

これなどは作者の流布と考へられる。

之と似て愚者の立身談が津輕昔ッ集にある。おろか者の立身談は日本には例が少ない。

鹿兒島縣　甑島昔話集　一七五

○參考

日本童話集　三〇三「麥麹と鬼面」　產地不明。

化けくらべ

昔江波にお三といふ惡い狐と、四國の讃岐にこれもお三に負けぬ惡い狸が居た。或時二匹が出會つて、どつちが化け方が巧いか腕較べをやらうといふ事になつて、先づ狸が草を頭に置いて綺麗なお嫁さんになつたり、足輕になつたりして見せた。するとお三は「今度は自分の番だが、あさつて國道の松原を大名行列をやつて通るから見てくれ」と言つた。それならといふわけで狸は承知して別れた。狸が約束の日に國道へ行つてみると、向ふから全く立派な行列が來るので感心をして、お殿さんの籠へ近づいて「よく出來た〳〵」とほめたのでお供の侍に斬殺されてしまつた。此の大名行列は本物で、實はお三が三日前に知つてゐて狸をだましたのださうである。

――廣島縣――

福島縣　石城郡　磐城昔話集　六二・一五五

新潟縣　南蒲原郡

本物の行列を見乍ら狐が「子狸うまいぞ〳〵」と云つて殺される。

子狸の復仇談。

新潟縣

越後關屋濱の團九郎狐、佐渡の三吉狐をだます。

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　二七

「小左衛門と狐」

七變化八變化の話あり。淡路の芝右衛門狸とおなじ。

山梨縣　續甲斐昔話集　四二

「狐と貉」

智慧のはたらき

二人が互ひに死んだまねをして、一方が狩人や漁夫に化けて里に賣りに行く。貉は本當に殺される。

大阪府　泉南郡葛畑　口承文學　一〇ノ三一

「びやかけの狸と小女郎狐」

廣島縣　安藝國昔話集　一五九

「江波のお三狐」の話。其三に〔例出〕

島根縣　旅傳　三ノ一一

出雲の仁右衛門嶄中、狐の頭目は彌左衛門、大名行列に化けると「仁エモンサンウマイゾ」といふこと。淡路の芝右衛門ばなしにおなじ。

愛媛縣　松山　地方雜談

荏原の金平狐。八股榎の下の八股狸。

熊本縣　八代郡　人文　一ノ一

彥七が狐を騙す。殿樣の行列に向つて「彥七よく出來た」といふ「彥七の饅頭にだまされるな」の下げあり。

熊本縣　玉名郡　昔研　一ノ八四

「百舌と狐」

話はよほど「尻尾の釣」の方に近くなつてゐる。但し話し方は新しい。天守役・地守役の話などゝ近い。

熊本縣　球磨郡　昔研　一ノ二二九

「化けくらべ」

八代の彥市、狐と仲好くなり化け較べして、殿樣の行列を見せて狐を捕へさせる。前段に石肥三年の話がある。

長崎縣　壹岐　第一昔話號　七八

「狸と狼」

狼が狸の尻尾を見あらはす。狸は口惜しがつて、死んだふりをして仕事貰りの魚を盜む、それから「尻尾の釣」あり。

二つの話のつぎ目が目につく。

信州桔梗原の玄蕃亟、横手ヶ崎のお玉、赤域山のお千代狐にもこの話がある。

狐と狸との動物說話にしたのは近頃か。

○參考

淡路の芝右衛門狸の話　日本昔話集　上ノ八二

八化け頭巾

昔或池のほとりに稲荷樣が祀つてあつて、その眷族におすみ狐といふ狐が居て、大層化け方が上手であつたが、人間に化けの皮をとられてからは、かへつて人間から化かされる位であつた。

或時山伏が來て、自分は京都の稲荷大明神だが、人間にけがされた化けの皮を出せばもう一度靈力を入れてやると欺くと、狐は喜んで化けの皮を差出した。すると山伏はそれを持つて逃げてしまつた。

その山伏は庄屋と懇意であつたので、或日おすみ狐は狸の化けの皮を借りて庄屋に化け山伏の家を訪れた。そして狐の化けの皮といふものを見せて與れと云ひ出した。すると山伏も庄屋の云ふ事とて出して見せると、狐の庄屋は着て見ようと云つて肩にかけ「これはおゝきに」と云つて歸つた。山伏は口惜しがつたがどうする事も出來なかつた。

又山伏は、今度はほんとの稲荷大明神だと名乘つて、しば〳〵人間の手にかけた化けの皮を金の御幣で祓つてやると云つて狐を欺き再び化けの皮をとり上げた。それからはおすみ狐は犬の樣に盜み食ひばかりして歩く樣になつた。

——長崎縣壹岐島——

能登　鹿島郡誌　九八四

長野縣　下伊那郡豐村　藤原三號

「はもろてん」

野狐を欺した話。話主は籠屋。狐の寶物はシチロテン、籠屋は籠を示してハチロテンだと云つて交換する。

鳥取縣　因伯實話　一三

／　智慧のはたらき

兩足院といふ山伏が、狐の七化けの寶をまきあげる。八化けの寶は米子で買つた頭巾。

廣島市　安藝國昔話集　一五八

二話あり。江波のお三狐の條に、いづれも熊役者の面を買ふといふ話。

長崎縣　島原民話集　四九

「日見ノ峠の狐」

七面ぐりと八面くりと取換へる。乳母に化けた狐に取返されるといふ綱伯母型を伴ふ。

これは追加か。

長崎縣　島原民話集　五五

「長崎の治郎兵衛狐」

壹岐島　壹岐島昔話集　七五

〃　「唐津かんねの話」　同書　二〇五

〃　「おすみ狐」〔例出〕　同書　一六七

〃　「寶義」

この話も變化の一か。離れ蓑笠の項も參照

寶物交換（「八化け頭巾」の一變化）

昔或子供がめんぱに辨當をつめて山に行つた。天狗が居たので奪してやらうと思つて辨當を食つてしまつてから、めんぱを眼にあて丶京が見える五重塔が見える等と云つて一人で騒いで居た。天狗は羨しくなつて貸せといふが、子供はなほ面白さうにしてゐて貸す風もないので、天狗はもどかしがつて、自分の隱れ簑笠を貸すから是非見せろといふ。子供は占めたと思つて、わざとしぶしぶめんぱを天狗に渡した。天狗はしきりに覗いたが何も見えない。子供はと見るともう隱れ簑笠を着たので、どこに居るか分らなくなつて居た。子供は家に歸つたが母親にも見えなかつたので安心して菓子屋を歩いて菓子を盗んで食つた。村でも皆困つたが子供の惡戯は段々ひどくなる。

子供はその簑笠を、母親の簞笥の抽出しにしまつて置いたら、母親が汚ながつて燒いてしまつた。子供はそれを知つて裸で川へ入り、水のついたまゝの體で灰の上に轉がると、體中に灰がついて急に母親の眼に見えなくなつた。子供は外にとび出し酒屋で酒をしこたま飲んだが、口のまはりだけ灰がおちてしまつた。すると口のお化が酒をのむとて、皆が追かけて來る。小便をすると其處だけ灰が落ちて見える樣になるので、皆は大さわぎして追かけた。すると向ふから武士が、刀をやたらに振まはして來たので、仕方なし樋から水の中へとび込むと、灰が落ちて子供は正體をあらはした。

——長野縣上伊那郡——　老媼夜譚　八一

岩手縣　上閉伊郡
「天狗の小屋」
主人公は博徒で、囊ころと取換へる。後段鼻を高ひくする笑話あり。立身出世で終る。　同書　二一〇

岩手縣
「和尚と狐」
和尚の古頭巾と狐の化手拭と交換。和尚が手拭を被り村の若衆をからかふ條あり。　昔研　一ノ五一三

山形縣　東田川郡
「生針・死針」
主人公は怠け者。河童より「生針・死針」を買ひ、死針を河童に試みて逃げる。「それはゆふべの夢でそろ」で終る。
危險話の多く笑話化すること。

福島縣　石城郡　磐城昔話集　六・一五五
福島縣　西白川郡　國民童話　一二八

「狐の寶物」
二子塚村の五十吉が關和久村のどど塚のど衞門狐と、三色頭巾・狐の寶珠の交換。

新潟縣　南蒲原郡　第一昔話號　五〇
「隱れ簑笠」
のんだくれの男が柿の種と天狗の簑笠と交換。

長野縣　上伊那郡　第一昔話號　五五
「天狗の隱れ簑笠」（例出）
他の同型の話の酒屋が菓子屋となり女房がお婆となつてゐるのは童話化のよい例である。しかもたゞ結末に酒屋がある。

長野縣　下伊那郡　蕗原三號
「八化け頭巾」の項參照

埼玉縣　熊谷　地方雜談
古狐が九百九十九人を坊主にする。千人目は坊主。七色傘と十六頭巾との交換。

兵庫縣　神崎郡　第一昔話號　六八
「博奕打と天狗」

島根縣　簸川郡平田　旅傳　二ノ一〇ノ一九
「西出雲雜筆」の中に藥師寺の宗信と飯山の太郎兵衞狐とが古頭巾と寶珠の玉と交換する話がある。

鳥取縣　西伯郡　因伯童話　一一
米子戸神山の十内狐を蚊屋村の兩足院の僧が、古帽子を八化けの寶と稱して七化けの寶をとる。狐が取戻したが和尚が利かぬ樣にしておいたのを知らず、狐は馬子を欺さうとして見あらはされ、燒鏝で叩かれ尻に大火傷をする。それで戸神山の下を流れる川を尻燒川といふ。
半分傳說化するもの。この種の昔話に多いのも奇なり。

德島縣　阿波祖谷山昔話集　一一〇
倉市の話になつてゐる。

福岡縣　築上郡　福岡縣昔話集　二〇九
「田舍の若者」
ウソを云ふので親から追出された男が、スイノウ一荷をもらつてうり歩く。天狗の鼻高扇子と交換（隱笠なし）何が一番怖いの話となり、鼻を高低する話あり。自分の鼻を高くして車にひかれ、そこで死ぬ。

熊本縣　球磨郡　昔研　一ノ一三九
四話あり。倉市話。前段に粗相狸兵衞の話の破片がある。「隱れ簑」は型どほり。「身隱しの衣」は前段に「何が怖い」の話。石肥三年、後段には死骸を戸に立てかける話。その中段に天神さんの身隱しの衣と、篩と取換へる話あり。灰話・酒屋などは型どほ

り「狐のみの」は狐とかくれ簑を代る〳〵着てみる。壹市は着たまゝ逃げて酒屋へ行く、簑から足を出して見顯はされ、簑は焼かれる。狐は泣き乍ら歸つて行くといふをかしみあり。

長崎縣　南高來郡　旅傳　二ノ一〇ノ三二　島原民話集　五九

「八面ぐり」

隱れ簑笠

寶物交換と同型。天狗の隱れ簑を機智によつて奪ひとり、取返しに來ても返さない。何が一番怖いの問答あり。それによつて幸運を得る。笑話化したものも多い。いくらでも成長・變化・展開しやすい話である。

青森縣　八戸市　昔研　二ノ四七七

ふくべに粉唐椒を入れたものと簑とを交換し、菓子屋、酒屋を荒す。次に居歸りして火がつき、燒けたので詐言して灰を身に塗つたといふ。

末段は不細工である。座頭の製作か。

青森縣　三戸郡　昔研　二ノ五五五

「天狗とばくちうち」

岩手縣　紫波郡昔話集　一三八

「隱れ蓑に隱れ笠」

〃　稗貫郡　口承文學　一〇ノ一〇

「天狗と博奕打」三話のうち。

寶と簑笠と交換し、之を被つて長者の娘を隱す話。今一つは天狗を博奕で負かして寶に化けさせ、人と博奕を打ち二コ出ろといふのをオニコデロと云つたら鬼が出た。博奕の相手は金銀を殘して逃げた。

秋田縣　平鹿郡　昔研　二ノ三六五

「隱れ簑笠」

新潟縣　中蒲原郡　昔研　一ノ四二六

「隱れ笠・隱簑」

〃　南蒲原郡　第一昔話號　四九

石川縣　能美郡誌　一一〇七

鳥越村の虎狼山。

詳しい事を述べてない。破片であらう。

長野縣　北安曇郡鄉土誌稿　一ノ一八五

〃　上伊那郡　第一昔話號　五四

山梨縣　西八代郡　續甲斐昔話集　三九八

九一色村の阿難(あなん)阪で駿河の魚擔ぎ屋が博奕をしてゐるのを見て、天狗が仲間に入り、負けて最後に隱れ簑までとられてしまふ。後は型通り。

岐阜縣　飛騨　ひだびと　五ノ六

「隱れ簑」

地藏樣に相談して貰つた簑。後は型通り。

河内　牧方　國民童話　一三

兵庫縣　神崎郡　第一昔話號　六八

山口縣　周防大島昔話集

桃太郎の家に入つて隱れ簑笠を盜む。婆が燒き、その灰を塗つて盜人に行く。

天狗との交換と云はぬ。

大分縣　速見郡　昔研　二ノ四八

「隱れ簑笠」

〃　中津　人文　一ノ一

吉吾嘶。八卦見の道具と交換。灰塗・母も參與してゐる。

大分縣　吉四六さん物語　二二二

熊本縣　球磨郡　昔研　一ノ一三九

四話あり。

長崎縣　島原民話集　七二・二五九

二話あり。「天狗の骰子」「隱笠と隱簑」

智慧のはたらき

後の二五九　のものは後段のみで交換話無く、笑話。

長崎縣　(新)壹岐島昔話集　八四

「寶簑」

鹿兒島縣　甑島昔話集　一八〇

鳥園扇

寶物交換と云つてゐる天狗の隱簑の話を諫早地方では、「トリウチハ」といふらしい。

長崎縣　北高來郡江の浦　昔研　二ノ四一二

「天狗さん」

主人公は腕白な男の子、一文錢の穴をのぞいて諫早が見える、長崎が見えると云ふ。鳥園扇ととりかへる。

天狗が見えると出たらめを云つて驚かす方がおもしろい。

結末他と異り、村の地藏さんの祭に金持の娘の鼻を高くし、又德して金を買ふ(聟にはならず)。

天狗が交換の不利に心づく形これには無し。この點から見ればこちらの方が改作か。

何が一番怖い

蹤れ簑笠の後段。怪物と一番怖いものゝ問答をし、機智によつて福を授かる話。田野久にもある。

青森縣　八戸　　昔研　二ノ四四七

岩手縣　上閉伊郡雫石村　　聰耳草紙　五八

「寶鶏(たく)章」

やゝ寶物交換譚の形はあるが、中心は「そちや何が一番おかないでや」である。俺は小豆飯、俺は鐵砲の音。突然鐵砲の音をさせると寶ふくべを置いて逃げる。

岩手縣　稗貫郡　　口承文學　一〇ノ一一

「天狗と博奕打」の第三話。

天狗の怖いのは「モンダ株」俺は餅が一番怖いと云つて餡餅を投付けられる。

宮城縣　桃生郡　　郷土の傳承　三

小僧の怖いのは大福餅。天狗はバラに鼻をさゝれて困る。

話はこわれて居るが存在だけは分る。

埼玉縣　秩父大淵村　　昔研　二ノ一二七

「厄人神の仇討」　厄人神は厄病神のこと。

山梨縣　西八代郡　　續甲斐昔話集　一一五

「田野兵衛の話」

田野兵衛は芝居好きな孝行者。芝居の歸りに蟒に逢ひ問答あり。

蟒のきらひなは煙草の脂、俺は金。

千兩箱を打ちつけに來て後、村の者に脂で退治される。

山梨縣　東八代郡右左口村　　續甲斐昔話集　一二〇

「狸右衛門の話」

主人公は役者で孝行者。面を被つて見せることも問答もあるが脂で蟒を退治するばかりで金を授かることは無い。

神奈川縣　津久井郡　　同書　二五

「狐に化かされた殿様」

變つた點は二つ。娘に化けて田に水をひいてくれる狐と問答すること。後に狐に仇討をされること。

長野縣　　小縣郡民譚集　二三五

「ぼた餅きらひ」

こゝは子供二人のいさかひ話。サイカチバラとぼた餅。

岐阜縣　郡上郡　　昔研　二ノ二六七

「たのきう」

役者と蟒の化物。ことはたのきうへ歸る人と、地名のやうに云つてゐる。

岐阜縣　吉城郡上宮村　　ひだびと　五ノ四〇三

「七化八化」

役者と狐。狸と答へて田野久とは云はぬ。狐七化け。狸八化けとかつらを八回とりかへて見せる。

役者は金が怖いといふは可。狐が脂が怖いといふは意味無し。

大阪府　泉南郡　　口承文學　三〇

狸と蛇と役者、化けくらべの話から。二つの話の纏合せか。

攝津　　國民童話　二三

「白蛇の精」

役者が化けくらべの後問答。次めくぢと金がそれ〴〵怖い。ためくぢに化けると蟒はにげて仇討に大判小判を家に投げ込む。

島根縣　八東郡野波村　　昔研　二ノ三三

「博徒とさいの神」

破片ではあるがサイの神とある點注意。壹岐の寶物交換譚にも戴德神がある。

島根縣　　旅傳　三ノ一一八〇

「大判小判の雨」

〃　壹岐　　昔研　一ノ四一〇

「婆と天狗」

島根縣　　壹岐島昔話と方言　一〇

智恵のはたらき

「小判とボタ餅」

廣島市　　安藝國昔話集　一五九

「江波のお三狐」の話第四。

お三と鰻宙といふ鰻釣り、豬が怖いとて十圓札を貰ふ話。

廣島縣　山縣郡　　安藝國昔話集　一六七

「六兵衛と狐」

德島縣　名西郡　　昔研　一ノ一三三

「うはなみ」

蟒に白髭の爺に化け、子供は白狐の面でおどかす。何が怖いときくのは蟒の方だけ。

德島縣　美馬郡　　阿波祖谷山昔話集　九三

「節分の起り」

熊本縣　球磨郡久米村　　昔研　一ノ二二九

「狸だまし」

八代の蚕市話。

大分縣　中津　　人文　一ノ一

吉吾嶺。

長崎縣　　五島民俗圖誌　二三七

「孝行娘と狼」

孝行阪の話に近い。食ふと云つた狼と問答する。澁と煙草の脂が

嫌ひといふ。

この島には狼が居ないか？　　喜界島昔話集　八五

鹿兒島縣

「河童の恩返し」

河童と仲良くなり、毎夜家の周りの掛錠に魚をかけて行つて呉れるので氣味惡くなり、問答の後嫌ひの蛸をかけておいたら來なくなつた。

○參考

朝鮮　朝鮮民譚集　二七一

「彌勒豚と女」

田野久

「何が一番怖い」と同型。

怪談も笑話化すること、すでに曙笠などに例が見られる。この話は殊に言葉の葛藤である。

羽鳥縣　石城郡　　磐城昔話集　六三・一五六

新潟縣　南蒲原郡　　加無波良夜譚　一五五

「田之清の頓智」

タノキヨ、この地ではウ列はオ列に變り易いが、タノキユウより

この方が却つて自然に聞える。これがもとか。

なほ同書　二〇五　のは何が怖いの問答より豊の化物を退治する話がある。

山梨縣　西八代郡　　續甲斐昔話集　一一五・一二〇

「孝行者と蛇」

「何が一番怖い」　參照のこと。

岐阜縣　郡上郡　　昔研　二ノ二六七

「たのきゆう」

岐阜縣　吉城郡　　ひだびと　四ノ五六四

「金と吸殼」

平湯峠の久手に久作といふ炭燒男、男の人が來て煙草の吸殼が怖いといふので蛇と覺る。

これには田野の狸の事無し。一度有つたがこぼれ落ちたか。

この蛇が狐になつてゐる例。（昔研二ノ四四七）　青森縣八戸

山口縣　　周防大島昔話集

德島縣　　阿波祖谷山昔話集　一三七

熊本縣　　上益城郡誌

役者となつた小學生徒、田野久と名乘つて丹波大江山にてお化と問答する。お化けは煙草がきらひ。

長崎縣　　島原昔話集　九六

「田野久と大蛇」

一番普通の形。

長崎縣　　壹岐島昔話集　七九

「田野久」

○參考

民俗怪異篇　一九四

賢こ淵（水蜘蛛話）

昔山中の或沼で夏の頃男が釣をして居た。珍らしくその日は澤山釣れて僅かな間に魚籠一杯になつた。暑い日だつたので男は水中に足を浸して居たが、何處からか一匹の水蜘蛛が水の上を走つて來てその足の掛指に糸を繋けて行つた。さうして間もなく又來て同じ所に糸を卷きつけて行くので、不思議に思つてそつと指からはづして傍の大きな楊の木に卷きつけて置いた。するとやがて沼の底で、大勢を呼び集める騒がしたので驚いてゐると、魚籠の魚は一度に皆とび出して行つてしまつた。すると沼の中からえんやらさと掛聲がして、その蜘蛛の糸を引張りはじめたと思ふと、見てゐる前で太い株根つ子が根元から折れてしまつた。その後誰ひとりこの沼に釣りに行く者はないさうである。

——福島縣伊達郡——

この話には傳說として傳へられてゐる例もある。もとは退治譚であつたらう。

青森縣　八戸市　　昔研　二ノ四四八

水蜘蛛話の二、ここでは水蜘蛛退治の傳說として傳はつて居る。

柳の木の根株に美しい衣をかけておいて泥物を欺くこと。

此方が今ある普通のものより昔話らしく感ぜられる。

岩手縣　　九戸郡誌　四六八

山形村川井の藤平淵の傳說。昔藤平といふ者が釣をしてゐると、淵の中より掛聲聞えて、切株を引込みて笑聲あり。

岩手縣　　遠野物語　二七五

小鳥瀨川の蜘蛛の巢、顏にかゝるを木の切株にかけて置くとやはり根株が水に引込まれる。魚と思つたのも柳の葉であつた。

仙臺市　　昔研　二ノ四四八

「水蜘蛛話」の一　　高木敏雄氏傳說集　一二四

最後に水中に聲あり。賢い〳〵と言つたといふ。

福島縣　伊達郡　　日本昔話集　上ノ四七

「水蜘蛛」（例出）

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　一二三

「蜘蛛とやまめ釣り」

山梨縣　西八代郡　　續甲斐昔話集　一二四

下九一色の蜘蛛淵の傳說。淵の中で「ヨイシヨ」といふ掛聲。

愛知縣　葉栗郡　　愛知縣傳說集　二七

東淺井の池。大蛇、蜘蛛に化けて糸をかける話。又、鼈に化けて來て勇力ある男に片耳をとられ、片耳の大蛇となつて住む。

鳥取縣　　因伯民談　一ノ一八九

「彌六淵」

傳說として語られる。水中から「ヤリヨエエカ」といふ。「エエワ」と云つたら引込んで行くと云ふ。

彌六を人の名としたは後の變更。

德島縣　　阿波祖谷山昔話集　六四

水蜘蛛の怪に遇ふのが二人になつてゐる。

熊本縣　菊池郡　　高木敏雄氏傳說集　一二五

「勢返しの瀧」「おとろしが淵」

○參考

×愛媛縣北宇和郡明治村目黑　高木敏雄氏傳說集

ぬた待ちの狩人が「かんたろみゝず」「宿もり(がま)」「鹿」が順に强者に食はれるのを見て、狩を止めて歸らうとすると傍の樹上から、「獵師いゝ思案ぢやわた」と山鳥が云ふ。

支那よりの輸入話。說教に使はれたが、モーラルのみかはる。

×新潟縣南魚沼郡　越の風車　後ノ三(越佐叢書六ノ一〇九)

足の親指に「ヤジ」をかける。これを柳の木にうつしておけば根こぎにされること。

蛸の足の八本目

昔婆が海邊で洗物をして居ると、すぐその前に大きな蛸があらはれて、これを切れと云はぬばかりに一本の大足をさし出した。婆は早速その足を切取つて歸り喜んで食べた。翌日も又洗物をして居ると昨日の蛸が足を一本切り取らせかうして七日間續いたが八日目のことである。婆さんは今日こそ、頭も一緒に取つてやらうと思つて出かけて行くと、蛸はいつもの通り殘つてゐる一本の足を出して待つて居た。さうして婆さんがその足を切取らうとすると、急にその蛸がをどりかゝつて來て、殘りの一本の足を婆さんの首に卷つけて海の底に引つぱつて行つた。

――長崎縣南高來郡――

寓話の形になつてゐるが、もとは確談であらう。

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　二五七

「蛸と漁師」

三本目まで切取り四本目でまき込まれる。

こんな山村まで行はれてゐるのは不思議である。

愛知縣　知多郡　　愛知縣傳說集　九

オリン島の傳說として。

オリンといふ老女、八日目に章魚に引込まれる。

志摩　　國民童話　三八

「狼と蛸」

狼が先に六本食ひ、後の二本を狼にやると云つて、欺き寄せて引込む。

福岡縣　糸島郡　　筑前傳說集　四〇

長崎縣　南高來郡　　島原民話集　二六

「八本目の蛸の足」(例出)

同縣　　五島民俗圖誌　二三八

「親の仇討」

これは變型である。

○參考

×河内の俗信(口承文學　一一)百日咳の時蛸の足七本の繪を書き、壁に貼り、治れば八本にして流れのよい川に流すといふ。

×はたし飼(寛政小咄)

猫が櫺の下の蛸の足七本までを食ふ。「その手は食はぬ」の落語である。

×周防大島

家室西方村新宮の沖の甚平岩では老翁といひ、日良居村普崎では老婆といふが、共に二本づゝ蛸の足を切るとのみあつて八本目とは云はず。

大木の秘密

昔殿樣が御殿を建てゝその天井板はどうでも楠で張れと云ひつけられた。大きい楠が無いから家來を四方八方へやつて探させると。或村のお宮に一本の大木がある事が分つたので、すぐ何人もの杣に云ひつけて伐らせようとした。

杣達はその木の所へ行つてみると、十抱へも二十抱へもあるやうな大木で、皆して伐つても斧がはね返るばかりで仕事ははかどらぬ。親方は思案に餘つて考へ込んで居る中に居睡りをした。すると子供の樣に小さい人間が大勢出て來て話をしてゐる。この木を伐るにはたゞでは伐れるものではない。アラメを釜で煎じてその湯を木の根へかければ伐れるが、その外の事では決して伐れるものでは無い。人間は馬鹿でそんな事を知らないからをかしい、と話し合つた。

親方は眼がさめると早速にアラメを煎じてその湯を楠の根にかけた。すると一夜に蟻が澤山群がつて楠の根を食ひ、木の中を空

洞にしてしまつた。そこで柚が伐ると造作もなく伐れて早速殿様に差上げ澤山の褒美を賜はつた。

——山梨縣西八代郡——　遠野物語　一三〇

岩手縣　上閉伊郡

栗林村大田一ノ權現の大杉、夢に「セノ木」が來て燒伐りにせよと敎へた。

〃　雫石　旅傳　三ノ五

木屑の引つく話に千引傳說を伴ふ。

秋田縣　仙北郡　角館民俗資料　三二八

木の爭ひから鹽水をきり口にかけると、こつばがはね歸らぬことを立聽く、鳥や木の言葉を解する幸運な男、長者の病を治して出世する。

「聽耳頭巾」系、但しその植物の事は云はぬ。

長野縣　北安曇郷土誌稿　二ノ六八・七二

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　二四四

「柚を伐る話」〔例出〕

丹波　高木敏雄氏傳說集　四七

島根縣　能美郡　島根縣口碑傳說集　二一

福岡縣　三池郡　諸國物語　八五

葛の精に夢に敎へられ、葛を切ると大木が倒れる。

大分縣　豐後傳說集　一一七・三三

○參考

×矢之助杉の傳說　南紀土俗資料一九

×二郡見聞私記卷三（南部叢書　九ノ一八七）に木屑が引つく話。木片を燒き、切口に鹽を吹かけよとタラの木の告口。昔話風なり。

×今昔物語　近江の話。

さごりのわつぱ（又山諸間答ともいふ）

早く心學の資料となつてゐるが、もとは是も昔話であらう。

昔男があつた。山奥へ炭燒きに行つて、薪を集めて來て炭を燒いて居た。親爺は深い山中に一人で居ることが濕氣味惡くなつて來て、「恐いもんが出なけりやよいが」と思つた。すると何處からか「恐いもんが出たけりやよいが」といふ聲がして天狗が出て來た。親爺は恐くて〳〵「どうやつて逃げたらいゝか」と思つてゐると天狗は又「どうやつて逃げたらいゝか」といつて親爺の思つてゐることを皆云ひあてる。それで親爺はもうぼんやりしてしまつた。其時親爺の持つてゐた牛の鼻づる木が彈けて火をとばして天狗にかゝつた。天狗は「人間とは思はぬことをするものだ」と言ひ殘して向ふへ行つてしまつた。

——兵庫縣城崎郡三椒村——　聽耳草紙　一〇三

岩手縣　岩手郡

「箕輪曲げ」

小荒澤の喜太郎といふものゝ話になつてゐる。これでは山蛭が輪にはぢかれて死ぬと云つてゐる。

岩手縣　第一昔話號　三五

「山婆と桶屋」

箕の曲輪竹が火にあぶれすぎて火を彈く。だから人間は油斷が出來ないと。これは女性の例。

岩手縣　九戸郡誌　四五三

「ドチ」といふ惟鳥の傳說となつてゐる。上半は鳩で、下半は人間の形。若者の前に來て心中思ふ事を言ひあてる。寢錢箱がいつぱいになつてゐるので驚いてとび去る。

結末が變つてゐて意味がとり難い。

秋田縣　仙北郡

妖怪は貉。火に當つて大豪丸を出す。がんぢきをつくる手を不意に放すと彈かれて死ぬ。　聽耳草紙　一〇五

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　一三五

「炭燒と天狗」

長野縣　北安曇郡　小谷口碑集　一四七

〃　北安曇郡郷土誌稿　一ノ八九

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　一九九

「おもひの靈物」

怪物はおもひといふもの。

山梨縣　續甲斐昔話集　二四二

「さとりの化物」

炭燒とさとりといふ怪物と。おもふことよりもおもはぬ事の方が怖い。

岐阜縣　郡上郡　昔研　二ノ二六六

「山の神が來た話」

兵庫縣　城崎郡三椒村　昔研　二ノ四二一

「天狗と炭燒き」〔例出〕

これは古い形と思はれる。

こだま。山彥の經驗がもとなることがわかる。思案と獨り言をひとつに見た習はしから。

熊本縣　天草島民俗誌　一七一

「獵師と山わろ」

人物はすべて桶屋・炭燒・わげ師・箕作り・がは師。

○參考

越後南魚沼郡三國村二居
越の風車　越佐叢書　六ノ五二
「サトリ」といふ山の獣の話。

姥棄山

これは古い輸入らしい。この話に二通りありて、第一類は、棄老國語。隠し養ふ親の智慧で難題を解き幸福となる。難題は「灰縄千束」「三歳馬の親子」「蛇の雌雄」「蟻通し」「木の本末」等。

第二類は、山へ親を捨てに行つた子が、親の愛に感動して志を翻す更級式ともいへるもの。

親を捨てる動機にも、國の掟・殿の命令といふものと、女房の策略となすものと二種ある。往々傳説となつてゐるが、東北や南島には鄰の爺型になつてゐるものがある故、もとは昔話であつたことが判る。

第一類、第二類はよく混合折衷して語られる。

青森縣　八戸　　昔研　二ノ四四九
「灰縄千尋」「同」「牛と舟」「姥棄山型」の四話あり。はじめの三話は第一類、最後のは第二類で、これは妻の讒訴によつて山に捨てられた婆が神から大槌小槌を授けられて幸福に暮す。それを羨んだ妻は婆の通りに山へ捨てゝ貰ふが、眞似し損なつて燒け死ぬといふ話。

青森縣　　津輕昔ヨ集　三九
五十歳になつた親を命令により捨てに行くが、親が芥子種を梨にこぼすのを見て感動し連れ歸り匿す。

津輕口碑集　三
津輕昔話集（川合氏）
兄弟で捨てに行くが連れかへる。　奥南新報昭和十年八月十三日
これは極く普通の形である。

岩手縣　上閉伊郡　　老媼夜譚　九六
我子の「枂を持つて歸らう」の言葉から、親を捨てるのを思ひかへす。
これなど大分話らしくなつてゐる。

岩手縣　上閉伊郡　　聽耳草紙　六〇
「打出小槌」嫁の作略で山に棄てられた婆。鬼の子から打出小槌を取り女殿樣となる。嫁はその眞似をして燒死する。

岩手縣　　聽耳草紙　四五九
上閉伊郡昔話集　一六七
「老人棄場」　第一類。

岩手縣　　紫波郡昔話集　八九
「翁捨山」　第一、第二の折衷。

福島縣　石城郡　　磐城昔話集　六八・一五八
新潟縣　南魚沼郡六日市町　　昔研　一ノ三一四
「姥捨山の話」　第一類。

〃　南蒲原郡　　加無波良夜譚　一五五・一八六
南蒲原郡昔話集　一二〇
第二類と「難題聟」と結合したもの。

新潟縣　　佐渡昔話集　九六
石川縣　　江沼郡昔話集　七〇
「年寄の手柄」

長野縣　小縣郡　　昔研　一ノ三六
「淺捨の話」　殿樣のおふれに背いて山中に隠し、母の枝折によつて道に迷はず歸へる。殿樣これを聞き感心して改心。難題のことなし。
一類と二類の結び目。

長野縣　伊那郡　　むかし話　七八
岐阜縣　郡上郡　　昔研　二ノ二六七
第一類・第二類の折衷。

山梨縣　西八代郡　　甲斐昔話集　九六
智慧のはたらき

「親棄譚」第二類。

靜岡縣　土肥　　鄕土研究　三ノ二四三
六十二歳で親を捨てたといふ傳説。　第二類。

兵庫縣　氷上郡　　旅傳　一〇ノ七ノ五二
鳥根縣　隱岐黒木村　　昔研　一ノ四一〇
「老人を捨てる話」　第一類。

岡山市外　　第二昔話號　七九
「老人の智慧」　第一類。

岡山縣　　岡山文化資料　二ノ六ノ三一
廣島縣　　藝備「昔話の研究」　九八・一一五
「斧捨山」　　安藝國昔話集　一二三

香川縣　志々島　　昔研　二ノ二〇五
長崎縣　　壹岐島昔話集　一一〇
孝子の老父を捨てかねる話。小縣郡の「婆捨の話」と相似。

熊本縣　天草　　昔研　一ノ五二四
第一、第二の折衷。昔研　五二五頁の類話は第二類。

〃　「親を捨てる體」　第二類。　鄕土研究　五ノ一七七
鹿兒島縣　　薩島昔話集　一〇六
「親捨山」第一、第二の折衷。

鹿兒島縣　　喜界島昔話集　一三〇

「鼠になつた嫁」

捨てられた母、山神に祈つて地を叩けば何でも出て幸となる。

嫁は鼠となる。

沖縄縣　南島說話　一一六

老人が六十一になると生埋めにしてゐたが、難題をといて貰つてからは大切にするやうになつた。

○參考

×朝鮮　朝鮮民譚集　三九

同書　附四　に維摩藏經一　及び二に類話すること見ゆ。

これは飜譯。

×太和物語　下

×俊賴無名抄

×今昔物語三〇卷　下ノ五七五

×續歌林良材集　上ノ二七一

×扶桑故事要　三〇四（廣文庫）

×異甜鎖語　二卷九ノウ

×雜談集四　昔大國の王。政をつとむるに四十になれば親を埋めて殺しけり。棄老國、後には養老國の事也――と、のみありて說話なし。

×タラウストン　下ノ三七三　「不孝の子」

灰縄千束

このテーマの「難題譚」に屬するものは主に東北にあり。他の地方では「姥捨山」に伴ふ。

女房の智慧

ある商人が江戸へ木花（染料にする花）を賣りに出る道中の旅籠屋で、宿の女將とその家の雞の掛圖が鬪を作る作らぬで賭をして負けて木花を皆とられて歸つた。婦は口惜しがつて仇討に倍の木花を持つて出掛け、その旅籠屋で同じ賭をし、夜の間に掛圖の雞の喉を針で縫つておいたので雞は鳴かず、婦は木花の代金を取つて歸つた。

――新潟縣南蒲原郡――

これは二度目の取返しが中心になるので、復讐者が妻でない場合もある。

岩手縣　稗貫郡　昔研　一ノ三七

「餅食ひ」息子の復仇。一斗の餅食ふ賭。

新潟縣　南蒲原郡　加無波良夜譚　四八

「鶏の掛圖」（例出）

山梨縣　西八代郡　甲斐昔話集　一二六

「お茶賣りと木刺籠」

廣島縣　安藝國昔話集　一九三

「雞の掛圖」例話との關係面白し。

鹿兒島縣　薩島昔話集　一一四

「鮐荷賭け」

鹿兒島縣　大島郡喜界島　島　二ノ四三一

喜界島昔話集　一四九

「兄弟」　兄弟仲惡く、弟は近所の男と兄弟のやうに交際してゐた。或日弟は山で大猪を射止め近所の男に「今日は山で猪と間違へて人間を射ち殺したが、人に知れぬやう片付けたいから加勢してくれ」と頼む。かねては兄弟のやうでもそこは他人で、かゝり合ひを恐れてついて來ぬ。兄は驚いて直ぐに山へ行く。眞相を知つた近所の男は恥ぢて顏を出さなくなり、兄弟は仲直りして何時までもむつまじく暮した。

兄弟話の形を借りてゐる。

輸入ではなささうだが、改作は確か。

餅を食つて屁を食ふと見せかけた花嫁の話は後の作りものか、東北にもある。（島　二ノ四七〇）

智慧のはたらき

盜人女房

妻は盜人將で、毎日夫に向つて盜んで來い〳〵と言ふ。夫が牛を盜んで來れば、角に油を塗つて燒いて角の形を隱へるので役人にも摑まらぬ。餘り盜め〳〵といふので夫が困らしてやらうと思つて、墓場から死體を掘出して持つて歸つた。妻は死體を半櫃に入れて縁側に置いてから、他の二人組の盜人の家に遊びに行つて暫くして「おや大變な物忘れをした。縁側に寶物の半櫃を出し忘れたから早く行つて始末せねばならぬ」と言つて其家を出ると、寶物と聞いた二人の盜人は、先廻りして行つて一人が半櫃をかたげて逃出した。やがて後の男が中身に氣がついて「人だ〳〵」と叫ぶと、先の男は「人だから逃げるのだ」――と一生懸命走つたと。

――鹿兒島縣喜界島――

分別八十八などの死屍處分の話もこれから出たかと思はれる。又酒屋をおどした話なども。

青森縣　八戸　昔研　二ノ四五一

嫁の母に使はれて三度まで盜みをする。最後に盜んで來た女の死屍は、化粧をして酒屋の戸口に立てかけ、これゐ倒した酒屋をゆ

する。

岩手縣　氣仙郡　　聽耳草紙　一三三

「惡い寡婦」　怠者が後家に命ぜられて女の屍を拾つて來て、これで酒屋をゆするのは八戸に同じ。

「夜稼ぐ聖」これは舅の惡智慧、嫁様を欺く。

新潟縣　南蒲原郡　　加無波良夜譚　二〇〇

「娘の盗人」　男を使つて盗みをさせる女盗人。

長野縣　　小縣郡民譚集　一六三

爺が山で水を飲まうとして見つけた娘の死屍を、婆の策略により金にする。

鹿兒島縣　　島　二ノ四二八

「人だ人だ」〔例出〕

盗賊の賭

兄弟話に屬するもの多し。「五郎の欠椀」參照のこと。不道德な要素のものは古からう。

長崎縣　　島原半島昔話集　一一六

「千兩箱泥棒」　黍餅を女中の尻に云々といふ笑話を伴ふ。

さう僞つたのでないのは「鳥呑」に近い。

岩手縣　　黄金の馬　一〇〇

〃　上閉伊郡　　老媼夜譚　二三三

「馬喰八十八」　　聽耳草紙　一一九

秋田縣　角館　　第二昔話號　八四

「五人太郎作」

新潟縣　南蒲原郡　　加無波良夜譚　一四一

〔例出〕分別八十八と半分以上同じ。

廣島縣　高田郡

「分別儀平」

鹿兒島縣　　甑島昔話集　一八三

「分別孫左衛門」

○參考

×朝鮮民譚集　三一四　間男をした妻を懲らす話。

×ユエ一〇　昔研　二ノ二五七に譯あり。

俵藥師

雖つき小僧といふ親不孝者が父と山へ木樵りにゆき、家へ歸りたいので「腹が痛い〳〵」と泣出す。「それでは家に歸つて寢て

智慧有り殿

才智に富む智慧有殿が、頓死した村の旦那様の死體の始末の相談に乘つて、先づ若い衆が博奕をしてゐる處へ持つて行つて立掛けると、若者は誰か覗きに來たと思つて、棒ではたきつけたので死體は倒れた。「さあ村の旦那様を殺した」と驚いて又智慧有殿に相談する。今度は旦那様の戸口で「今歸つた、開けてくれ」と言つた。夜遲いので嫁様が怒るので「それでは井戸の中へ飛込んで死んでしまふ」と言ふや、死體を井戸へ投込んで逃げて來る。嫁様は旦那が身投したと思ひ、是亦智慧有殿に相談する。今度は旦那をせいろで蒸してから「旦那が熱病だ」と言つて醫者を呼ばせる。飛んで來た醫者は眼を見て「お氣の毒ですがもう早や息が切れました」と言つたので葬禮を出すことが出來た。智慧有殿は皆から澤山お禮金を貰つてえらい儲けをしたといふ。

——新潟縣南蒲原郡——

青森縣　下北郡栗山　　奥南新報　一五ノ一ノ一三

「大袋小袋」　小袋は婆を殺され、それを利用して酒屋で金をとる。結末は「俵藥師」の形。これには明かに馬の皮が物を言ふと出てゐる。

ゐろ」と言はれて喜んで歸つて來ると母親に向つて「お父つさんが山で大怪我をして死んだから早く尼になつて供養をしな」と言つた。母親が髪を切つて佛壇の前で拜んでゐる所へ親父は木を澤山背負つてひよつこり歸つて來た。事情を聞いて「こんな親不孝息子は藁づとの中へ入れて大河へ流してしまへ」と、早速大きな藁づとを拵へて息子を入れ軒下へ置いた。そこへ盲按摩が來て藁づとにつまづいたので息子は中から「誰だ」ととがめる。盲だから勘辨しろといふので「俺も盲だが、この藁づとに入つてゐたら急に目が見えるやうになつた。お前も治るから入れ」とだまして息子は盲按摩と入れかはつてしまつた。そこへ父親が出て來て、藁づとを抱へて大河へ行つて流してしまふ。

息子は五六日山に隱れてゐてから、魚屋から鰤引一丙借り受けて家に歸り「この鰤引は河で拾つて來た、親達も早く行つて拾つて來う」と、兩親を無理に藁づとに入れ、大河に流してしまつたと、おしまへ。

——栃木縣芳賀郡道川村——

岩手縣　　聽耳草紙　一一九

「馬喰八十八」智慧有殿・俵藥師其他の複合。

〃　　紫波郡昔話集　六五

「阿野樣」

秋田縣　仙北郡　　昔研　一ノ五〇五
「殿樣と下僕」
「桃賣り殿樣」と近くなる。
福島縣　石城郡　　磐城昔話集　六九
栃木縣　芳賀郡　　第二昔話號　八五
　　茂木昔話集　一八
「親不孝息子の話」〔例出〕
長野縣　　小縣郡民譚集　二三九
　俵藤師は目の養生――と唱へて目の惡い牛引をだます。
〃　北安曇郡　　小谷口碑集　一四八
廣島縣　比婆郡　　舊傳「昔話の研究」一一七・一三五
　これは兄弟話である。
鳥取縣　　阿波祖谷山昔話集　一二五
福岡縣　糸島郡　　福岡縣昔話集　九九番
　福間又兵衛にもこの話がある。
熊本縣　玉名郡　　昔研　一ノ八二
「錢垂れ馬」の後段。
鹿兒島縣　　甑島昔話集　一八八
「オーバ話」の後段。
〃　奄美大島　　昔研　二ノ二三八

兄弟話の一部分。
よい弟が兄を殺すのは少し變だ。後に付いたものと思はれる。
○參考
×朝鮮の物語集（高橋亨氏）「片身奴」
×國外類型資料　昔研　一ノ二九四
　グリムの「かぶら」「小百姓」

錢垂れ馬

ある馬喰が牛を連れて來て、これこの通り牛が金の糞をしたから買はぬかと勸める。是はきつと儲かると思つて、すぐに高い値で買取つたが、幾日經つても金の糞をせぬので、馬喰に食つてかかると「金を食べさせぬと金の糞はせぬ」と言つた。

――紀州熊野――

黃金小犬と二人兄弟話との笑話化。もとは兄弟話で、後には獄かれるのが長者、話の前半を誇張したもの。

岩手縣　　江刺郡昔話　七
「或兄弟の話」　金ひり馬で兄をだました後、これはひとりでに炊ける岡釜だと稱してたゞの釜や、怪我人をたほすと稱して古鏡簞を賣付ける。

巢鶴のおもしろさから次々に新趣向發明せらる。

岩手縣　上閉伊郡　　聽耳草紙　四八七
「傘の繪」　繪に畫いた女が雨の日には持つてゐる傘を擴げるとだまして軸物を高く賣付け、後に詰られて「假を食はせたか」と問ひかへし、いゝやと答へると「それでは腹が空いて力が無くなつたのだ」。
福島縣　　磐城昔話集　一七五
長野縣　南安曇郡一日市　　有賀氏
　兄弟話となつてゐる。
和歌山縣　熊野　　第一昔話號　六五
「黃金の牛」〔例出〕
島根縣　　旅傳　三ノ九ノ一八
　　島根口碑傳說集　三七
「出雲仁右衛門」
山口縣　周防大島
　金の卵を生む雞。燒かずの釜。
　つなぎ目甚だ拙し。
鳥取縣　　阿波祖谷山昔話集　一〇六
福岡縣　糸島郡　　福岡縣昔話集　九八番
　錢食はせにや錢垂れん。
　智慧のはたらき

長崎縣　　島原半島昔話集　一〇九
「金を屁る馬」　火吹竹で婆を生返らせたり、馬に錢糞をたれさせたりして金持の弟を欺く。
大分縣　　旅傳　一ノ五ノ一八
「吉右話」　慾深の叔父をだます。
熊本縣　玉名郡　　昔研　一ノ八二
○參考
×醒睡笑　一三　且九郎・田九郎。
×東海道名所記　三上山の條に秀郷のことあり。
×ユエ九　獨りで煮えス釜・金ひり馬。

金の茄子

王樣があつて一歳にたる男の子があつた。或日その母が大勢の中で屁を放つたので、王樣は大變怒つて母子をウツワ舟にのせて流した。男の子は大きくなつて此事を知り、十三歳の時に母に暇を貰つてもとの島へ渡つた。王樣の門前で毎日「金のなる茄子の種は要らぬか」と呼ぶので、王樣が本當かとたづねると「如何にも金がなるが、屁を放らぬ人が蒔かねばならぬ」と答へ「屁を放らぬ人間があるか」と言はれて「それたら何故母はとがめられま

したか」と詰る。王様も感じて早速母子を引取り、この賢い子供を後取りにした。

——鹿兒島縣大島郡喜界島——

岩手縣　紫波郡昔話　一七五
〃　同書　四
福島縣　「黄金の生る吹花」　磐城昔話集　七九
新潟縣　「あくびをした奥方の話」　佐渡の昔話　一九五
〃　佐渡島昔話集　一二二
〃　佐渡昔話集　二三七
〃　昔研　二ノ二七五
廣島縣　「金のなる木」　うとう舟で流れて來た貴女の話。　藝備「昔話の研究」　七七
長崎縣　對馬　土ノ香　一六ノ五
同縣　壱岐島昔話集　三
第一昔話號　八三
熊本縣　「ウツロ舟の女」　天草　鄉土研究　五ノ一七七
「黄金の瓜」

鹿兒島縣　喜界島昔話集　七九
〔例出〕　島　二ノ四二八・四六八
島　一ノ三ノ三〇
〃　沖永良部島　おきえらぶ昔話　一七六
「黄金花咲く珠」
「島の默示錄」の中にあり。（旅傳　一〇ノ六ノ一一）
傳說として殘つてゐるもの。

日輪の下し子

鹿兒島縣　喜界島昔話集　二四
島　二ノ四八七
「金の茄子」系話。太陽の下し子が名乘つて出て、天の命令でオソウシ（占者）の始めとなり、母はユタ（巫女）の始めになつた。現の家に傳はる傳說か。

話千兩

昔或男が女房と母とを國に殘して他國で稼いで金を貯めて、何年ぶりかに故鄉へ還らうとする時に、何かよい話を國への土產にしようと思つて寺の住持に賴むと、三つの話を敎へてくれた。一つは「人は寄つても身は寄るな」もう一つは「大木より小木」第三には短氣は損氣といふので、始め二つの話のお蔭で生埋めや落雷の難を逃れて無事歸宅する。家に入らうとすると障子に映つた影が女房と圓い頭をした坊さんで、仲睦まじさうに話をしてゐる。カッとして鎌に手をかけたが、「短氣は損氣」を思ひ出して鎌を投出し家へ入つてみると坊さんと思つたのは我が母で、のぼせるので髮を剃つてゐたものであつた。お寺の和尙の話は何より結構なお土產であつた。

——香川縣小豆島——

岩手縣　聽耳草紙　五〇六
「話買ひ」　話は話賣りの爺樣から買ふ。
〃　老媼夜譚　一八二
〃　稗貫郡　第二昔話號　四二
同縣　紫波郡昔話集　一四六
「話賣り」一話百兩のを二話買ふ。「寶化物」と複合。
福島縣　磐城昔話集　七一
上野國　國民童話　一一八
栃木縣　下野茂木昔話集　二
江戸に袈裟賣りに出て儲けた三百兩で、百兩の話を三つ買ふ。

智慧のはたらき

「地藏淨土」的要素。
石川縣　江沼郡昔話集　一三三
「おやぢの人形」
福井縣　坂井郡　昔研　一ノ三二
「話買ひ」　江戸へ米つきに出て諺を買つて來る。
長野縣　北安曇鄉土誌稿　二ノ九六
岐阜縣　吉城郡　ひだびと　五ノ六
山梨縣　甲斐昔話集　八五
「三つの勘辨」　續甲斐昔話集　三二二
大阪府　泉北郡取石村　和泉昔話集
「智慧賣り所」
島根縣　邑智郡　昔研　二ノ四一五
「一口話せば一貫文」と高札を立てゝおくと旅で三貫目儲けた男が見て聞く、云々。
これは破片であらう。
香川縣　小豆島　第一昔話號　七一
〔例出〕
岡山縣　御津郡　昔研　一ノ三六一
「十五兩の話」